陣ノ内館跡

平成27年3月

甲佐町教育委員会

陣ノ内館跡遠景　緑川下流を望む

巻頭図版２

陣ノ内館跡近景　南西から

巻頭図版３

陣ノ内館跡近景　西から

序　文

一級河川緑川の中流域に位置する熊本県甲佐地域に住んだ祖先たちは、古来より歴史を紡ぎ、多くの痕跡を残しながら、今現在の甲佐町を作り上げました。

阿蘇神社の末社として古くから多くの信仰を集めてきた甲佐神社や、樹齢700年を超える麻生原のキンモクセイ、加藤清正の偉業を残す鵜ノ瀬堰等は、私たちに歴史を語り、自然や文化の大切さを教えてくれます。そしてそれら文化財を、将来にわたり引き継いでいくのは私たちの責務でもあります。

本書は、「陣ノ内館跡」の文化財調査報告書です。現地に残る、幅15メートル以上、総延長400mを超える堀、高さ5メートル、延長200m以上にわたる土塁などの大規模な遺構は見るものを圧倒し、私たちは遺跡の在りし日はどのような姿だったのか、想像をかきたてられます。今回の調査での、堀や土塁の発見などの新たな成果は、甲佐の歴史をさらに掘り起こし、その歴史的意義は戦国末～近世期における肥後国の領国支配において重要な役割を果たした可能性を示唆するものでした。

本報告書が、学術資料としてのみならず、学校教育・生涯学習など多方面にわたり活用され、皆様の文化財に対する知識と保護意識高揚の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査及び整理・報告に際しご協力いただきました地元下豊内区の皆さんを始め、文化庁及び熊本県教育委員会等関係各位、また御指導・御助言頂きました諸先生方には心より感謝申し上げます。

平成27年3月　甲佐町教育長　赤星眞照

例　言

1　本書は、平成 20 ～ 25 年度に甲佐町教育委員会が熊本県上益城郡甲佐町大字豊内字陣ノ内において実施した町文化財「陣ノ内館跡」の文化財調査報告書である。
2　本調査は、保存目的の範囲確認調査として、甲佐町教育委員会が実施した。
3　現地での測量は、世界測地系に基づく。
4　測量は、一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、その他を甲佐町教育委員会が行った。土色は『新版標準土色帖』1967 年によった。また報告書作成に係る製図及び編集は、村田理恵・上妻眞智子・今村愛が行った。報告書内で用いた地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、甲佐町が調整したものを使用した。（承認番号　昭 55　九公第 120 号）また、字図は昭和 58 年度～平成 15 年度に甲佐町が実施した地籍調査に基づき作成されたものを使用した。
6　陣ノ内館跡出土の遺物実測及び製図の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、その他を村田･上妻が行った。また、遺物の所見については小野正敏氏･大橋康二氏・美濃口雅朗氏・前川清一氏の協力を得たほか、調査に伴う文書資料の翻刻は佐藤征子氏の協力を得た。
7　陣ノ内館跡の遺構の写真撮影は、一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、その他を担当の西口貴志が行った。
8　本書に関わる図面・写真・遺物は、甲佐町教育委員会において収蔵・保管され、本報告に係る全ての成果は甲佐町教育委員会に帰属する。
9　本書のうち、第 2 章第 1 節を池辺伸一郎氏、第 4 章第 1 節を稲葉継陽氏、第 4 章第 2 節を鶴嶋俊彦氏に依頼し、その他章節の執筆及び報告書全体の編集は西口が行った。

目　次

巻頭図版……1
序文……3
例言……4
挿図目次……5
写真目次……6
第１章　はじめに……7
　第１節　調査に至る経緯・組織……7
　第２節　発掘作業及び整理作業の経過……9
第２章　陣ノ内館跡の位置と環境……11
　第１節　陣ノ内館跡付近の地形と地質……11
　第２節　歴史的環境……15
　第３節　陣ノ内館跡の概要……19
第３章　調査の方法と成果……23
　第１節　調査の方法……23
　第２節　層序……23
　第３節　発掘調査の概要……25
　第４節　出土遺物……49
　第５節　その他関連調査……64
第４章　付論……73
　第１節　文献史料からみた陣ノ内館……73
　第２節　陣ノ内館跡の構造・年代・築城者……84
第５章　総括……98
　第１節　はじめに……98
　第２節　調査の成果……98
　第３節　今後の課題……106
写真図版……108
報告書抄録……115

挿図目次

図２－１　甲佐町中心部付近の東西断面推定図（甲佐町水道水源保全対策調査報告書より引用）……11
図２－２　陣ノ内館跡付近の赤色立体地図……12
図２－３　甲佐町遺跡地図……16
図２－４　陣ノ内館跡現況地形図……20
図２－５　明治34年大日本帝国陸地測量部刊図……21
図３－１　トレンチ配置図……24
図３－２　Ⅰ区・Ⅱ区　平面図……26
図３－３　Ⅰ区・Ⅱ区　土層断面図……27
図３－４　地下確認箇所分布図……29
図３－５　１トレンチ　平面・土層断面図……30
図３－６　２トレンチ　平面・土層断面図……30
図３－７　３トレンチ　平面・土層断面図……30
図３－８　４トレンチ　土層断面図……31
図３－９　５トレンチ　土層断面図……31
図３－10　６トレンチ　土層断面図……31
図３－11　７トレンチ　平面・土層断面図……32
図３－12　８トレンチ　平面・土層断面図……33
図３－13　９トレンチ　平面・土層断面図……34
図３－14　10トレンチ　平面・土層断面図……34
図３－15　11トレンチ　平面・土層断面図……34
図３－16　12トレンチ　平面・土層断面図……34
図３－17　13トレンチ　平面・土層断面図……35
図３－18　14トレンチ　平面・土層断面図……36
図３－19　15トレンチ　平面・土層断面図……37
図３－20　16トレンチ　平面・土層断面図……38
図３－21　17トレンチ　平面・土層断面図……39
図３－22　18トレンチ・24トレンチ平面図……40
図３－23　18トレンチ（深部）東壁土層断面図……40
図３－24　19トレンチ　平面・土層断面図……41
図３－25　19トレンチ土塁上段見通し土層断面図（北から）……41
図３－26　20トレンチ　平面図……41
図３－27　21トレンチ　平面図……42
図３－28　21トレンチ　土層断面図……42
図３－29　22トレンチ　平面図……43
図３－30　23トレンチ　平面・土層断面図……43
図３－31　25トレンチ　平面・土層断面図……44
図３－32　26トレンチ　平面・土層断面図……45
図３－33　27トレンチ　平面・土層断面図……46
図３－34　28トレンチ　平面・土層断面図……47
図３－35　29トレンチ　平面・土層断面図……48
図３－36　30トレンチ　平面・土層断面図……48
図３－37　Ⅰ区出土遺物……50
図３－38　Ⅱ区出土遺物……50
図３－39　２トレンチ出土遺物……52

図３－40　３トレンチ出土遺物…… 52
図３－41　４トレンチ出土遺物…… 52
図３－42　７トレンチ出土遺物…… 52
図３－43　８トレンチ出土遺物…… 52
図３－44　９トレンチ出土遺物…… 53
図３－45　10トレンチ出土遺物…… 53
図３－46　11トレンチ出土遺物…… 53
図３－47　12トレンチ出土遺物…… 53
図３－48　13トレンチ出土遺物…… 53
図３－49　14トレンチ出土遺物…… 55
図３－50　15トレンチ出土遺物…… 55
図３－51　18トレンチ出土遺物…… 55
図３－52　19トレンチ出土遺物…… 57
図３－53　20トレンチ出土遺物…… 57
図３－54　21トレンチ出土遺物…… 57
図３－55　24トレンチ出土遺物…… 57
図３－56　25トレンチ出土遺物…… 57
図３－57　26トレンチ出土遺物…… 57
図３－58　27トレンチ出土遺物…… 57
図３－59　表面採集遺物…… 57
図３－62　逆修の碑１・２　実測図 …… 65
図３－63　逆修の碑１・２　拓本 …… 66
図３－64　安養寺関連遺物　水輪実測図…… 69
図３－61　地形図及び字図合成図（登城道）…… 71
図３－60　問きとり調査記録図…… 72
図４－１　豊内地区の戦国期遺跡図…… 80
図４－２　陣ノ内館跡位置図（鶴嶋俊彦原図）…… 85
図４－３　陣ノ内館跡縄張り復元図
（鶴嶋俊彦原図）…… 87
図４－４　陣ノ内館跡の城道（鶴嶋俊彦原図）…… 88
図４－５　鎌倉時代の阿蘇大宮司館跡
（南阿蘇村二本木前遺跡）…… 89
図４－６　南北朝時代の阿蘇大宮司館跡
（南阿蘇村抵関遺跡）…… 90
図４－７　戦国時代の阿蘇大宮司館跡
（山都町「浜の館」跡）（鶴嶋俊彦原図）… 91
図４－８　甲佐町松尾城跡（鶴嶋俊彦原図）…… 92
図４－９　美里町堅志田城跡（鶴島俊彦原図）…… 93
図４－10　肥後国主要城郭の横堀断面図
（鶴嶋俊彦原図）…… 95
図５－１　各トレンチの土層断面模式図…… 99
図５－２　字図及び地形図の合成図…… 101
図５－３　堀・土塁推定ライン …… 102
図５－４　地形から見た緑川の流路と
他の推定流路
（点線は旧緑川流路・矢印はその他の
流路）…… 103
図５－５　陣ノ内館跡の縄張り想定図…… 104

写真目次

巻頭図版
陣ノ内館跡遠景　緑川下流を望む…… 1
陣ノ内館跡近景　南西から…… 2
陣ノ内館跡近景　西から…… 2
写真２－１　甲佐町西部から見た東部の山塊……11
写真２－２　緑川左岸の溶結凝灰岩の崖……11
写真２－３　甲佐町西部の台地……11
写真２－４　陣ノ内館跡の空堀……13
写真２－５　空堀の壁に見られる砂礫層……13
写真２－６　クロスラミナ（斜交層理）の
見られる砂層……13
写真２－７　緑川左岸に見られる砂礫……13
写真２－８　砂礫層の堆積状況……13
写真２－９　Ⅰ区　石列遺構出土状況（北から）…14
写真２－10　Ⅱ区　石列遺構出土状況
（北西から）……14
写真２－11　16トレンチ
石敷き遺構出土状況（西から）……14
写真３－１　使用した道具……28
写真３－２　作業風景……28
写真３－３　４トレンチ掘削状況（南から）……31
写真３－４　５トレンチ掘削状況（南から）……31
写真３－５　６トレンチ掘削状況（南から）……31
写真３－６　16トレンチ掘削状況（東から）……38
写真３－７　16トレンチ石列出土状況（東から）…38
写真４－１　下豊内の逆修碑……74
写真４－２　上豊内旧老人ホーム付近での
石造物発掘状況……81
写真図版
写真図版１　昭和22年11月19日　米極東空軍撮影 108
写真図版２　陣ノ内館跡周辺の旧字図
明治時代作成…… 109
写真図版３　虎口出土状況　東から…… 110
写真図版４　虎口出土状況　南から…… 110
写真図版５　14トレンチ　堀検出状況　西から… 111
写真図版６　21トレンチ
堀理土堆積状況　南から…… 111
写真図版７　24トレンチ　堀検出状況　東から… 111
写真図版８　25トレンチ
土塁検出状況　北東から…… 112
写真図版９　25トレンチ　土塁堆積状況　南から 112
写真図版10　27トレンチ　土塁堆積状況　北から 112
写真図版11　19トレンチ
土塁北面堆積状況　北から…… 113
写真図版12　17トレンチ　土塁堆積状況　東から 113
写真図版13　Ⅱ区　石列検出状況　南東から…… 113
写真図版14　Ⅰ区東側出土状況　北から…… 113
写真図版15　Ⅱ区東側
石列下層出土状況　南西から…… 113
写真図版16　Ⅱ区東側　石列完掘状況　西から… 113
写真図版17　22トレンチ　出土状況　南東から… 113
写真図版18　23トレンチ
石敷き遺構完掘状況　東から…… 113
写真図版19　出土陶磁器　12世紀～14世紀…… 114
写真図版20　出土陶磁器　16世紀～17世紀…… 114

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経緯・組織

1　経緯

甲佐町役場東側、「陣ノ内」の字名を残す丘陵地上に造られた「陣ノ内館跡」は、400mに及ぶ大規模な空堀や土塁を備えた城跡である。1970年代に行われた熊本県教育委員会による中世城郭の悉皆調査以後、現地に大規模な遺構を残す中世期の阿蘇大宮司の館跡として注目されるが、具体的な調査はほとんど行われることなく、その範囲や構造は不明のままであった。その後中山間地域総合整備事業等により遺跡の範囲に開発計画が及ぶことになると、遺跡の重要性からその詳細を明らかにし遺跡の果たした歴史的意義を明らかにする気運が高まる。遺跡の中心部に計画が及ぶことはなかったが、新たな歴史遺産となる可能性を秘めることからその範囲・構造を明らかにし、遺跡を将来にわたり適切な保存・管理・活用をはかることを目的に甲佐町教育委員会が主体となり平成20年度から発掘調査及び関連調査事業を実施した。

2　組織

調査事業は平成20年度から実施、平成26年度に調査報告書を刊行した。

【平成20年度】
教育長　溜渕誠也
社会教育課長　井芹雅洋
社会教育係長　上田　悟
社会教育係　西口貴志（調査担当）

【平成21年度】
教育長　溜渕誠也
社会教育課長　岩永友春
社会教育係長　上田　悟
社会教育係　西口貴志（調査担当）

【平成22年度】
教育長　溜渕誠也
社会教育課長　山内亮一
社会教育係長　上田　悟
社会教育係　西口貴志（調査担当）

【平成23年度】
教育長　赤星眞照
社会教育課長　山内亮一
社会教育係長　上田　悟
社会教育係　西口貴志（調査担当）

【平成24・25年度】
教育長　赤星眞照
社会教育課長　上田　悟
社会教育係長　伊藤公晴
社会教育係　西口貴志（調査・整理担当）
文化財専門員（臨時）　村田理恵（整理担当）

【平成26年度】
教育長　赤星眞照
社会教育課長　上田　悟
社会教育係長　伊藤公晴
社会教育係　西口貴志（整理担当）

【陣ノ内館跡調査専門委員会】○は委員長

○甲元眞之（熊本大学名誉教授）・小野正敏（前大学共同利用法人人間文化研究機構理事）・稲葉継陽（熊本大学教授）

【助言・指導】

文化庁文化財部記念物課　　熊本県教育庁文化課

【調査指導】

池辺伸一郎（阿蘇火山博物館）、鶴嶋俊彦・美濃口雅朗（以上熊本城調査研究センター）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、前川清一（熊本県文化財保護指導委員）、佐藤征子（熊本県文化財保護審議会）

【調査協力】

西住欣一郎・村崎孝宏・廣田静学・馬場正弘・帆足俊文・能登原孝道・木庭真由子・水野哲郎（以上熊本県教委）、金田一精（熊本市教委）、高木恭二・藤本貴仁（以上宇土市教委）、中山圭（天草市教委）、山内淳司（八代市市民協働部）、西慶喜・大津山恭子（以上山都町教委）、水上仁（美里町教委）、尾原祐三・麻植久史・吉永徹（以上熊本大学工学部）、三木靖（鹿児島国際大学）、高崎章子（大分県中津市教委）、肥後考古学会、南九州城郭談話会、甲佐町文化財保護委員会

【発掘作業員】

天内得美（H20 ～ 21）、荒木曼（H20 ～ 21）、伊佐徹（H22）、今村愛（H23）、上村忠義（H20 ～ 24）、上村祐史（H21）、内田義紀（H20 ～ 23）、甲斐幸子（H20 ～ 26）、甲斐園子（H20 ～ 22）、甲斐博（H21）、門添敬誠（H21）、鎌田慶子（H23）、清村一郎（H20）、清村一男（H21 ～ 23）、栗林博正（H21）、上妻眞智子（H22）、小林光義（H21）、佐藤総司（H23）、佐野智子（H22）、園田秀樹（H21 ～ 22）、高濱美來（H20）、豊田セイ子（H20 ～ 22）、西川セイ子（H23）、西谷博憲（H20 ～ 21）、西本敏春（H23）、西山昭雄（H21）、日隈征夫（H20 ～ 24）、藤田新一（H22）、舛永潤（H22）、三浦由人（H23）、皆本誠喜（H21）、村上光治（H22 ～ 26）、村上敏幸（H20）、山下崇（H22）、吉崎孝（H20 ～ 24）、米村幸一（H22）、六田廣子（H23）、渡辺公（H23 ～ 24）

【整理作業員】

今村愛（H24 ～ 25）、上妻眞智子（H24 ～ 26）

敬称略・順不同

第２節　発掘作業及び整理作業の経過

昭和 54 年度
昭和 55 年２月 23 日
　町文化財に指定
平成元年度
平成元年４月 29 日
　町文化財保護委員による掘削調査
平成 11 年度
平成 11 年９月９日
　「免の山」開発に関する陳情書が「免の山を考える会」から町へ提出
平成 13 年度
平成 13 年５月
　「中山間地域総合整備事業上益城中央地区（広域連携型）下豊内地区農道１４号線改良舗装工事の促進について」地区住民から町へ要望書の提出
同年同月
　公民館講座「甲佐町中世史跡の歴史的意義　特に、陣内館跡について」講演会（大田幸博熊本県立装飾古墳館副館長・当時）を開催
平成 14 年度
平成 14 年９月
　熊本県立装飾古墳館大田幸博副館長（当時）へ調査依頼
平成 15 年度
平成 15 年２月
　陣ノ内館跡確認調査実施
平成 15 年４月～平成 16 年３月
　陣ノ内館跡の竹木伐採、地形測量、確認調査を実施
平成 16 年２月
　文化庁坂井秀弥調査官（当時）来跡
平成 16 年度
平成 16 年５月～平成 17 年３月
　陣ノ内館跡の竹木伐採、地形測量を実施、発掘測量調査報告書を刊行
平成 20 年度
平成 20 年６月
　熊本大学甲元眞之教授（当時）・稲葉継陽准教授（当時）・国立歴史民俗博物館小野正敏副館長（当時）に陣ノ内館跡調査専門委員を打診
平成 20 年 10 月 24 日
　第１回陣ノ内館跡調査専門委員会議開催
平成 20 年 12 月 15 日
　調査開始
平成 21 年２月４日
　第２回陣ノ内館跡調査専門委員会議開催
平成 21 年２月 26 日
　文化庁渡辺丈彦調査官による指導監督
平成 21 年３月 23 日
　甲元眞之委員長、稲葉継陽委員による調査状況確認
平成 21 年３月 30 日
　埋め戻し終了
平成 21 年度
平成 21 年６月 22 日
　第１回陣ノ内館跡調査専門委員会議開催
平成 21 年８月２日
　調査開始
平成 22 年２月 19 日
　文化庁福宜田佳男主任文化財調査官による指導監督
平成 22 年３月 16 日
　甲元眞之委員長、稲葉継陽委員による調査状況確認
平成 22 年３月 31 日
　埋め戻し終了
平成 22 年度
平成 22 年７月２日
　第１回陣ノ内館跡調査専門委員会議開催
平成 22 年８月 20 日
　研修会「新発見！こうさのお城!!」（講師：稲葉継陽（熊本大学文学部））を開催
平成 22 年９月１日
　調査開始
平成 22 年 12 月 15 日
　文化庁近江俊秀文化財調査官による指導監督

平成23年3月18日
甲元眞之委員長による現地視察
平成23年3月31日
埋め戻し終了
平成23年度
平成23年5月27日
熊本大学工学部学生による地中遺構のレーダー探査を実施
平成23年7月15日
第1回陣ノ内館跡調査専門委員会議開催
平成23年10月7日
調査開始
平成23年11月17日
甲元眞之委員長・稲葉継陽委員による現地視察
平成23年11月30日
文化庁禰宜田佳男主任文化財調査官による指導監督
平成23年12月10日
研修会「電波と電気で地中を探る!!－熊大生による地中レーダー探査法と電気探査法を用いた陣ノ内館跡の遺構調査報告－」（講師：熊本大学工学部三年生13名）を開催
平成24年3月30日
埋め戻し終了
平成24年度
平成24年4月10日
整理作業開始
平成24年8月28日
第1回陣ノ内館跡調査専門委員会議開催
平成24年12月6日
文化庁三宅克広調査官による指導監督
平成24年12月11日
発掘調査開始
平成25年2月7日
第2回陣ノ内館跡調査専門委員会議開催
平成25年2月20日
文化庁禰宜田佳男主任文化財調査官による指導監督
平成25年3月16日
研修会「縄張り図からみた甲佐の城跡」（講師：鶴嶋俊彦（人吉城歴史館・当時））を開催
平成25年3月29日
埋め戻し終了
平成25年度
平成25年4月1日
整理作業開始
平成25年8月2日
第1回陣ノ内館跡調査専門委員会議開催
平成25年8月9日
小野正敏委員による現地視察
平成25年10月11日
第1回執筆者会議開催
平成25年11月13日
掘削調査開始
平成25年12月24日
東京都文化庁にて協議
平成26年2月6日
第2回執筆者会議開催
平成26年2月20日
執筆者現地検討会開催
平成26年3月28日
埋め戻し終了
平成26年度
平成26年4月1日
整理作業開始
平成26年10月29日
陣ノ内館跡専門委員会議開催
平成27年3月31日
事業終了

第２章　陣ノ内館跡の位置と環境

第１節　陣ノ内館跡付近の地形と地質

池辺伸一郎（阿蘇火山博物館長）

１　甲佐町の地形・地質概要

甲佐町は熊本県の中部、やや南側に位置している。町周辺の地形を見ると、険しい東側の山地と集落が集中する緑川沿いに広がる低地が対照的である。そして緑川の西側は台地状の地形をなす。山地で最も高いのは、甲佐岳で 753.2 m、緑川沿いの平坦な地域はおおよそ 30m 程度である。

このような地形的な特徴は、それを構成する地質に大きく関係する。まず、東側の険しい山地は石灰岩や変成岩といった様々な、そして非常に古い時代（１～２億年前）の岩石でできている。とくに石灰岩は非常に硬く浸食にも強いために、今でも高い山として残っている。甲佐岳がその典型である。南側の美里町とは鎌倉山などの高い山(尾根筋）の部分が境界になっているが、この部分も石灰岩で形成されている。また、緑川流域では、川の流れによって浸食を受けているので、もともと周りに比べて低地となっていたはずである。そこに約九万年前の阿蘇の大噴火による火砕流(阿蘇四火砕流）が流れてきて、その低地を埋めた。一旦は低地を埋めてしまうが、緑川が再び同じ地域を流れてきて少しずつ浸食を開始し、同じように低地を形成していったと考えられる。現在では、緑川の左岸側（西側）に急峻な崖が連なって見えるが、それは緑川が阿蘇四火砕流を削り残した部分がわずかに顔を出しているものである。

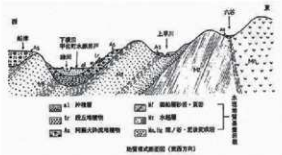


図２－１　甲佐町中心部付近の東西断面推定図
（甲佐町水道水源保全対策調査報告書より引用）

写真２－１　甲佐町西部から見た東部の山塊

写真２－２　緑川左岸の溶結凝灰岩の崖

写真２－３　甲佐町西部の台地

２　陣ノ内館跡付近の地形地質の特徴

陣ノ内館跡付近は標高 100m を越えており、現在の甲佐町役場付近から 60m 以上高

い。そして東から延びる尾根の先端部にあって、周辺の切り立った地形とは対照的にこの部分のみが平坦な地形を呈している。ある程度の表面的な地形改変は人為的に行われているとしても、本来このような地形的特徴を持っていたことが、この場所に陣ノ内館が築かれた要因であろう。

陣ノ内館跡の従来からの地形的な説明は「広大な平坦部を周囲の地形から切り離すように幅約 20m、総延長 400m の鉤型の空堀が掘られ、その空堀に沿うように高さ五 m の土累が築かれており、背後（北東部）の守りを強固なものにしています」（甲佐町教育委員会資料より引用）とある。この平坦な地形の骨格は、約９万年前の阿蘇四火砕流によるものである。周辺はもともとが急峻な地形を呈していたために、その後火砕流は浸食されてしまっているが、ここはその削り残しの部分にあたる。

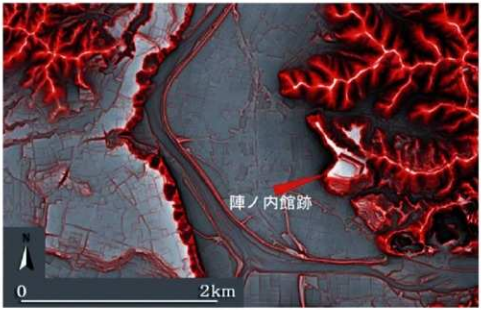


図２－２　陣ノ内館跡付近の赤色立体地図

２－１　陣ノ内館跡付近の砂レキ層

陣ノ内館跡付近の空堀の断面を見ると、写真２－５のような砂レキ層がみられる。通常、このような孤立した高い場所に砂レキ層、つまり水の作用によって堆積した地層が存在することは、簡単には考えにくいので、その成因について考えてみたい。

この地層は以下のような特徴を持っている。

①クロスラミナ（斜交層理）が見られる
②レキの並び方がランダムではなく、水平方向にそろう
③阿蘇四火砕流に含まれる軽石が砂レキ層に入っている
④ AT 火山灰（約２万９千年前の鹿児島湾北部の姶良カルデラが噴火によって飛ばされた火山灰）より下位であろうと考えられる（現況及び発掘調査の成果による）
⑤異質レキ（周辺にはない、少し遠地から運ばれてきたらしい岩石）が多く入っている
⑥異質レキはある程度円摩されている（角が取れて丸みを帯びる）

①および②、⑥の特徴は、水の流れ、つまり川の周辺で形成された地層によく見られることから、そのような環境下で形成されたものと考えられる。また、③および④の事実からは、この層が形成された時代は、約２万年前以降２万９千年前までの間であろうと推測される。⑤の特徴は､現在の地形から考えると非常に推測が困難であるが、少なくともレキは高いところから低いところに向かって運ばれてくるものであるので、ここより標高の高いところ、つまり東側の山地から運ばれてきたと推測できる。

以上のことから、この付近に分布する砂レキ層に形成については、以下のようなストーリーが考えられる。

「約九万年前、現在と似たような凹凸がある周辺の地形が、阿蘇四火砕流でほぼフラットに埋められた。その直後から、上流（基本的には東方）からの水の流れがあって、それによって東方から様々な岩石が流されて堆積した。そして周辺はさらに浸食を受けたため、陣ノ内館跡付近の丘が作られ、そこの砂レキ層が取り残された。」

現在では、緑川をはじめいろんな小河川によって再び凹凸のある地形が形成されており、一見この地層形成の原因はわかりづらいが、"火砕流がこの付近一帯を埋め尽くした直後"にこういう環境にあったと考えれば、異質レキが含まれていても不思議ではない。

写真２－４　陣ノ内館跡の空堀

写真２－５　空堀の壁に見られる砂礫層

写真２－６　クロスラミナ（斜交層理）の見られる砂層

２－２　緑川左岸に見られる地層

緑川を挟んだ対岸（緑川左岸）にも一部、陣ノ内館跡周辺に見られるような砂レキ層と、少し様子は違うものの、同じような地層が見られる（写真２－７）。こちらでは火砕流堆積物を主体とし、そのなかに異質レキを含む程度である。明瞭な層理も見られないが、成因としては陣ノ内館跡周辺の砂レキ層と同じであると考えられる。

写真２－７　緑川左岸に見られる砂礫層

写真２－８　砂礫層の堆積状況

２－３　石列遺構や石敷遺構の岩石

さらには、館跡の土塁上や平坦部では石列遺構や石敷遺構（写真２－９～２－11）も出土している。（第３章参照）その岩石は、円摩されていることや大きさがほぼそろっていることから、やはり河川などの水の流れによって運ばれてきたものである可能性が高い。そしてやや緑がかった変成岩らしいものや、縞模様が見られる片岩もあり、ここに使われている岩石も基本的には、この周辺に分布する砂レキ層のなかのものであろう。

写真２－９　Ⅰ区　石列遺構出土状況（北から）

写真２－10　Ⅱ区　石列遺構出土状況（北西から）

写真２－11　16トレンチ　石敷き遺構出土状況（西から）

参考文献

甲佐町・国際航業株式会社　1994　甲佐町水道水源保全対策調査報告書

甲佐町・有限会社大隈地質　2005　水委第１号　水道水源保全対策調査報告書

斉藤 眞・宮崎一博・利光誠一・星住英夫　2005　砥用地域の地質，地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）産総研地質調査総合センター

熊本県地質図編纂委員会　2008　熊本県地質図（10万分の１）（県北板・県南版・説明書）（社）熊本県地質調査業協会地盤図編纂委員会編　2003　熊本市周辺地盤図

岡本和明・原 都夫・鈴木盛久　1989　九州，甲佐地域の間の谷－肥後変成岩の地質構造（予報），地質学論集第33号，187-198

日本の地質「九州地方」編集委員会編　1992　日本の地質９「九州地方」，共立出版株式会社

町田 洋・新井房夫『火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』、東京大学出版会、1992年

千葉達郎　2006　活火山 活断層 赤色立体地図でみる日本の凹凸，技術評論社

第２節　歴史的環境

甲佐町内には、現在のところ 37 遺跡が確認されているが、掘削を伴う調査例は少なく、その全容は明らかでないものが多い。このため、埋蔵文化財包蔵地以外の資料も取り上げ、陣ノ内館跡が形成された甲佐町内の歴史的環境を概観する。

【原始古代】

甲佐町内で最も遡ることが出来るのは、大峯遺跡・幸野原遺跡でいずれも後期旧石器時代に位置付けられる。緑川中流域右岸の河岸段丘上にあり、大峯遺跡では石核石器・剥片石器等が出土する。左岸の中山錦川遺跡でも、旧石器時代とみられる遺物が出土しており、緑川を挟んだ丘陵地上での生活が想定できる。

縄文時代になると、緑川左岸の台地上では比較的多く４遺跡（田口東原・麻生原・沈目五山・世持）が確認される。早期・前期・中期の土器、矢じり、石匙が確認されるが、河川の周辺の低地では確認されない。陣ノ内館跡の発掘調査では縄文時代後期の遺物も出土しており、台地上での生活を想定できる。この時期の低地は、緑川の氾濫原で狩猟場として利用されたが、生活の場としては適さなかったとみられる。

弥生時代には、左岸の麻生原遺跡で前期末の壺と甕が採集される。熊本市城南町の同じ台地上でも同時期の遺物が確認されており、比較的広範囲にわたって集落が点在したと考えられる。麻生原遺跡では墓は確認されていないが、遺跡から南へ 500m 程度離れた八つ割遺跡では支石墓が確認され、周辺では弥生時代前期末の土器が採集される。

古墳時代には、墳墓が多く確認される。麻生原地域にある塔の木さん古墳は、高さ約 2.5m、長さ 20m を測る。６世紀頃の横穴式石室をもつ円墳で周辺地域を治めた豪族の墓とみられる。後期～終末期には、緑川両岸で横穴墓が造られる。阿蘇溶結凝灰岩の崖面を掘りくぼめたもので、船津東前横穴群で３基が確認され、中山横穴群では熊本市側から続く数百基があるとされる。陣ノ内館跡西側崖面下にある下豊内横穴群もその一つで、防空壕によって壊されたものもあるが比較的良好に保存される。正式な調査は行われていないが、『上益城郡村誌』（熊本県立図書館蔵）には近世後期に開削された崖面下の下豊新井手の隧道工事の際に横穴墓にあたったという記録が残される。記録には、３箇所に屍床があり、うち正面の人骨は北に首、体は西を向け、膝の骨は１尺６寸だった。左右にもそれぞれ人骨があり、西を向き臥している。そばには小壺があり、鏃や短刀、馬具等があったとされる。甲佐では当該時期の集落址は確認されていないが、中山や豊内周辺には生産性の高い多くの人たちが住んでいたとみられる。

古代には、明確な集落遺跡は確認されていない。遺物が出土するのみで、緑川左岸の乙女台地の世持周辺、右岸の安平周辺で生活していたものとみられる。また、県内の平野部で広く確認される条里制の地割も、甲佐町の低地部にはその痕跡を確認できない。甲佐谷は条里制が施行できない程に緑川の流路が安定していなかったものとみられる。

【中世】

平安時代後期になると、在庁官人の領主化により在地領主として開発所領の維持のため、武装集団を形成、国衙との対立を深めるが、明確な遺跡として現れず「高野山文書」中にその記録が残される。12 世紀半ばに、現在の甲佐町田口を拠点に甲佐・御船・益城の一部にわたり広範囲に活動した菊池系の一族である在地領主田口一族があった。田口大夫経延は在庁官人に売却された現甲佐町山出地域を襲い、大量の物資を奪い、さらに後年田口大夫経延・行季は国衙に納入する租税を奪取した。この記録から、中山間地と下流の平野との結節点である山出地域は国衙の交通と開発の拠点として発達、国衙と反国衙が対立する 12 世紀の権利維持紛争の場であったと推測される。また、この頃には、在地領主木原顕実が砥用・小北（現甲佐町東寒野）を甲佐社に寄進するなど、甲佐社は健軍社・郡浦社とともに阿蘇本社の末社として益城郡以南に一円的な社領を形成・維持していたとみられる。

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の２万５千分の１の地形図を複製したものである。（承認番号 平 17 九複、第 442 号）

番号	名称	種別	時期	所在地
001	中尾原	包蔵地	弥生	白旗　中尾
002	北早川横穴群	古墳	古墳	白旗　北早川
003	早川城跡	城	中世	早川　下小塚
004	円福寺跡	寺社	中世	早川
005	大峯	包蔵地	旧石器	上早川
006	南早川城	城	中世	早川　城下
007	中山手下道横穴群	古墳	古墳	中山　下道
008	江目五山	包蔵地	縄文～中世	田原
009	福の木さん古墳	古墳	古墳	麻生原　板の上
010	麻生原	包蔵地	縄文・弥生	麻生原　板の上
011	中山横穴群	古墳	古墳	中山
012	世持	包蔵地	縄文～中世	横田
013	田口東原	包蔵地	縄文	田口　東原
014	船津東前横穴群	古墳	古墳	船津（通称谷）
015	下豊内横穴群	古墳	古墳	下豊内
016	陣ノ内館跡	館	中世	豊内　陣の内
017	慶屋五輪塔・慶屋	石造物	中世	船津　南原
018	八つ割	埋蔵	弥生	船津　八つ割
019	御手洗	包蔵地	古代・中世	安平（通称御手洗神社）
020	銀川製糸場跡	包蔵地	近代	豊内
021	宝篋印塔	石造物	中世	上鍋
022	甲佐城跡	城	中世	豊内　南谷川
023	安平城跡	城	中世	小鹿　屋敷野
024	春野原	包蔵地	旧石器	下横田
025	小鹿	包蔵地	縄文・弥生	小鹿
026	世持・石佛	包蔵地	古代	世持　石佛
027	世持・道免	包蔵地	古代	世持　道免
028	上鍋往還	石造物	近世	上鍋　宮上
029	日和瀬	建造物	近世以降	春野　千才丸
030	中山銀川	集落	弥生・古代	中山　銀川
031	鶴ノ瀬堰	建造物	近世	豊内
032	築の樋門	建造物	近世	豊内
033	銀川上流通潤碑	歴史資料	近世	上鍋
034	下豊内の逆修碑	歴史資料	中世	豊内
035	薬王寺の宝篋印塔	歴史資料	中世	早川
036	津志田の逆修碑	歴史資料	中世	津志田
092	山内城跡	城	中世	水越　山内

図２－３　甲佐町遺跡地図

地域民衆や御家人から多くの信仰を集めた結果、13 世紀には竹崎季長による「蒙古襲来絵詞」の甲佐社への奉納が行われる。14 世紀の南北朝期の動乱に入ると阿蘇氏は大宮司惟直の跡目相続を巡り一族は分裂、武家方・宮方と二分されることとなる。恵良惟澄は、そのなか一貫して宮方の立場をとり甲佐地域及び益城郡を根拠として活動し続け、征西府に提出した軍忠状によれば、15 年間 35 回にわたる合戦の功を連ねる。ほどなく宮方の勢力は、菊池氏と八代の名和氏以外ほとんど零落するも甲佐岳を拠点に、甲佐社領の当知行を維持、益城郡・阿蘇郡一帯の社領回復のために行動する。その本拠としたのが甲佐城であるが、現在は上豊内地域にある松尾城と比定される。戦乱が激しくなると、あちこちに臨時的な城郭が築かれることとなり、惟澄も矢部城・田口向城（現甲佐町田口だが所在未詳）・甲佐立早要害（甲佐町内だが所在未詳）など甲佐社領・益城郡内の戦略拠点で大規模な合戦を展開する。その後、正平 19 年（1364）、恵良惟澄は阿蘇大宮司に任命されるが、所領を嫡子惟村に譲り 2 か月後に死去する。肥後国南部での 14 世紀内乱が武家方の勝利として終結すると時代は室町時代へと移す。15 世紀室町期の益城郡はそのまま阿蘇氏が治めることとなったが、惟澄の嫡子惟村と次子惟武は対立し、一族内は再び分裂し合戦にまで発展する。両統が合体するのは宝徳 3 年（1451）で、実子のない惟忠が南郷の惟兼の子惟歳を養子として迎えることとなる。

矢部を根拠に甲佐を含む益城郡を支配してきた惟村系阿蘇氏は、合体によって存続の危機を乗り切り、阿蘇氏は阿蘇・益城 2 郡と宇土半島の郡浦庄を支配する戦国期の有力地域領主としてスタートし、矢部の大宮司が阿蘇本社と統括することとなる。

しかし、その後の阿蘇氏の動向は、大友氏や菊池氏の動きと合わせさらに混乱を極め、大宮司職を巡る一族内での対立を勃発させる。隈府を出て矢部に戻った阿蘇惟長と子惟前は惟豊と対立、惟豊は矢部から一時日向へ逃れるも、高千穂の甲斐氏の協力により矢部を回復、惟前は益城郡堅志田城に入り、惟豊と対立する。矢部地域から発生・流下する緑川の中流域にあり、松橋・小川・八代と矢部を結ぶ街道沿いにあたる堅志田は近年の石造物調査や文献資料による裏付けもあり水陸交通の要所として城下町的発達をみせ、甲佐を挟み矢部の浜の館と対峙する構造は戦国時代の甲佐の歴史に大きく影響を及ぼすこととなる。この時期、衮衆と呼ばれる益城郡一帯に勢力をもつ阿蘇大宮司惟豊に与する国人領主・小領主の連合体が「八代日記」に登場する。御船の甲斐氏や、甲佐の早川氏もそれに含まれ、敵対する惟前をたびたび攻撃、天文 12 年（1543）には堅志田城を落城させる。衮衆の本拠は、早川地域におかれたとされ、その存在は菊池義武を立て隈本入りし、戦国大名化しようとする相良氏を八代郡以南に押し込めた。このことは、肥後で一国レベルの大名が成長せず、豊臣氏の直接支配の対象となることへと繋がり、天文期の衮衆の動きは近世肥後国の歴史を左右したと稲葉氏は指摘する（甲佐町史編纂委員会 2013）。

その衮衆の本拠となった早川地域には円福寺跡阿弥陀如来像が残る。背面の墨書書きによれば永正 10 年（1513）「早河式部少輔政秀」という武士領主がいたことが分かり、早川城城主であり、早川神社神主でもあり、衮衆の構成員でもあったとみられる。周囲には、「知行」「城平」の地名もあることから、早川城・南早川城が阿蘇氏勢力の拠点となり、知行地を家臣にあてがったことが分かる。16 世紀前半のこの時期には町内でも、石造物が多く作られ、中でも生前供養を行う逆修碑（「津志田の逆修碑」・「下豊内の逆修碑」）は当時の厳しい社会情勢に生きる武士や地域民衆全体の信仰を色濃く反映する。

第 3 章にて後述するが、下豊内の逆修碑は阿蘇氏家臣のものとして天文 16 年（1547）・同 22 年（1553）に建てられる。14 世紀の恵良惟澄の「甲佐城」以降、甲佐は早川と並ぶ阿蘇大宮司勢力の一大拠点となり、16 世紀には戦国大名化した阿蘇氏の益城郡支配の基地として堅志田城とともに戦略拠点化する。しかし天正 13 年（1585）薩摩の島津

氏により甲佐・堅志田が落とされる。「上井覚兼日記」には薩摩の島津氏が甲佐と堅志田を攻略、「甲佐之囲」を落としたとの記録が残り、「甲佐之囲」とは豊内地域にのこる甲佐（松尾）城跡又は陣ノ内館跡とみられる。松尾城は「伊津野山城守」が在城したと伝えられ、現地には「本丸」「味噌蔵」の名が伝わる。顕著な遺構は確認できないが、４区画からなる平坦部を中心に階段状の地形が重なる。

島津氏により益城郡平野部を占拠された阿蘇氏は没落、島津氏が肥後を支配下に置く。その後、豊臣秀吉により「九州惣無事令」が出され、国分案が提示されると島津氏はこれを受諾せず、秀吉と交戦、降伏した。この際、肥後は島津・大友両勢力の係争地とみなされ、天正 15 年（1587）豊臣大名佐々成政の支配となる。

しかし佐々成政は、国衆に対し検知を要求した結果、国衆の反感を買い一揆を引き起こすこととなり、失政の罪で切腹を命じられわずか１年程度で肥後国の領主は代わることになる。甲佐は、宇土城を本拠地とし天草郡を含む南部肥後を領する小西行長の支配下におかれ、北部肥後を領する加藤清正と肥後を二分することとなる。

この時、小西氏は隈庄城・岩尾城・矢部城・木山城・八代城に城代を置き、支城網を整備したとされる。また、加藤清正と並び朝鮮出兵した際には倭城築城を進め、城郭技術の伝播発達に大きな影響を及ぼした。しかし、肥後においては、関ヶ原以前の織豊系城郭の調査研究は少なく、また小西氏の領内支配については不明な部分も多いことから、小西の支城網については今後検討を行う必要がある。また、甲佐町早川神社の神職であった渡辺玄察によればキリシタン大名である小西が、従来の社寺を一宇も残さず焼き払ったとされ（「拾集昔語」）、町内各所で焼き払われた伝承が残る。しかしこのことも近年の「新宇土市史」編纂に伴う研究等により見直しが進められている。

【近世～近代】

関ヶ原の戦い以後、加藤清正が天草を除く肥後国を統治するようになると、清正は各地で支城を再整備することになる。熊本城を中心に、南関城、阿蘇城、矢部城、宇土城、八代城・佐敷城・水俣城の７支城が設置される。支城は交通網（豊前薩摩街道・豊後街道・日向往還等）の要所に設置され、清正の領国支配の基礎が築かれる。この支城網の整備も、いわゆる一国一城令により収束、６支城は破却され熊本城・八代城の２城のみ残される。この際の破却の様子は、南関城や佐敷城・八代城の発掘調査によって明らかになっている。

また、清正は肥後各地で灌漑治水工事として城下町の建設や菊池川・白川・緑川・球磨川の河川改修を行い耕地の拡大を図り、後にはその恩恵から清正を神と崇める清正公信仰が広まることになるが甲佐町も例外ではない。町内では、甲佐社のある上揚地区から下流 500m 付近に河川に対し斜めに配置した鵜ノ瀬堰が築造される。慶長 12 年（1607）着手、翌年竣工したとされる堰は、全長 660m、幅 95m の範囲で石畳が敷き詰められる。またそれに伴い用水路の開削工事が行われ、大井手用水として現在でも下流約 20km、甲佐町と御船町の一部に及び合計 660ha の田を潤す。その恩恵から甲佐町でも清正公信仰が生まれ、町内横田区の岩鼻神社には加藤清正像がご神体として崇められる。神社敷地内にある文政７年（1824）銘の八角塔には、後の鹿子木量平による清正顕彰作業以前から、清正公信仰が広まっていた記録が残される。この鵜ノ瀬堰からは、文政７年（1824）惣庄屋木原寿八郎により新たに上井手用水が開削された。陣ノ内館跡の台地下の阿蘇溶結凝灰岩を削り通した隧道は現在も残り、灌漑用水として使われる。

また近代のものとして、陣ノ内館跡西側崖下に第２次大戦末期に軍需工場用として掘られた横穴が残る。幅 3.6m、高さ 3.6 m、延長 75・100・90m の３本の南北に掘られた横坑は、幅２m、高さ２m の縦坑で連結される。工事未完のまま終戦を迎え使用されることはなかったが、現地周辺には古墳時代の横穴墓を改変した防空壕もあり、戦時中の甲佐の様子を浮き彫りにする。

第３節　陣ノ内館跡の概要

町指定文化財「陣ノ内館跡」は、甲佐町役場東の丘陵地上に位置する城跡で、丘陵地麓（麓の集落を下豊内(しもどい)地域という）との比高差64m、丘陵地上は平均標高100mの平坦地形をなす。現地には、東から伸びる甲佐岳(753m)の尾根線から切り離すよう、この平坦地形の北側・東側を延長400mのかぎ型の堀とそれに沿う土塁が囲み、農作業に伴う改変以外の大規模な開発等は及ぶことなく保存されてきた。

当初、江戸時代中頃に書かれた文献資料を根拠に中世期の「阿蘇大宮司の館跡」とされてきた。しかし、その後県内の城郭研究の進展に伴い遺構の規模から造成時期が疑問視されることとなる。町でも遺跡の適切な保護・活用が求められてきたが、調査は一部行われたのみで、その範囲も明らかではない。このため、平成20年度から新たに発掘調査事業を立ち上げ、遺跡の規模・構造等の把握に努めた。

1　陣ノ内館跡の地形現況

陣ノ内館跡は甲佐町の東端、甲佐岳から伸びる尾根線の延長上に位置する。周囲の地形を含めると三分され、「陣ノ内（じんのうち）」・「中原（なかばる）」・「小平原（こひらばる）」と呼ばれる平坦地形が存在する。このうち現況で遺構が確認されるのは、「陣ノ内」の地名を残す部分で、中原とは東西で地続き、小平原とは「谷」とよばれる落ち込みを挟み「びわんくび(琵琶の首)」と呼ばれる土橋状の地形でつながる。

陣ノ内の中心、平坦部の規模は中心付近で東西方向に145m、南北方向に132mを測り、ほぼ方形をなしている。西側が開き、東側がすぼまる地形をなしており、南東端は調査前から「きどまる（木戸丸）」と呼称されていた。平坦部分には若干傾きがみられ、北東部から南西方向にむかって落ちの地形となる。この丘陵に延びる尾根線が北東から延びることから、傾斜は自然の地形を反映したものと考えられる。この平坦部分の基本層序は熊本市など県央地域で一般にみられる台地上の層序と大きく変わらない。畑地の区割りは、主に南北に長軸をもつ短冊状で、平坦部にあったであろう建物配置を反映している可能性も考えられる。平坦部南側には２つの土塁状の高まりがみられる。高まりは８×３m、10×３mの楕円形状で、周囲の農地との比高差はおよそ1.2m程である。

平坦部を囲むように築かれた堀は、北側東側の２方向に回る。まず東側の堀は、南北方向に走り、上端で幅16メートル・下端で幅6m・延長で98mを測る。次に、北側の堀は東西方向に走り、上端で幅20m・下端で幅11m・延長で212mを測る。北側の堀の北西部分は一部が鉤状に屈曲しており、南北方向に上端で幅16m・下端で幅8m・延長45m、さらに東西方向に上端で幅20m・下端で幅11m・延長35m延びる。屈曲部の堀底は、東から延びる堀底よりも標高が1m程度高い。鉤状に屈曲した堀は、そのまま「滝」よばれる急斜面におちる。この鉤状に屈曲した堀底には、江戸期の豪商天野屋が安政４年(1857)に建立した稲荷大明神が祀られる。

東側・北側の堀の形はほぼ直線・直角で、緩やかな屈曲は見られない。堀底は、北東から北西に傾斜し、底は平坦・台形をなすが、未調査のため本来の形は不明であり、石垣もみられない。また、南東側の堀の延長は、一部切り岸状の地形となっている。堀の延長にあたるが、未調査のため詳細は不明である。

堀に沿うよう平坦地との間には「あげつち（上げ土）」とよばれる土塁が形成され、北側・東側に廻る。北側の土塁は、幅23～30m、平坦面からの比高差5m、延長170m。北西側で土塁の一部に、土塁上面からさらに最大比高差2.0m、東西延長60mで高まりがみられる。北側土塁は中央部分が括れ、弧状をなす。また土塁東側には大量の積み石がみられるが、詳細は不明。東側土塁は幅13～15m、平坦面からの比高差３～4m、延長100mを測る。東

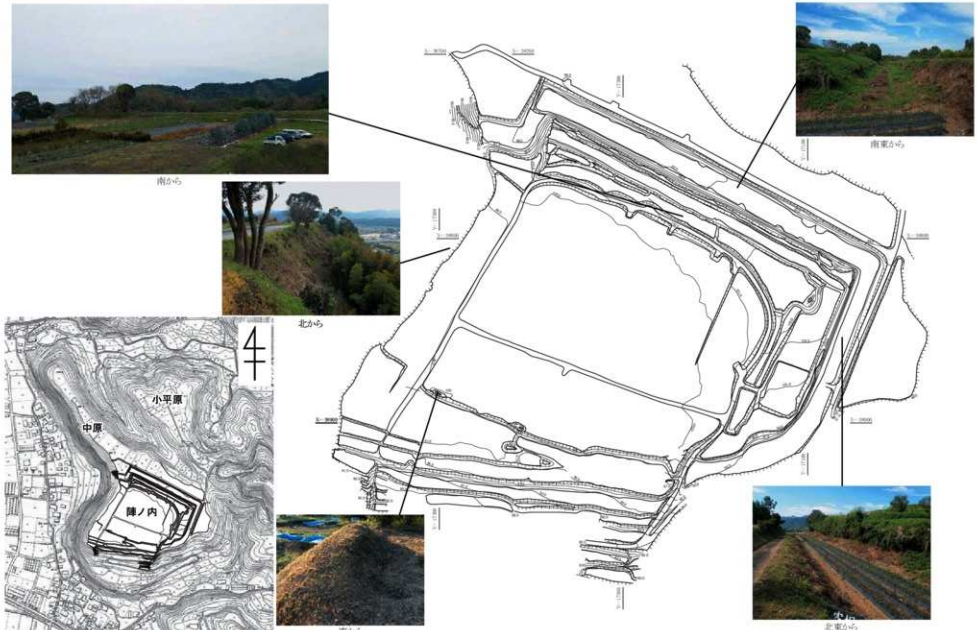


図2－4　陣ノ内館跡現況地形図（S=1/2000）

側土塁は、北側土塁が北東側で南に直角に屈曲し南北方向に伸びたもので、北側土塁と比較して1.5m 程度低い。東側土塁の更に東には、方形区画が3面にわたり形成される。未調査であるため詳細は不明であるが、中心平坦部及び堀を挟んだ久原の台地が自然堆積による水平面を形成していたとするならば、この面は盛り土ということとなり、何らかの用途でこの面が作られた可能性もある。

平坦部南側には、帯状の削平地が存在する。当初畑造成時のものと考えられていたが、今回の調査によって最上段には東西に堀が存在することが明らかとなった。堀は現在埋没しているが、その堀に沿い中央部分に二つの高まりが確認できる。東西幅 12 m、南北幅 7 m、高さ 1.6 m程度の石積みで、土は入らない。地域での聞き取りでは塚と呼ばれるが、未調査の為、性格は不明である。

2　地名「豊内」

現在、陣ノ内館跡が所在する大字名の「豊内」は「とようち」と表現される。しかし、現地で、特に老齢世代は「どい」又は「どいのうち」と呼ぶ者が多く、若年世代は「とようち」と読む者がほとんどである。

もともとこの地域は、「肥後国絵図（慶長国絵図）」には「どいの内」、寛永 10 年（1633）の史料には「土居之内」「土井の内」「どいの内」「といのうち」等で示されることから（東京大学史料編纂所　1976･1988）少なくとも江戸期の初め頃にはすでに「どいのうち」と称していたものと推察される。（花岡興史・佐藤征子氏からの教示による）現在確認される「とようち」の初見は、明治 34 年初版明治 37 年内務省認可の日本加除出版株式会社が刊行する『日本行政区画便覧』で、「豊内」に「とようち」とふりがなが付されており、この頃から行政上では「とようち」の名称が使われ現在に至る。ちなみに明治 34 年測図、35 年製版の大日本帝國陸地測量部で作製した地図では「豊内」には「どい」のふりがなが付されるが（写真２－５）、移動や補給経路等の関係から現地で使われる地名を使う必要があったためと推測される。この「どい」というふりがなは、この後昭和 29 年発行のものまで使われ、昭和 45 年以降国土地理院発行のものでは付されない。「どい」は、屋敷や集落の周りをめぐらした土塁等をさし、小字名「陣ノ内」とともに現地の土塁で囲った城郭の存在を強く示唆するものである。しかし、「豊内」を“とようち”とする表現は確実に定着しており、地域の歴史を示す本来の読み方は失われつつある。

図２－５　明治 34 年大日本帝國陸地測量部測図

3　陣ノ内館跡に係る史料

陣ノ内館跡が明確に記録された一次資料は現在まで確認されず、後に記録されることになる「拾集昔語」・「古城考」・『肥後国誌』の三資料は、17 ～ 18 世紀に成立した。当時の遺跡の状況やその歴史認識を示す史料として掲載する。

「肥後文献叢書」第四巻「拾集昔語」より抜粋

・・・甲佐伊津野居城松の尾之上當分迄も御陣の内と申所の三四町四方も可有之平地（ヒヤウチ）一面之所當分迄も大堀有レ之候處に被レ成二御殿作（トノヅクリ）一・・・

「肥後文献叢書」第一巻「古城考」より抜粋

豊内（トイノ）古城

松尾城共云、甲佐豊内にあり、此城跡の上に、三四町の平地堀跡あるは、大宮司惟前の舘跡也、・・・

「肥後国誌」下巻より抜粋

陣内ノ舘迹　豊内村ノ上ニ陣ノ内ト云城構ノ迹アリ阿蘇大宮司惟時ノ舘迹ニテ城郭ノ迹ニハアラスト云

（補）事蹟通考系圖巻五阿蘇系圖惟時ノ譜ニ云元應以前爲大宮司元弘三年以前讓職於惟直[illegible]元弘三年七月率一族諸臣詣京師建武二年十月足利尊氏有鎌倉而謀叛勅前大宮司惟時等伐之十二月惟時率上島惟頼阿蘇品惟定等從菊池武重與尊氏之軍戰筥根竹下有功延元元年正月尊氏犯禁闕　天皇避賊如延暦寺惟時奉詔守護内侍所奉入大宮彼岸所三月二十日於京師賜薩摩國守護職四月五日尊氏立阿蘇之族坂梨孫熊丸爲大宮司先是尊氏軍敗而來鎮西大宮司惟直戰于多々良濱敗死前大宮司惟時因徴在京故尊氏立之

此年十月惟時歸矢部惟直兄弟戰死而無大宮司故惟時復職爲大宮司雖然孫熊亦從足利家稱阿蘇大宮司

興国四年惟時叛而屬足利尊氏正平四年十月復歸順從征西將軍宮六年二月讓職所領等於孫丞丸正平八年卒

翁巷云惟時ノ事蹟諸書所記多シ故ニ畧ス詳細ノ事ハ阿蘇系圖ニ記載ス照看スヘシ然レトモ惟時陣内ノ舘ニ居住ノ事諸書ニ不見

（補）拾集昔語云大宮司惟種[illegible]ハ天正年中岩尾城濱ノ御所ニアリ然ルニ惟種ノ舍兄ヲ惟前ト云先ニ父惟將ヨリ大宮司職ヲ讓ラレシモ亂心ニ成ラレシ故ニ舍弟惟種ヘ其職ヲ讓ラセ惟前ヘハ砥用中山甲佐在々ニテ過分ノ所領ヲ遣シ甲佐伊津野カ居城松ノ尾ノ上ニ陣ノ内ト云所三四町四方モ有之平地一面ニシテ今モ大堀ノアル所ニ御殿造リシテ住舘ス云々

翁巷云阿蘇系圖ヲ按ルニ大宮司惟憲ノ子惟長大宮司職ヲ續ク永正二年菊池ノ宗族巨臣共君政朝ヲ廢シ惟長ヲ立テ嗣君ト爲ス惟長社職所領等ヲ弟惟豊ニ讓リ菊地家ヲ續テ名ヲ武經ト改ム其後阿蘇ニ歸リ子惟前ト共ニ惟豊ヲ逐ヒ永正十年惟前社職神領ヲ簒ヒ大宮司ト爲ル云々同十四年惟豊ノ爲ニ攻ラレ惟前敗テ薩摩ニ走リ又來リテ八代ニ僑居ス大永三年八代ヨリ堅志田城ニ來リ惟豊ト勢ヲ爭フ老臣等相議テ和融ヲ談シ甲佐堅志田砥用中山ヲ以テ惟前ノ所領トス是ヨリ兩大宮司ヲ稱ス云々又大宮司惟豊ハ永祿二年十一月七日卒ス子惟將遺跡ヲ嗣キ天正十一年十一月二日卒ス嗣子ナク故ニ弟惟種[illegible]を養テ嗣トス云々然レハ惟前ハ惟長ノ子ニシテ惟豊ノ甥惟將惟種ノ爲メニハ從弟ナリ本書ニ惟種ノ兄トスルハ誤ナリ委クハ阿蘇系圖ニ記ス參看スヘシ

事蹟通考阿蘇系圖惟前ノ譜ニ云惟前隠寓薩摩有年就相良義陽請赦宥義陽以甲斐宗運談之惟前亦再不可背阿蘇家旨以誓詞血書貽宗運惟豊惟將聽之因而惟前惟賢[illegible]後悔歸伏來矢部謝罪而居甲佐[illegible]

翁巷按ニ拾集昔語云惟前陣内ノ舘ニ居住トアルハ此時ノ事ナルヘシ

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

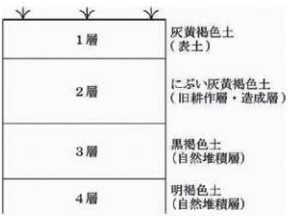
陣ノ内館跡の調査は、埋蔵文化財調査・聞き取り調査・石造物調査を行った。まず埋蔵文化財調査は、実施年度始めに、調査専門委員会議において調査の目的・方法・内容を審議し、調査区を選定、地権者の承諾を得た後、届け出を行い実施した。（図３－１）

表土から遺構面までの深度が不明であったため、調査方法は、重機により表土のみを掘削し、作業員の移植ゴテによる手掘りで遺構検出を繰り返しながら掘り下げた。遺物は、層位に応じて取り上げ、遺構から出土したものは、遺構独自に層位番号をつけ取り上げている。掘削は、調査の目的や掘削深度の危険性・地権者の要望等に応じ遺構の底部まで掘削していない場合がほとんどで、必要な場合のみ完掘した。

測量は、世界測地系に基づくもので、基準点は甲佐町で実施した地籍調査時に設置した基準点を用い、調査区や遺構の位置等は座標で管理した。測量は、そのほとんどを直営で実施したが、地形測量及び遺構断面図の一部を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。測量機材は、光波測距儀・オートレベルを用い、必要に応じ手測りで実測した。作成した図面は、全体図は縮尺100分の１、個別のトレンチ平面図・断面図は20分の１、遺構内部の詳細な平面図は必要に応じ10分の１で作成した。写真撮影は、進捗に応じ行い、検出状況・掘削状況・完掘状況を基本に撮影している。撮影は担当者が現地にて行い、撮影に用いたのは35mmフィルムを基本とし、カラーリバーサルフィルムと白黒フィルムの双方で撮影し、必要に応じデジタルカメラで補足撮影している。整理作業は、文化財調査室で行い、遺物の洗浄・選別・注記・トレース、撮影した写真、作成した図面の整理等を行った。

石造物調査は、陣ノ内館跡南側斜面麓にある町文化財「下豊内の逆修碑」を対象に、遺跡の中世段階の存在を裏付ける資料であるため、関連遺物として実測・拓本・翻刻等調査を行った。調査は、（株）九州文化財研究所に委託し実施している。

聞き取り調査は、陣ノ内館跡周辺に残る旧地名や土地のいわれを調べるもので、遺跡直下の下豊内及び上豊内地域から、清村守・甲斐園子・村上敏幸・村上邦生・清村一男の５名の協力を得た。



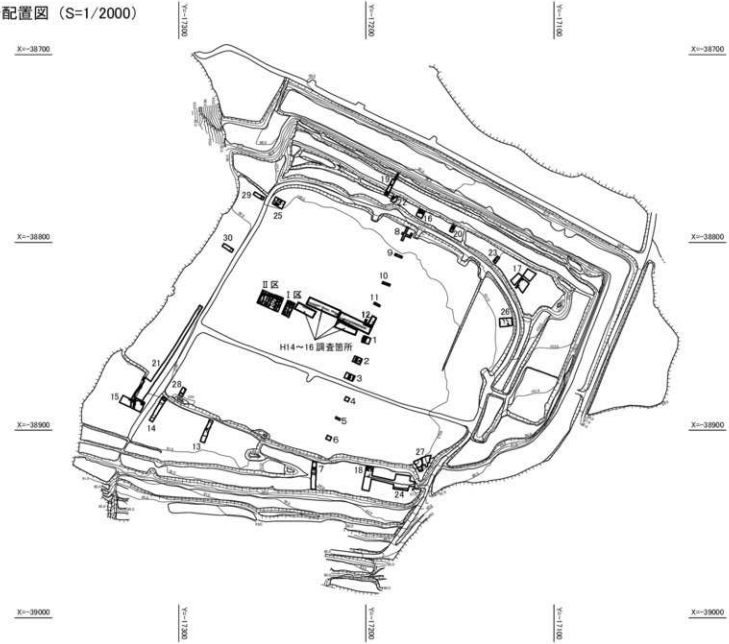
基本層序（S＝1/10）

第２節　層序

陣ノ内館跡の基本層序は、比較的堆積が安定した平坦地の堆積状況から、左図のとおりとなる。２層は、19世紀以降の遺物や、農作業時の撹乱が入り、旧耕作層・造成層と判断される。３層は14世紀の遺物、４層は弥生土器が出土する自然堆積層と考えられる。

第３節以後に述べる今回の発掘調査によって出土した堀・土塁は３層を基準に構築される。

図3－1　トレンチ配置図（S=1/2000）



第３節　発掘調査の概要

【平成 20 年度の調査（Ⅰ区・Ⅱ区）】

陣ノ内館跡の埋蔵文化財調査は、平成 20 年度から開始した。それまでは、平成元年及び平成 14 ～ 16 年度に平坦部中心の掘削調査を行ったのみで遺構の分布が判然としていなかったため、当初の計画としては遺跡の範囲を確定させるための埋蔵文化財調査としていたが、平成 20 年 10 月 24 日開催の陣ノ内館跡調査専門委員会議内で、(1) 限られた予算の中で平坦部外周のトレンチ調査を行っても遺構が出土せず遺構の分布を推測できない恐れがある、(2) 館跡中心部で出土した石列遺構の構造・時期をまず明らかにする必要があるとの委員からの意見もあり、平成 20 年度の調査では平坦部の中でも平成 14 ～ 16 年度に掘削調査したトレンチの延長部分を掘削調査することとなった。調査範囲は、所有者が異なる土地を掘削するため、土地の境界を破壊せぬよう２ヶ所に分割、東側からⅠ区（4.0 m × 8.0 m）・Ⅱ区（12.0 m × 8.0 m）とした。

調査は、重機により表土（1 層）を除去後、作業員の移植ゴテによる手掘りで２層から遺構検出を繰り返しながら掘り下げた。調査区内では、Ⅰ区で南北方向に３条、Ⅱ区で７条の撹乱層を確認した。撹乱層は２層上からの掘り込みを確認しており、農業時の掘削痕とみられる。2層下層を掘削段階で前回調査と同様の石列が出土し始めたが、それに伴う包含層は確認できず、一部トレンチで下層を確認後、３層を検出した段階で石列に伴う遺構の線を確認することができ、想定していた石列遺構をⅠ区で１条、Ⅱ区で３条の合計４条確認した。（図３－２）以下にその詳細を記す。

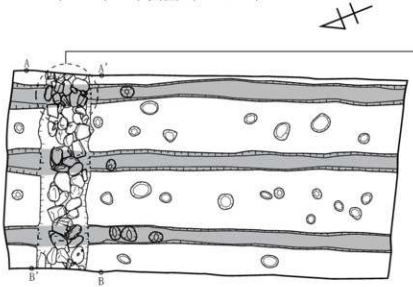
石列はいずれも溝状の遺構からの出土で、Ⅰ区で確認した溝は、Ⅰ区で延長 4.0 m、幅 0.8 ～ 1.0 m、深さは 0.5 ～ 0.55 m、Ⅱ区では東側で延長 1.1 m、幅 0.8 ～ 0.9 m、深さ 0.5 ～ 0.6 m、中央が延長 7.5 m幅 0.45 ～ 0.9 m、深さ 0.3 ～ 0.35 m、西側で延長 3.5 m、幅 0.8 ～ 0.9 mを測る。一部で２層下層から石列の出土がみられたが、表土上から遺構面までの深度が浅く、扁平な石が立ち上がるよう出土したことから、近代以降の農作業時に鍬や耕運機等で引っ掛け上面に持ち上がったものとみられる。

溝から出土した石は、0.2 ～ 0.4 mのものが中心で、他の大きさのものは少ない。自然石が中心だが、一部に阿蘇溶結凝灰岩を加工した引臼や板状のものなど石部材もみられた。また、石列の下部構造確認のため、４か所をさらに完掘した。石と石の間には細かく土が入り込んでいるがいずれも火山灰土を主体とした埋土で、砂や粘性のある土の入り込みはなく、突き固めた形跡は確認できなかった。完掘したⅡ区の東側溝内では、扁平な石を溝の壁際に立て、溝の底から平らな部分を上に向け重ねるなどの配置された形跡もみられる。

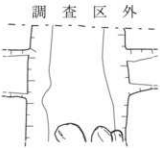
溝は、２調査区で４条確認しているが、調査区間をピンポールで挿し地面下の埋蔵状況を確認したところ、固形物があることを確認した。また、Ⅰ区とⅡ区東側の溝はほぼ同じ幅、同じ延長であるため、Ⅰ区とⅡ区東側の溝は同一の遺構と考えられる。

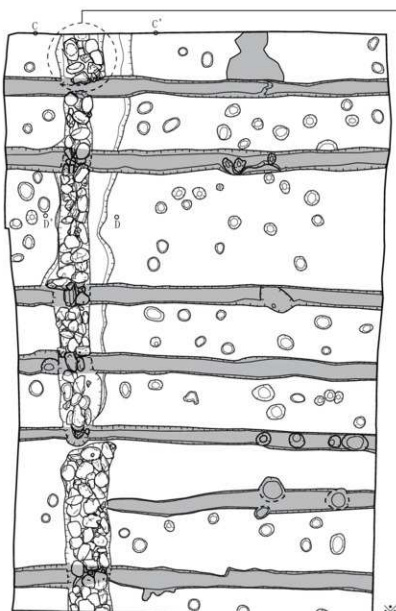
その他の遺構として、溝と同様に３層から掘り込んだピットを検出した。（Ⅰ区で 23 箇所・Ⅱ区で 75 箇所）直径 20 ～ 40cm、深さは 13 ～ 18cm を測る。いずれも半裁し、柱穴痕等も確認したが、明確な痕跡は確認できなかった。また、方形区画を想定したプラン確認も行ったが、建物跡と結びつく配置は確認できなかった。

図3－2　Ⅰ区・Ⅱ区　平面図（S＝1/80）



Ⅰ区東側完掘状況
平面図（S=1/40）



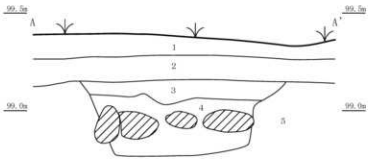


Ⅱ区東側完掘状況
平面図（S=1/40）

※網かけは近現代の撹乱

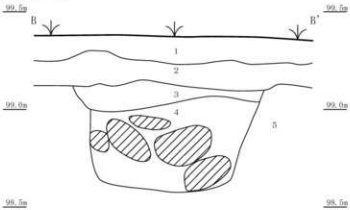
図3－3 Ⅰ区・Ⅱ区 土層断面図（S＝1/20）

Ⅰ区 A-A'



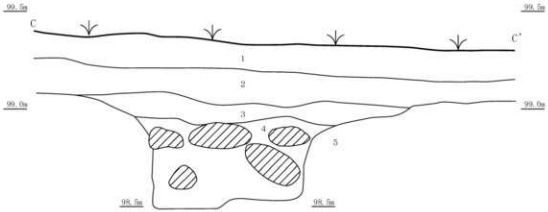
1 Hue2.5Y3/2 黒褐色土
2 Hue10YR3/2 黒褐色土
3 Hue2.5YR3/2 黒褐色土
4 Hue10YR4/2 灰黄褐色土
5 Hue7.5YR5/6 明褐色土

Ⅰ区 B-B'



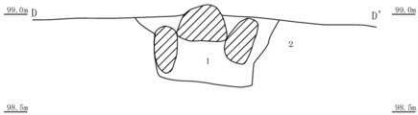
1 Hue2.5Y3/2 黒褐色土
2 Hue10YR3/2 黒褐色土
3 Hue2.5YR3/2 黒褐色土
4 Hue10YR4/2 灰黄褐色土
5 Hue7.5YR5/6 明褐色土

Ⅱ区 C-C'



1 Hue2.5Y3/2 黒褐色土
2 Hue10YR3/3 暗褐色土 Hue7.5YR5/6 明褐色土が混ざる
3 Hue2.5Y3/2 黒褐色土 Hue7.5YR5/6 明褐色土がブロック状に入る
4 Hue10YR4/2 灰黄褐色土 Hue7.5YR5/8 明褐色土が粒状に入る
5 Hue7.5YR5/6 明褐色土

Ⅱ区 D-D'



1 Hue10YR4/2 灰黄褐色土 Hue7.5YR5/8 明褐色土が粒状に入る
2 Hue7.5YR5/6 明褐色土

【平成 21 年度の調査】

平成 20 年度の調査成果から石列は溝状遺構に伴うことが明らかになったが、遺物の出土が僅少であったことから時期判断が難しく、性格も判断材料に乏しかったことから、専門委員会議内において、石列の分布を把握する必要があるとの結論に達し、平成 21 年度石列の分布範囲の確認調査を実施した。また、平坦地において遺構面上面が削平により削られている可能性が高いことから、平坦地全域における遺構の残存を確認するため、南北にトレンチを配置し土層堆積状況の確認のための掘削調査を実施した。

○　石列遺構の分布範囲確認調査

調査は、当初地下レーダー探査による調査も検討したが、費用面から実施が難しかったことから、作業員を動員してその把握に努めた。調査方法は、危険防止のために継ぎ目を溶接した 0.8m（平成 20 年度調査で出土した石列遺構が表土下 0.5 ～ 0.6m で出土したため）の測量時に用いるピンポールに木杭を通したものを用い（写真３－１）、1m 間隔で作業員が地面を指しながら前進し反応を確かめた。（写真３－２）

写真３－１　使用した道具

写真３－２　作業風景

10cm 以下の小礫にも反応する場合があるため、反応があった場合は半径 30cm を再度刺し、更に反応があった場合のみ、目印に竹を地面に刺し作業を進めた。作業範囲は図３－４の通りで、北側は堀北側の平坦地まで、東側は堀外側の段丘状の高まりまで、南側は平坦地から一段落ちた東西に伸びる平地部分まで、西側は崖面の上端までである。

当初、平坦部において石列遺構が連続的に確認されることが想定されたが、調査の結果、比較的まとまってはいるが各ポイントで散発的に反応がみられた。平成 14 ～ 16・20 年度で確認した石列遺構を表土上から改めて確認したが全域では広がらず、(1) 平成 20 年度の掘削調査で確認した石列は西側に 5m 程度延びる、(2) 平成 14 ～ 16 年度の調査で出土した 2 列の石列は、20 年度に調査した北側まで続かずⅠ・Ⅱ区で確認した石列は 1 列で存在する点が明らかとなった。また、土塁上を東西に横断するもの、土塁や堀の斜面下に分布するもの、平坦部南側の外周に沿うもの、南東側土塁延長にみられもの、南側斜面下に面的に広がるものなどが挙げられる。この分布図は、以後の調査区選定の際の基礎資料として用いることとなった。

○　埋蔵文化財発掘調査

トレンチは平坦地中央を基準に南北に 12 トレンチ配置した。調査の行程上、中心部から南に 1 から 7、土塁根元から中心部にかけて 8 から 12 にトレンチを設定した。

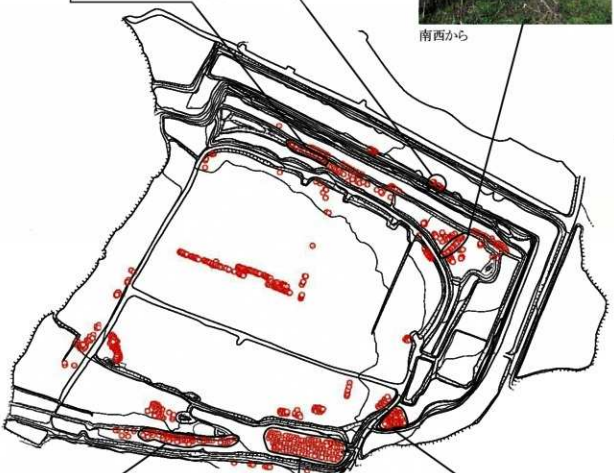
図3－4　地下確認箇所分布図（S=1/2000）

※図中の赤○・写真中の白○は確認箇所

南東から

北東から

南西から

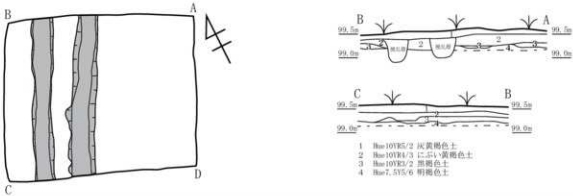


西から

北西から

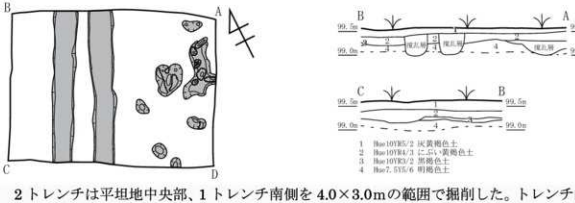
南西から

図3－5　1トレンチ　平面・土層断面図（S＝1/80）※網かけは近現代の撹乱



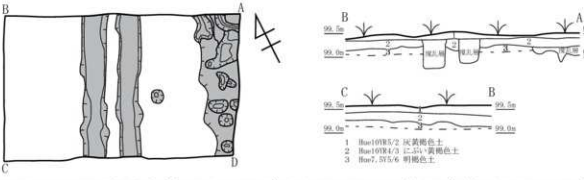
1トレンチは平坦地中央部を4.0×3.0mの範囲で掘削した。トレンチ内では、2層を掘り込む2条にわたる撹乱層が検出されたが、農作業時の掘削とみられる。遺構の出土はなく、遺物も摩滅した土器等のみであった。

図3－6　2トレンチ　平面・土層断面図（S＝1/80）※網かけは近現代の撹乱



2トレンチは平坦地中央部、1トレンチ南側を4.0×3.0mの範囲で掘削した。トレンチ内では、1トレンチで確認された2条の撹乱層の他、2層下からも撹乱層を検出した。調査区東側を大きく撹乱し、地山である明褐色土まで掘削が及ぶ。2層からは17世紀半ば～後半の肥前産の擂鉢が出土している。

図3－7　3トレンチ　平面・土層断面図（S＝1/80）※網かけは近現代の撹乱



3トレンチは平坦地中央部、2トレンチ南側を5.0×3.0mの範囲で掘削した。トレンチ内では、1･2トレンチで確認した2条の撹乱層を中央で検出した。2トレンチで検出した東側の撹乱層も出土しており、明褐色土まで及ぶ。遺構・遺物の出土はなかった。

4トレンチ

写真3－3　掘削状況（南から）

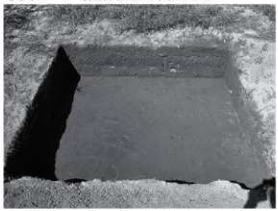
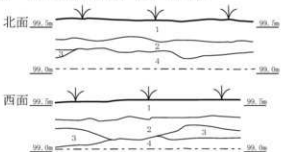


図3－8　土層断面図（S＝1/40）

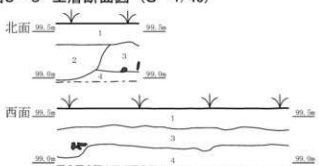


4トレンチは平坦部南部、2.0×2.0mの範囲で掘削した。トレンチ内では、表土から50cm程度掘削、地山である明赤褐色土まで掘り下げたが、遺構の出土はなかった。農作業時に深く掘削していたとの聞き取りから3層までが旧耕作層とみられる。

5トレンチ

写真3－4　掘削状況（南から）

図3－9　土層断面図（S＝1/40）

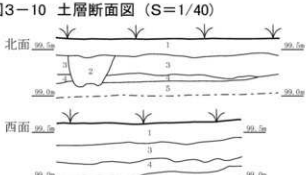


5トレンチは、平坦部南部、4トレンチ南側を2.0×1.0mの範囲で掘削した。3層(旧耕作層)を掘り込む撹乱層を確認した。遺構の出土はなかった。

6トレンチ

写真3－5　掘削状況（南から）

図3－10　土層断面図（S＝1/40）



6トレンチは、平坦部南部、5トレンチ南側を2.0×2.0mの範囲で掘削した。5トレンチ同様、3層(旧耕作層)を切り込む撹乱層を確認した。2つの土が混じる、4層までを旧耕作層と判断した。遺構の出土はなかった。

図3－11　7トレンチ　平面・土層断面図（S=1/80）

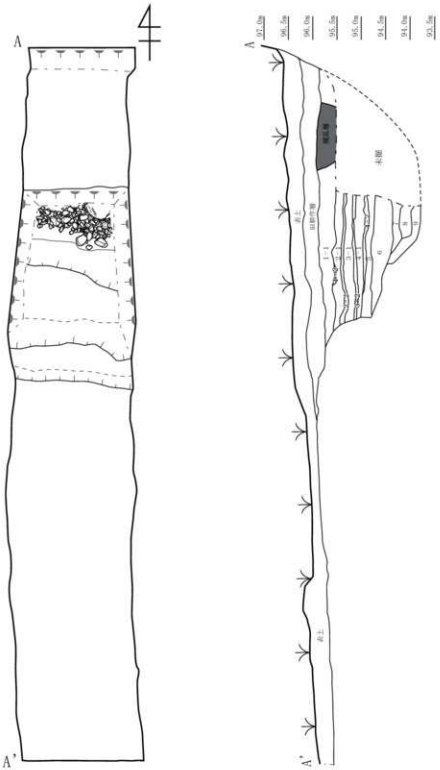
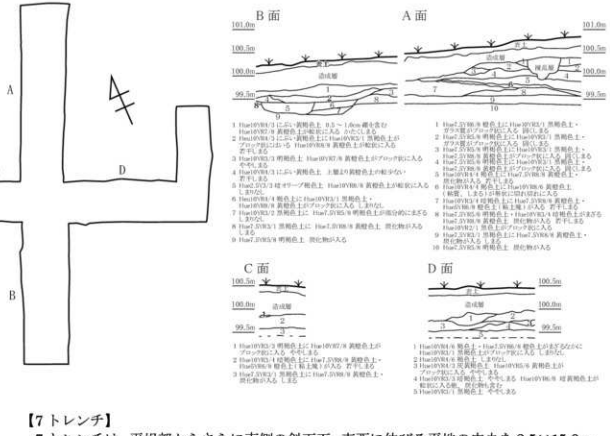


図3－12 8トレンチ 平面・土層断面図 (S＝1/80)



【7トレンチ】

7トレンチは、平坦部からさらに南側の斜面下、東西に伸びる平地の中央を2.5×15.0mの範囲で掘削した。トレンチでは幅5.6m、深さ2.1mの堀を確認した。掘削時の危険防止のため北側は掘削せず南側のみを完掘、北側は未掘削のため不明であるが、南側には、堀の立ち上がりに段を形成させる。9層から大量の礫が出土したが、意図的な造作はみられず、自然落下したものとみられ、堀存続時は9層までが自然埋没したとみられる。埋土の1から8層までは全て水平に堆積し、1から4層までは4～5cm程度薄く堆積後15～20cm程度厚く堆積するのを繰り返す。4層から18世紀から幕末の肥前系白磁椀が出土した。字図上では、平地の同一面の北側と南側で土地の所有者が分かれ、その境界には道が通る。堀の南側上端は、この道と重なる位置で出土しており、境界は堀の上端を踏襲しているのがわかる。

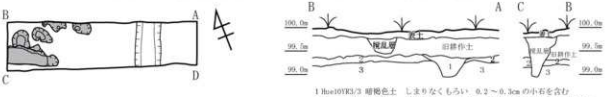
【8トレンチ】

8トレンチは、平坦地北部、北側土塁の根元部分を掘削した。地域での聞き取りから昭和40年代に8トレンチ北側の道造成時に土塁を削平したとの証言があることから、造成土が厚く堆積していることが掘削前に見込まれたが、調査の結果最大で50cm程度が造成層として残ることが明かとなった。更に直下では、土塁の基礎が確認されたが、土塁表面は、出土遺物から近現代に破壊されたとみられる。

A面では、1から3層は農作業時のビニール等含まれることから旧道造成時の埋土、4から8層は土塁の堆積土、9層が自然堆積層とみられる。土塁は9層上に築かれ、8層・7層と積み上げられた後、6層の粘質の土で表面を一度均し、さらに5層・4層と積み上げられた様子が確認できる。B面では、7層から近現代のタイルが出土していることから1から7層までは比較的新しい時期に掘削されたと判断でき、掘削は9層まで及ぶ。1から7層は土塁破壊時のものか。

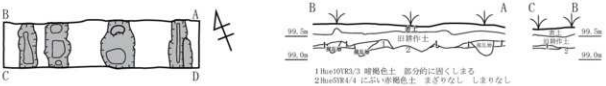
C面では2層が土塁の埋土、3層が自然堆積層、D面では4層が土塁の埋土、5層が自然堆積層にあたる。

図3－13　9トレンチ　平面・土層断面図（S＝1/80）※網かけは近現代の撹乱



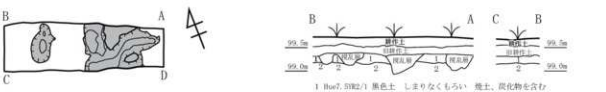
9トレンチは、平坦地北部、4.0×1.0mの範囲で掘削した。西側は撹乱により破壊、東側に溝状の遺構らしき掘り込み(1 層)を確認した。土塁の基礎で確認した黒褐色土は 2 層にあたり、12 世紀の中国華南産の白磁が出土している。

図3－14　10トレンチ 平面・土層断面図（S＝1/80）※網かけは近現代の撹乱



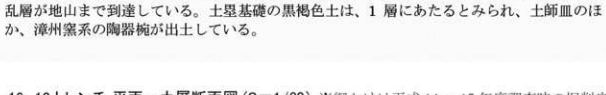
10 トレンチは、9 トレンチ南側、4.5×1.0mの範囲で掘削した。大きく 3 条の撹乱層の掘削が地山に及ぶ。土塁基礎の黒褐色土は 1 層にあたるが、撹乱層等によって大きく乱される。

図3－15　11トレンチ 平面・土層断面図（S＝1/80）※網かけは近現代の撹乱



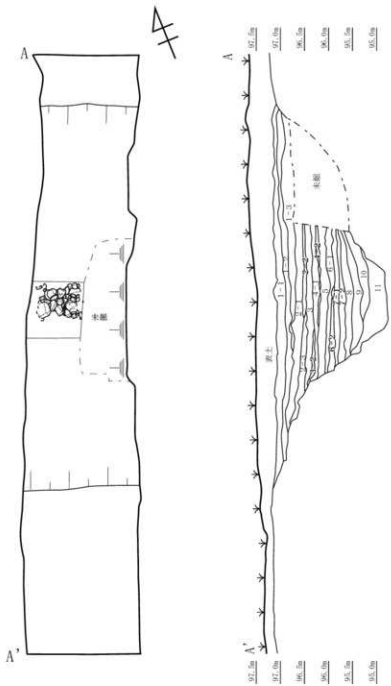
11 トレンチは、10 トレンチ南側、3.5×1.0mの範囲で掘削した。10 トレンチと同様、撹乱層が地山まで到達している。土塁基礎の黒褐色土は、1 層にあたるとみられ、土師皿のほか、漳州窯系の陶器椀が出土している。

図3－16　12トレンチ 平面・土層断面図（S＝1/80）※網かけは平成 14 ～ 15 年度調査時の掘削痕



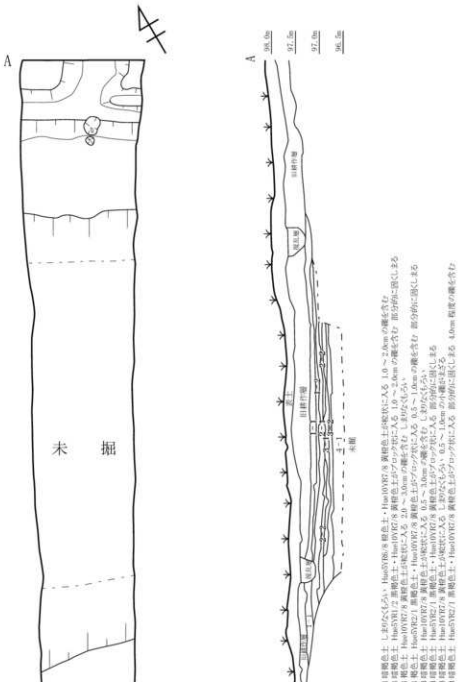
12 トレンチは、11 トレンチと 1 トレンチの間にあたり、平成 14～15 年度に行った掘削調査の再調査となる。前回調査時に出土した石列を再発掘し、石列遺構に伴う溝の立ち上がりを確認した。土層断面から判断して、溝内の埋土は平成 20 年度調査時とほぼ同様で、火山灰土を中心としており、粘土質のものや砂質のものは確認できない。トレンチ中央にみられる掘削痕は、前回（H14～16年度）調査時のものとみられる。

図3－17　13トレンチ　平面・土層断面図（S=1/80）



13 トレンチは、南側斜面下、7 トレンチから西へ 60m、2.2×12.5mの範囲で掘削した。調査では、東西にわたる幅 8.0m、深さ 2.3 m の堀を確認し、北側を除き完掘した。堀底は箱型を呈し、堀の肩に段は形成されない。7 トレンチと異なり、堀の北側の上端は斜面直下には出土せず、斜面から 2.5m 南から出土した。図化した石は全て 11 層中のもので、堀存続中に落下したものとみられる。埋土は、水平に堆積しており、人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。1～2 層中では、18 世紀から 19 世紀前半の陶磁器が出土していることから、それ以後の造成が行われたとみられる。

図3－18 14トレンチ 平面・土層断面図（S=1/80）

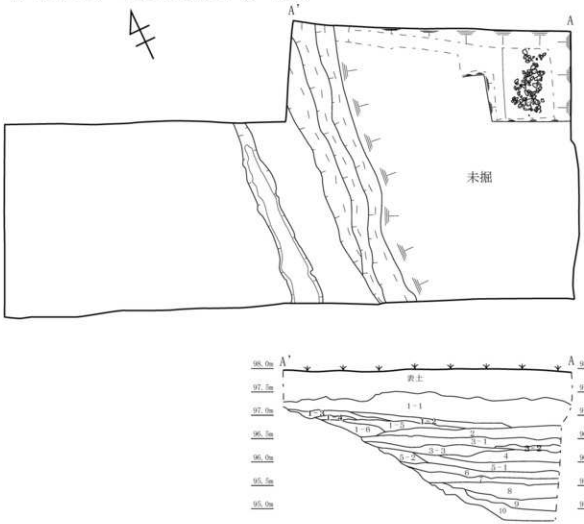


14 トレンチは、13 トレンチから西へ 25m、2.0×15.0m の範囲で掘削した。調査では東西にわたる幅 9.0～9.6m の堀を確認した。堀底は未掘削のため、形状、深さともに不明。堀の北側上端は、斜面下から南へ 4.0m の位置から出土する。堀の南北幅は、東から西へ広がる。堀の埋土は水平に堆積することから 13 トレンチと同様人為的な埋め戻しとみられる。また、埋土中にみられる黄橙色土は、堀の上端に見られる地山と酷似していることから、北側斜面を切り崩して埋め戻した可能性が高い。堀の北側上端にみられる検出面の凹凸は、その際についたものか。1 層から 18 世紀から幕末にかけての陶磁器が出土しており、以後の造成で埋め戻されたとみられる。

【平成 22 年度の調査】

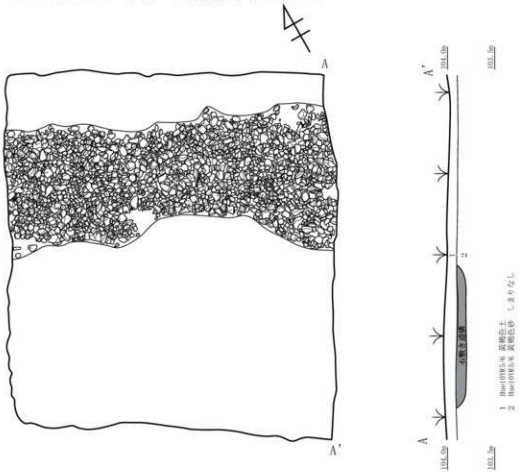
平成 22 年度は、平成 21 年度の調査で確認した南側斜面下の堀の延長部分の他、石列の分布範囲調査により明らかになった地下の反応箇所をもとに土塁上 4 か所で掘削調査を行った。

図3－19　15トレンチ　平面土層断面図（S＝1/80）



15 トレンチは、14 トレンチから西側へ 6.5m、下豊内集落から陣ノ内館跡へ登る道を挟んだ、西側崖面横に位置する。調査では、南北にわたる堀を確認した。堀東側は道下にあるため、掘削調査は行わず、堀西側の上端のみ確認した。また、土層断面確認のための掘削だけ行い、堀底は一部でのみ確認した。深さ 2.1m を測り、堀底西側の形状から箱型の可能性が高い。幅 10 層に石が堆積し、最下層から 19 世紀の磁器椀が出土する。13・14 トレンチに引き続き、埋土は水平に堆積しており人為的な埋め戻しが行われたとみられる。堀の西側に溝状の掘り込みが確認されたが、14 トレンチと同様、堀の埋土に自然堆積層と同じ黄橙色土が含まれることから、埋め戻しの際に削った痕とみられる。

図3－20　16トレンチ　平面・土層断面図（S=1/40）

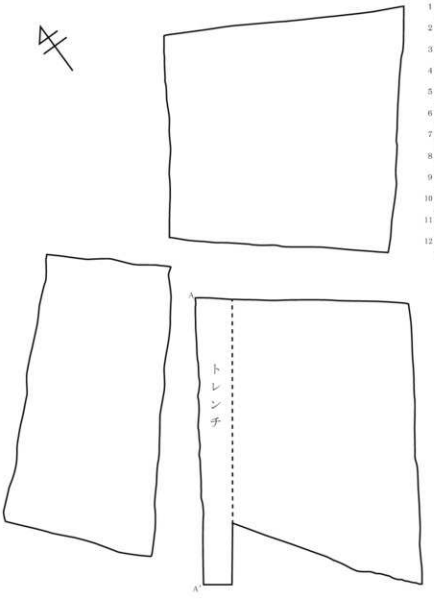


16トレンチは土塁中央部、8トレンチの北に位置し3.5×3.5mの範囲で掘削した。石列の分布範囲確認の調査に基づくもので、遺構が帯状に出土するのが予想されていた。調査方法は表土から移植ゴテにより遺構検出を繰り返しながら掘削したところ、表土直下から石敷き遺構が出土した。石敷き遺構は、東西にわたり幅0.8～1.0mを測る。中央部に一部段がつく窪みがみられる。遺構に使用された石は3.0～5.0㎝程度を中心にしており、一部に10.0㎝程度のものがみられる。表面の石の面は水平に合わせず凹凸がみられるが、全体にほぼ平坦に敷き詰められる。石の間には、土塁の堆積土である砂層が入り込み、粘土等は確認出来なかった。遺物は出土しなかった。

写真3－6　掘削状況（東から）

写真3－7　石列出土状況（東から）

図3－21　17トレンチ　平面・土層断面図（S＝1/80）



17 トレンチは、土塁上東側に位置する。石列の分布範囲確認調査に基づくもので、南北にわたる石列の出土が予想されていた。掘削調査の結果、遺構遺物は出土せず、土塁の堆積状況のみ確認した。

土塁内の土は南側から中央部に向かって土を堆積させた様子を確認することができる。土塁に用いた土は砂混じりで、0.5～5.0 ㎝程度の石を多く含む。いわゆる“川砂”に近く、7 トレンチで確認した土塁基礎の埋土と異なる。粘質土を間に入れたような形跡はみられず、単純な積みあげ造成と考えられる。

18 トレンチは、7 トレンチの東側 25m の位置を、4.0×12.5m の範囲で掘削した。東西にわたる幅 5.2m、深さ 2.5m の堀を確認した。中央に土層確認のためのベルトを残し、東西両側を完掘、堀底は箱型に近く 10 層には石が堆積していた。2～9 層は全て水平堆積しており、人為的な埋め戻しが行われたとみられる。6 層から 18 世紀後半～19 世紀初め頃の肥前系の磁器椀が出土している。

24 トレンチは、18 トレンチで確認した堀の延長形状を確認するため掘削調査した。南側は耕作により撹乱されており、トレンチ中央で堀の上端のみを確認し、掘削は行わなかった。18 トレンチから延びる堀の上端は、字図上の道とほぼ同じ軌跡をたどり 24 トレンチを東西に横断するが、土塁の上端のみトレンチ東側にみられる高まりの手前で北に曲がり、堀はそのまま閉じる。

石列の分布範囲確認調査では南側で面的に地下埋蔵物を確認しているが、調査の結果自然堆積層に含まれる大量の砂礫に反応したものとみられる。

図3－22 18トレンチ・24トレンチ平面図（S=1/100） ※網かけは近現代の撹乱

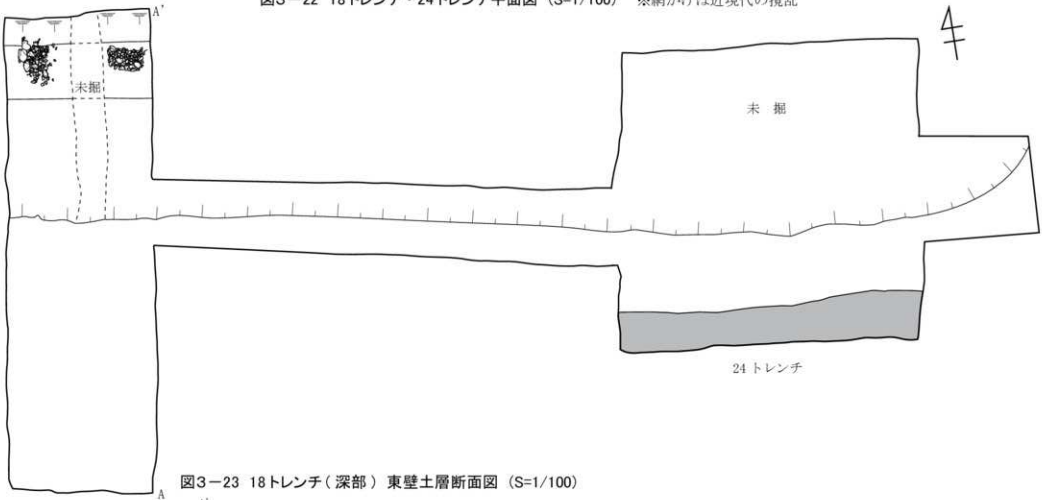
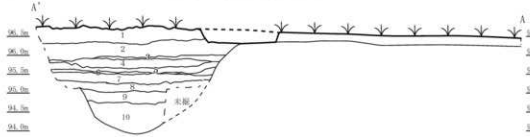


図3－23 18トレンチ（深部）東壁土層断面図（S=1/100）



1	Hue7.5YR4/3 褐色土	やや締まる	0.5cm ～2.0cm のるを含む
2	Hue7.5YR4/3 褐色土	やや締まる	0.5cm ～3.0cm のるを含む
3	Hue7.5YR4/6 褐色土	やや締まる	0.5cm ～3.0cm のるを含む
4	Hue7.5YR3/4 暗褐色土	少し屋った土	0.5cm ～4.0cm のるを含む
5	Hue7.5YR4/3 褐色土	少し屋った土	0.5cm ～4.0cm のるを含む
6	Hue7.5YR5/6 明褐色土	よく締まる	0.5cm ～1.0cm のるを含む
7	Hue7.5YR4/3 褐色土	やや締まる	1.0cm ～15.0cm のるを含む
8	Hue7.5YR5/6 明褐色土	よく締まる	1.0cm ～10.0cm のるを含む
9	Hue7.5YR5/6 明褐色土	屋った土 よく締まる	1.0cm ～10.0cm のるを含む
10	Hue7.5YR6/6 橙色土	砂混合 少し屋った土	1.0cm ～30.0cm のるを含む

【平成 23 年度の調査】

平成23年度の調査は、平成22年度に実施した調査を継続した他、すでに記した南側斜面下の南東側で確認した堀の延長 1 箇所、南西側で確認した堀の延長 1 箇所、土塁上で確認した石敷き遺構の延長 2 個所を掘削調査した。

図3－24　19トレンチ　平面・土層断面図(S=1/80)

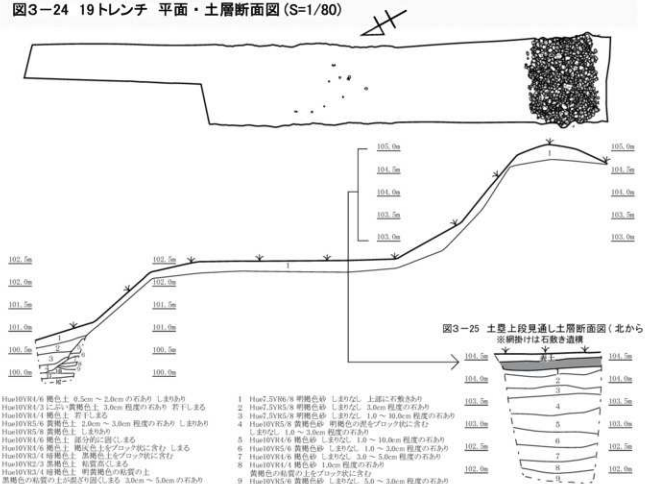
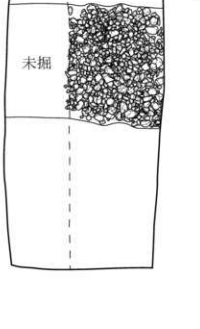


図3－25　土塁上段見通し土層断面図(北から)
※網掛けは石敷き遺構

図3－26
20トレンチ　平面図(S=1/40)

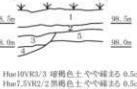


19 トレンチは、土塁上の 16 トレンチから西へ 17m、石列の分布範囲確認調査で地下に反応があった場所から、北側へ掘削範囲を伸ばし、南北延長 12.8m にわたり掘削した。南側土塁上では東西に延びる石敷き遺構を南北幅 1.6m、東西延長 2.0m で確認した。地下の範囲確認調査によって更に西側へ 10 m程度延びることを確認している。また、トレンチ北側では、7 トレンチで確認した土塁基礎にみられる黒褐色土(11 層)を確認し、広範囲にわたって堆積していることが分かる。土塁上段の見通し土層断面図では、砂層で版築状に土塁を積み上げた様子が確認できる。砂層間には粘質土はみられない。

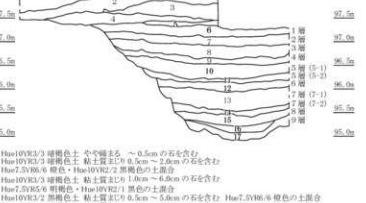
20 トレンチは、土塁上 20 トレンチから東へ 16.3mの位置を 1.6×3.5m の範囲で掘削した。調査は、石列の分布範囲確認調査に基づくもので、トレンチ北側から南北幅 1.3m、東西に延びる石敷きを延長 1.0m にわたり確認した。石敷きは 16 トレンチ同様、表面の石の面は水平に合わせず凹凸がみられ、全体にほぼ平坦に敷き詰められる。石は、3.0～4.0 ㎝程度の小礫で、16 トレンチと同様である。石敷き上面の一部に粘土状に硬化した土を確認したが、全面には広がらなかった。

図3－27 21トレンチ 平面図（S=1/250）

図3－28 土層断面図（S=1/80）



1 Hue10YR3/3 暗褐色土 やや軟まる 0.5cm ～ 1.0cm の石を含む
2 Hue7.5YR2/2黒褐色土 やや軟まる 0.5cm ～ 1.0cm の石を含む Hue7.5YR5/6 明褐色の土混合
3 Hue7.5YR3/2黒褐色土 やや軟まる 0.5cm ～ 3.0cm の石を含む Hue7.5YR6/6 橙色の土混合
4 Hue10YR2/2 黒褐色土 やや軟まる 0.5cm ～ 1.0cm の石を含む
Hue7.5YR2/2黒褐色・Hue10YR2/3 黒褐色・Hue10YR4/4 褐色の土混合
5 Hue10YR 2/3黒褐色土 やや軟まる 0.5cm ～ 1.0cm の石を含む Hue10YR4/4 褐色の土混合



1 Hue10YR3/3 暗褐色土 やや軟まる ～0.5cm の石を含む
2 Hue10YR3/3 暗褐色土 粘土質まじり 0.5cm ～ 2.0cm の石を含む
Hue7.5YR6/6 橙色・Hue10YR2/2黒褐色の土混合
3 Hue10YR3/3 暗褐色土 粘土質まじり 1.0cm ～6.0cm の石を含む
Hue7.5YR5/6 明褐色・Hue10YR2/1 黒色の土混合
4 Hue10YR3/2 黒褐色土 粘土質まじり 0.5cm ～ 5.0cm の石を含む Hue7.5YR6/6 橙色の土混合
5 Hue10YR3/3 暗褐色土 粘土質まじり 1.0cm ～ 5.0cm の石を含む Hue7.5YR6/6 橙色の土混合
6 Hue10YR2/2 黒褐色土 やや軟まる 0.5cm ～ 3.0cm の石を含む
Hue10YR5/8 黄褐色・Hue5YR5/8 赤褐色の土混合
7 Hue10YR2/2 黒褐色土 粘土質まじり 1.0cm ～ 7.0cm の石を含む
Hue10YR4/4 褐色・Hue10YR3/1 黒褐色の土混合
8 Hue10YR3/3 暗褐色土 やや軟まる 0.5cm ～ 1.0cm の石を含む
Hue7.5YR5/6 明褐色・Hue10YR2/2黒褐色の土混合
9 Hue10YR2/2 黒褐色土 粘土質まじり ～0.5cm の石を含む Hue7.5YR5/6 明褐色の土混合
10 Hue10YR3/3 暗褐色土 粘土質まじり ～0.5cm の石を含む Hue7.5YR6/6 橙色・Hue10YR4/3 にぶい黄褐色・
Hue10YR5/6 黄褐色・Hue10YR2/2 黒褐色・Hue10YR4/4 褐色の土混合
11 Hue10YR5/6 暗褐色土 粘土質 ～0.5cm の石を含む黒色の土混合
Hue10YR3/2 黒褐色・Hue10YR2/2 黒褐色・Hue10YR2/1 黒色の土混合
12 Hue10YR3/3 暗褐色土 粘土質まじり 0.5cm ～ 1.0cm の石を含む
Hue7.5YR5/6 明褐色・Hue10YR3/2黒褐色の土混合
13 Hue10YR3/3 暗褐色土 粘土質まじり 1.0cm ～ 3.0cm の石を含む
14 Hue10YR3/3 暗褐色土 砂質しまり土 1.0cm ～ 5.0cm の石を含む Hue10YR4/3 にぶい黄褐色の土混合
15 Hue10YR3/3 暗褐色土 砂・粘土質混じり 1.0cm ～ 3.0cm の石を含む
Hue7.5YR6/6 橙色・Hue 10YR2/1 黒色・Hue10YR4/4 褐色の土混合
16 Hue10YR3/3 暗褐色土 砂・粘土質混じり 3.0cm ～ 20.0cm の石を大量に含む
17 Hue10YR3/3 暗褐色土 砂質ローム しまり土 1.0cm ～ 3.0cm の石を含む Hue 5Y 7/8 黄色砂質

21 トレンチは 15 トレンチ北側を南北 60mにわたり掘削した。トレンチ南西側及び北東側に堀の上端を確認したのみで、中央の一部を堆積及び堀底確認のために完掘した。堀底は箱型を呈し、埋土は水平に堆積しており人為的な埋め戻しが行われたとみられる。トレンチ南西側で、深さ 5 ㎝程度の溝状の浅い掘り込みを確認したが、15 トレンチ同様、堀埋め戻し時の掘削痕とみられる。21 トレンチ北側の土層断面（A-A'）では、他トレンチで確認した土塁基礎に堆積する黒褐色土（5層）を確認できる。5層上層は、造成により失われており、土塁の有無は確認できなかった。

図3－29
22トレンチ　平面図（S=1/40）

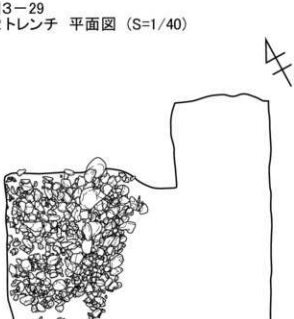
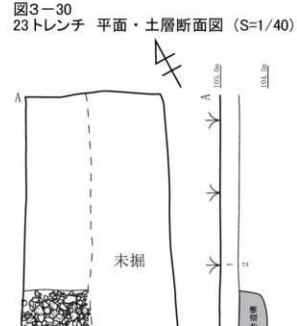


図3－30
23トレンチ　平面・土層断面図（S=1/40）



【22トレンチ】

22トレンチは、土塁上19トレンチから東へ2.5m、2.0×3.5mの範囲で掘削した。調査は石列の分布調査に基づくもので、19トレンチに引き続き石敷き遺構が土塁表面を覆うように出土した。石敷き遺構は、東にある16トレンチとつながることが想定されたが、調査の結果つながらず、16トレンチから延びる石敷き遺構の端部も確認できなかった。

【23トレンチ】

23トレンチは、土塁上20トレンチから東へ23m、1.8×3.8mの範囲で掘削した、調査は石列の分布調査に基づくもので、20トレンチから延びる石敷き遺構を確認した。出土した幅は、南北幅0.4m、東西幅0.8mを測る。一部掘削した結果、深さ30㎝程度の掘り込み内に、石のみが出土し、その他の土はほとんどみられない。23トレンチで確認した石敷き遺構は、16・20トレンチで確認したものと比較して幅が細いことから、石敷きの上部構造に用途や形態の違いがあることが考えられる。

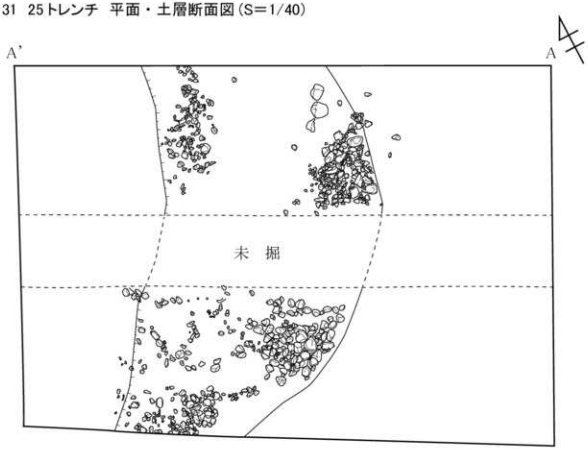
【平成24年度の調査】

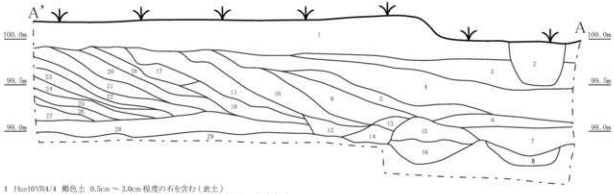
平成24年度の調査は、平坦部の北西・北東・南東・南西端の堆積状況及び西側崖面横で確認した堀の延長を確認するために、6箇所を掘削調査した。

【25トレンチ】

25トレンチは、中央平坦部の北西端の堆積状況と北側土塁基礎部分の堆積を確認するために、7.8×4.0mの範囲で掘削した。調査では、黒褐色土(28層)上に土塁の堆積(11～27層)及び土塁が壊された以後の堆積(12～3層)を確認した。土塁上には、3.0～10.0㎝程度の石が出土しているが、破壊された状況から本来の位置は保たれていないものとみられる。土塁の埋土は、東側から西側に向かい砂層及び砂質土が版築状に堆積しており、5.0㎝程度の小礫が混ざる。12層から上層は、土塁が造成等により壊された際の埋土で、それに伴う掘削は16層及び8層にみられるよう自然堆積層である29層に及ぶ。

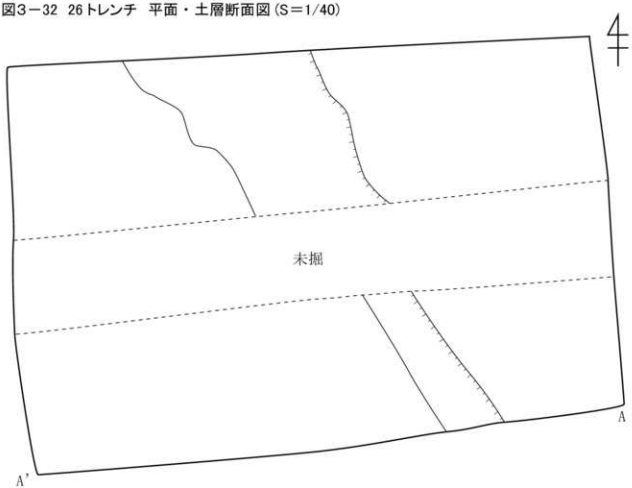
図3－31　25トレンチ　平面・土層断面図（S＝1/40）





1　Hue10YR4/4　褐色土　0.5cm ～ 3.0cm 程度の石を含む（表土）
2　Hue10YR3/4　暗褐色土　0.5cm 程度の石を含む　木の根が入る　カクラン土　しまりなし
3　Hue10YR3/4　暗褐色土　0.5cm 程度の石を含む　しまる
4　Hue10YR3/3　暗褐色土　0.5cm 程度の石を含む　ゆるい
5　Hue10YR3/3　暗褐色土・Hue10YR4/4　褐色土が点ざる　0.5cm ～ 3.0cm程度の石を含む　しまりなし。
6　Hue10YR2/2　黒褐色土　1.0cm 程度の石を含む　しまる
7　Hue2.5Y6/6　明黄褐色土に Hue2.5Y5/2　暗灰褐色土が帯状に入る　1.0cm ～ 3.0cm の石を含む　しまりなし
8　Hue2.5Y3/2　黒褐色土　混ざりなくしまる
9　Hue10YR6/6　明黄褐色土　1.0cm ～ 3.0cm の石を含む　しまりなし。Hue10YR3/2　黒褐色土がブロック状に入る
10　Hue10YR7/8　黄橙色砂と Hue10YR6/4　に近い黄褐色砂と Hue10YR4/4　褐色砂が混ざった砂層　3.0cm ～ 6.0cm の石を含んだしまりのない砂層
11　Hue10YR6/8　明黄褐色土　Hue10YR3/1　黒褐色土がブロック状に入る　0.3cm ～ 3.0cm の石含む　しまりなし。
12　Hue10YR7/8　黄橙色砂と Hue10YR6/4　に近い黄褐色砂と Hue10YR4/4　褐色砂が混ざった砂層　3.0cm ～ 14.0cm の石を含んだしまりのない砂層
13　Hue10YR3/3　暗褐色土　3.0cm ～ 5.0cm の石を含む　しまりなし
14　Hue10YR3/3　暗褐色土　Hue10YR6/8　明黄褐色の粒を含む　しまりなし　3.0cm ～ 10.0cm の石を含む
15　Hue10YR3/3　暗褐色土　3.0cm ～ 5.0cm の石を含む　しまる
16　Hue10YR3/2　暗褐色土　3.0cm ～ 5.0cm の石を含む　しまりなし
17　Hue10YR6/8　明黄褐色土に Hue10YR4/1　褐灰色土がブロック状に入る　粘質があり、また　石などの混ざりなし。
18　Hue10YR6/8　明黄褐色土に Hue10YR3/1　黒褐色土・Hue10YR5/1　褐灰色土・Hue10YR5/2 灰黄褐色土をブロック状に含む　固くしまる
19　Hue10YR5/4　に近い黄褐色土に Hue10YR4/1　褐灰色土・Hue10YR5/2 灰黄褐色土がブロック状に入る　固くしまる
20　Hue2.5Y3/2　黒褐色に Hue10YR6/8　明黄褐色の粘質土を粒状に含む　5.0cm 程度の石を含む　しまりなし。
21　Hue10YR6/8　明黄褐色砂に Hue10YR6/3 に近い黄橙色砂・Hue10YR5/2 灰黄褐色砂が入る砂層　Hue10YR6/8　明黄褐色の粘質土を粒状に含む　5.0cm の石を含む　しまりなし。
22　Hue10YR3/3　暗褐色砂に Hue10YR6/8 明黄褐土が混ざる　Hue10YR4/3　褐灰色土がブロック状に入る　Hue10YR6/8　明黄褐色の粘質土を粒状に含む 5.0cm 程度の石を含む　しまりなし。
23　Hue10YR6/8　明黄褐土に Hue10YR5/3 に近い黄褐色砂が混ざる　Hue10YR6/8　明黄褐色の粘質土が混ざる　2.0cm ～ 5.0cm の石を含む　しまりなし。
24　Hue2.5Y5/4　黄褐色砂に Hue2.5Y7/8 黄色砂・Hue10YR6/4 に近い黄褐色砂が混ざる砂層　Hue10YR6/8　明黄褐色の粘質土を粒状に含む　1.0cm ～ 5.0cm の石を含む　しまりなし
25　Hue2.5Y5/4　黄褐色砂に Hue2.5Y7/8 黄色砂・Hue10YR6/4 に近い黄褐色砂が混ざる砂層　Hue10YR6/8　明黄褐色の粘質土が混ざる　0.5cm 程度の石を大量に含む　しまりなし。
26　Hue10YR6/8　明黄褐色土に Hue10YR3/1　黒褐色土がブロック状に混ざる　固くしまる　3.0cm ～ 5.0cm の石を含む
27　Hue10YR3/2　暗褐色土に Hue10YR4/2 灰黄褐色土・Hue10YR6/8 明黄褐色土がブロック状に混ざる　しまりなし。
28　Hue10YR2/1　黒色土　混ざりなし　しまる
29　Hue7.5YR4/6　褐色土　混ざりなし　しまる

図3－32 26トレンチ 平面・土層断面図(S＝1/40)

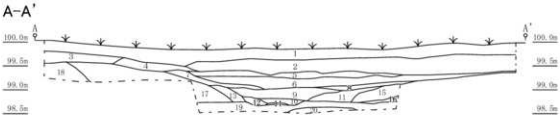


1 Hue10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりなし 1.0cm 程度の石を含む
2 Hue10YR4/2 灰黄褐色土 しまりなし 3.0 ～ 4.0cm の石を含む 黄橙色粘質土をブロック状に含む
3 Hue10YR3/2 黒褐色土 しまりなし 0.5 ～ 4cm の石を含む
4 Hue10YR5/6 黄褐色土 しまりなし 明黄褐粘質土をブロック状に含む
5 Hue10YR4/2 灰黄褐色土 しまりなし 黄橙粘質土をブロック状に含む 3.0 ～ 4.0cm の石を含む 炭化物を多量に含む
6 Hue10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 0.3 ～ 0.4cm の石を含む
7 Hue10YR3/4 暗褐色土 しまる 1.0 ～ 2.0cm の石を含む
8 Hue10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまる 褐灰色土が混ざる
9 Hue10YR4/6 褐色土 しまる 混ざりなし
10 Hue10YR3/1 黒褐色土 しまる 部分的に褐色土が混ざる
11 Hue10YR4/4 褐色土 しまる 部分的に黒褐色土が混ざる
12 Hue10YR3/4 暗褐色土 しまる 部分的に黒褐色土が混ざる
13 Hue10YR2/2 黒褐色土 しまる 混ざりなし
14 Hue10YR4/6 褐色土 しまる 混ざりなし

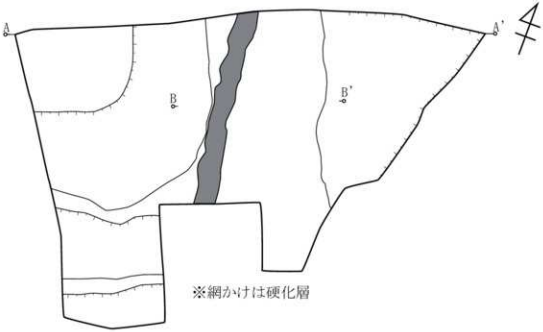
26 トレンチは、中央平坦部の北東端の堆積状況と北側土塁の基礎部分の堆積を確認するため、6.0×4.0m の範囲で掘削した。調査では、黒褐色土(13 層)を基礎に、8～12 層で土塁の堆積を確認した。土塁の堆積は 25 トレンチのものと異なり、地山である明褐色土を用いており、砂や砂質土はみられない。石などの混ざりもなく、地山を削りそのまま堆積させたものとみられる。他トレンチと比較して土塁の端部が垂直に近く立っていることから、土塁の旧地形をとどめている可能性が高い。2～7 層は、8 トレンチ同様に道路造成時の堆積とみられる。

図3－33 27トレンチ 平面・土層断面図 (S=1/80)

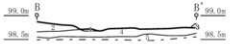
A-A'



1 Hue10YR3/3 暗褐色土 0.1cm の小石 Hue5YR5/6 明赤褐色まじり
2 Hue10YR3/3 暗褐色土 0.2cm の小石 Hue5YR4/6 赤褐色
3 Hue10YR4/4 暗褐色土 0.3cm 程度の小石 非手しまる
4 Hue10YR4/6 褐色土 0.3cm 程度の小石 しまりなし
5 Hue10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 黄褐色土がつぶ状にまざる
6 Hue10YR3/3 暗褐色土 5.0cm の小石 Hue10YR4/6 褐色
7 Hue10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 0.5cm 程度の小石
8 Hue10YR3/3 暗褐色土 2.0cm の小石 Hue10YR4/3 にぶい黄褐色
9 Hue10YR3/4 暗褐色 Hue10YR4/6 褐色砂が混ざる
10 Hue10YR4/3 にぶい黄褐色土 かたく締まる 2.0～3.0cm の小石ふくわ
11 Hue10YR4/6 褐色砂 10cm の小石 Hue7.5YR6/8 橙色・Hue10YR1.7/1 黒色砂まじり ・ Hue10YR3/3 暗褐色土 こぶし大に混ざる しまりなし
12 Hue10YR4/6 褐色土 0.5cm 程度の石ふくわ かたく締まる
13 Hue10YR4/6 褐色土 しまりなく 5.0～10.0cm の石を含む 炭化色土をブロック状に含む
14 Hue10YR6/6 明黄褐色砂 Hue10YR6/4 浅黄褐色砂 1.0cm の小石ふくわ かたく締まる ※硬化層
15 Hue10YR4/4 褐色砂 10.0cm の小石 Hue7.5YR6/8 橙色 Hue10YR1.7/1 黒砂まじり
16 Hue10YR3/3 暗褐色土 1.0cm の小石 Hue10YR4/6 褐色 Hue7.5YR6/8 橙色砂まじり
17 Hue10YR7/8 黄橙色砂 Hue10YR4/6 褐色砂 Hue10YR6/4 浅黄褐色砂 混ざる 30.0cm 程度の石混ざる
18 Hue10YR3/4 暗褐色土 締まりなくふるい 0.3cm 程度の小石混ざる
19 Hue10YR2/3 黒褐色土 Hue2.5YR5/8 明石褐色
20 Hue10YR2/2 黒褐色土 Hue10YR7/8 黄橙色土 粘質 ブロック状に入る 粘質で土も締まる



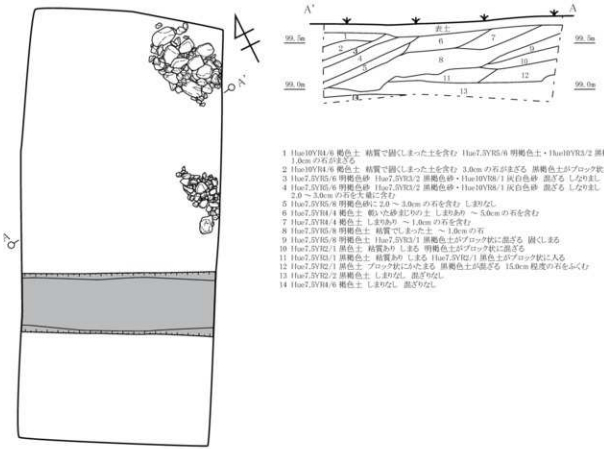
B-B'



1 Hue10YR6/6 明黄褐色砂 Hue10YR8/4 浅黄橙色砂 1.0cm の小石含む かたく締まる ※硬化層
2 Hue10YR7/8 黄橙色砂 Hue10YR4/6 褐色砂 Hue10YR6/4 浅黄褐色砂混ざる 3cm 程度の石混ざる
3 Hue10YR4/4 褐色砂 1.0cm の小石 Hue7.5YR6/8 橙色 Hue10YR1.7/1 黒砂まじり
4 Hue10YR2/3 黒褐色土 Hue2.5YR5/8 明赤褐色土が混ざる
5 Hue10YR2/2 黒褐色土 Hue10YR7/8 黄橙色土 粘質 ブロック状に入る 粘質で土も締まる

27 トレンチは、中央平坦部の南東端にあたり、「キドマル」の地名が残る箇所を、10.0×6.0m の範囲で掘削した。調査では、東西から迫りトレンチ中央で切れる土塁及び切れた部分では硬化面を確認した。残る地名と出土状況から、陣ノ内館の入口と考えられる。東側の土塁は高さ 0.56m、東西幅 3.5m、西側の土塁は、高さ 1.0m、東西幅 4.2m を測る。いずれも壊されており、本来の規模を有していないとみられる。土塁の埋土は砂及び砂質土を基本に堆積しており、粘性をもつ褐色土は用いられない。土塁間は 2.4m で、中央から西寄りに硬化層がみられる。確認した硬化層(14 層)は幅 0.4m、南北延長 4.1m を測る。19 層上で形成されており、明黄褐色砂を基本に固くしまる。19 層から 14 世紀後半の青磁が出土している。

図3－34 28トレンチ 平面・土層断面図(S＝1/40) ※網かけは近現代の攪乱



【28 トレンチ】

28 トレンチは、中央平坦部の南西端の堆積状況確認のために、4.5×2.0m の範囲で掘削した。調査では、北東から南西方向に堆積した土塁の埋土を確認した。土塁上層(3～5 層)は砂を基本に堆積、下層(6～12 層)は粘質の土を基本に堆積する。黒褐色土(13 層)上に版築状に堆積し、表面には石が出土した。石は最大で 0.3m 程度あり、他トレンチで確認したものより大型である。土塁表面に張り付くが、ここで確認された土塁も後に破壊されたものとみられ、本来の位置はとどめていない。

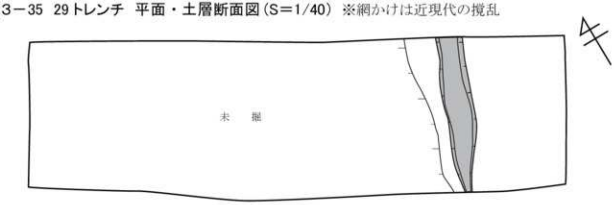
【29 トレンチ】

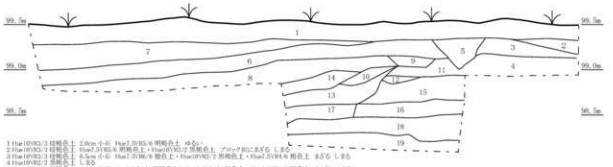
29 トレンチは、西側崖面横、25 トレンチから東側 5.35m を 5.8×1.8m の範囲で掘削した。調査では、堀の東側上端及び堀に伴う土塁の埋土を確認した。堀の上端は、南から北方向へすぼまる形状で、29 トレンチ北側高まり手前で閉じるとみられる。堀は段を設けて掘削されており、深さ 0.52m を確認した。黒褐色土(4 層)からの掘り込みで、4 層上に土塁が築かれる。造成等により上層を破壊されているが、2・3 層が土塁の埋土にあたり暗褐色土を基本とし地山の土色と酷似する。25 トレンチで確認した土塁とつながるものとみられる。

【30 トレンチ】

30 トレンチは、西側崖面横、29 トレンチから南へ 30.0m を 5.8×1.6m の範囲で掘削した。調査では、堀の東側上端及びそれに伴う土塁の埋土を確認した。堀の上端は、南北に直進し、土塁は黒褐色土(14 層)上に堆積する。土塁の埋土(13 層)は多色・種の土が混ざるもので、29 トレンチのものと異なる。土塁は造成等により壊されており、土塁本来の形状は止めていない。遺物の出土はなかった。

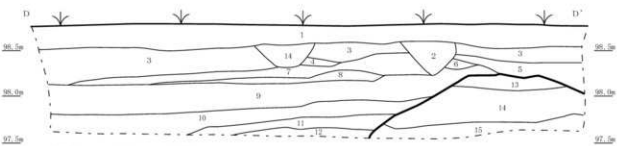
図3－35　29トレンチ　平面・土層断面図（S＝1/40）※網かけは近現代の撹乱





1 Hue10YR2/3 黒褐色土　2.0cm小石　Hue7.5YR5/8 明褐色土　ゆるい
2 Hue10YR2/3 黒褐色土　Hue7.5YR5/8 明褐色土・Hue10YR2/2 黒褐色土　ブロック状にまざる　しまる
3 Hue10YR2/3 黒褐色土　0.5cm小石　Hue7.5YR6/8 橙色土・Hue10YR2/2 黒褐色土・Hue7.5YR4/6 褐色土　まざる　しまる
4 Hue10YR2/2 黒褐色土　しまる
5 Hue10YR2/2 黒褐色土　0.5cm小石　Hue10YR2/2 黒褐色土・Hue7.5YR6/8 橙色土・Hue7.5YR4/6 褐色土　カクラン　ゆるい
6 Hue10YR2/3 褐色土　1.0cm小石　Hue7.5YR6/8 橙色土・Hue10YR2/2 黒褐色土　ゆるい
7 Hue10YR2/3 褐色土　2.0cm小石　Hue10YR2/6 暗赤褐色土・Hue10R 4/6 赤色土・Hue7.5YR6/8 橙色土・Hue7.5YR3/2 黒褐色土　まざる　ゆるい
8 Hue10YR2/3 褐色土　1.0cm小石　Hue10YR2/4 暗褐色土・Hue10YR2/2 黒褐色土　ゆるい
9 Hue10YR2/2 黒褐色土　0.5cm小石　Hue10YR5/3 暗褐色土・Hue7.5YR5/8 明褐色土・Hue2.5YR5/8 明褐色土　ゆるい
10 Hue10YR2/2 黒褐色土　粘土　Hue10YR5/3 暗褐色土・Hue10YR2/2 黒褐色土・Hue10YR2/3 黒褐色土　ゆるい
11 Hue10YR2/2 黒褐色土　しまる　遺物に多くふくむ
12 Hue7.5YR5/8 明褐色土　Hue7.5YR5/6 明褐色土　しまる
13 Hue10YR2/2 黒褐色土　0.5cm小石　Hue10YR2/2 黒褐色土・Hue7.5YR5/6 明褐色土　ゆるい
14 Hue10YR2/2 黒褐色土　0.5cm小石　Hue7.5YR4/4 褐色土・Hue10YR2/2 黒褐色土　ゆるい
15 Hue10YR2/4 暗褐色土　Hue10YR2/2 黒褐色土　しまる
16 Hue10YR2/3 褐色土　0.5cm小石　Hue10YR2/2 黒褐色土・Hue7.5YR5/3 暗褐色土　しまる
17 Hue10YR2/2 黒褐色土　0.5cm小石　Hue7.5YR5/6 明褐色土　ゆるい
18 Hue7.5YR2/2 黒褐色土　0.5cm小石　Hue7.5YR5/6 明褐色土　まざる　しまる
19 Hue7.5YR4/4 褐色土　ローム　しまる

図3－36　30トレンチ　平面・土層断面図（S=1/40）※網かけは近現代の撹乱



1 Hue10YR2/2 黒褐色土　～0.5cm小小石混じり　Hue10YR2/6 暗色土
2 Hue10YR2/3 褐色土　Hue10R5/8 赤色土　～1.0cm小石混じり　Hue7.5YR5/6 明褐色土
3 Hue10YR2/3 褐色土　Hue7.5YR5/8 明褐色土　～0.5cm小小石
4 Hue10YR2/3 褐色土　Hue7.5YR5/8 明褐色土　～0.5cm小小石混じり
5 Hue10YR2/3 褐色土　粘土混じり　Hue7.5YR4/6 暗色土　～0.5cm小小石
6 Hue10YR2/3 褐色土　～0.5cm小小石　Hue7.5YR5/8 明褐色土　粘質に混ざる
7 Hue7.5YR2/3 褐色土　粘土混ざり　Hue7.5YR5/8 明褐色土　～1.0cm小石
8 Hue10YR2/3 褐色土　0.5cm小小石　Hue7.5YR5/8 明褐色土
9 Hue10YR2/2 黒褐色土　粘土　Hue10YR4/6 暗色土・Hue7.5YR5/8 明赤褐色土・Hue7.5YR5/8 明褐色土　1.0cm小小石混じり
10 Hue10YR2/3 褐色土　Hue10YR4/6 暗色土　～0.5cm小小石
11 Hue10YR2/3 黒褐色土　粘土混じり　Hue7.5YR5/8 明褐色土　～0.5cm小小石
12 Hue10YR2/3 黒褐色土　Hue7.5YR5/8 明褐色土　粘土混じり　～0.5cm小小石
13 Hue10YR4/4 褐色土　粘土ブロック状に混ざる　Hue10YR3/4 暗褐色土　粘土混じり　Hue10YR2/3 暗褐色土・Hue10YR2/2 黒褐色土　～0.1cm小小石
14 Hue10YR2/3 黒褐色土　ブロック土　～0.1cm小小石
15 Hue7.5YR5/6 明褐色土　粘土　～0.1cm小小石

第４節　出土遺物

陣ノ内館跡の発掘調査で出土した遺物は、いずれも破砕或いは磨滅したものがほとんどで残存率 1/6 以下のものが多数を占める。このため、比較的残存率が高いものを選定し図化した場合、資料が限定され時期に片寄りがみられることとなる。また、遺構に伴うものも少なく、遺構に伴い出土してはいるが、遺構そのものの造成時期を示すものではなく、破壊或いは埋没した時期を示すものもある。掲載した資料については、以上のことを御理解のうえ参照されたい。

Ⅰ区

1 は弥生時代中期の甕の口縁部、2 ～ 4 は土師器の小皿、5 ～ 6 は土師器の皿である。小皿は、底径 5.1 ～ 5.9cm、皿は 7.1 ～ 9.6cmで、いずれも残存率 1/5 以下の小片である。調整はいずれも内外面を回転ナデ、底は回転糸切りで離す。7 は瓦質土器の火鉢の破片で、内面の調整は不明、外面はミガキ、四方襷文を施す。8 ～ 11 は、石列遺構から出土した石部材である。いずれも阿蘇溶結凝灰岩で、溶結が弱く亀裂が入りやすい。幅が広いものや先端が細いノミで加工された痕跡を確認できる。8 は残存長 42.2cm、幅 24.7cm、厚さ 16.6cmを測る。上部が一部欠損し肩から上部に向かい斜めにすぼまり、下部に突出部をつくる。上面及び裏面が一部被熱し、表面には幅 0.5・1.0・2.0cm程度のノミの痕跡を確認できる。9 は残存長 27.2cm、幅 17.1cm、厚さ 13.7cmを測る。下部裏側が欠損、六角柱状を呈す。10 は上部が欠損し、肩を L 字状に段をつくる。8 と同様、下部が突出する、形状･重量ともに類似する。11 は残存長 25.7cm、幅 18.3cm、厚 14.6cmを測る。上部が欠損、四角柱状で下部に広がる。

Ⅱ区

1・2 は土師器の小皿、3 は坏である。1・2・3 ともに内外面を回転ナデ調整し、1 の一部に静止ナデがみられる。底は全て回転糸切りで離す。4 は土錘、5 は漳州窯系の椀の口縁部で、口縁部の内外面に一重の圏線が施される。6 は景徳鎮窯系の椀の底部で、碁笥底、表面に釉薬が溶けた被熱痕を確認できる。7 は、龍泉窯系の椀の体部、8 は景徳鎮窯系の椀の口縁～体部になる。9 は磨製石鏃、10･11 は石列遺構の出土石部材になる。10 は下臼で、中心には芯棒を通した痕跡が残る。表面は、幅広と先細りしたノミを使い整形している。臼は面全体が風化・磨滅しており、「目」はほとんど残らない。主溝が 1 条、副溝が 3 条確認できる。11 は、残存長 35.2cm、幅 29.4cm、厚さ 11.3cmを測る。表裏・側面は平らに整形され、1/3 程度が欠損する。もとは板状のものであったと考えられ、表面には 0.3･0.5･1.5cmの 3 種のノミの痕跡を確認できる。祠の側壁か。

２トレンチ

1 は肥前の陶器の擂鉢で、口縁部の破片になる。表面には鉄釉がかかる。

３トレンチ

1 は縄文時代後期の鉢の体部で、内外面に押し型文を施す。2 ～ 3 は土師器の小皿で、いずれも復元底径 6.0cmを測る。内外面を回転ナデ、小破片のため切り離し方法は確認できない。

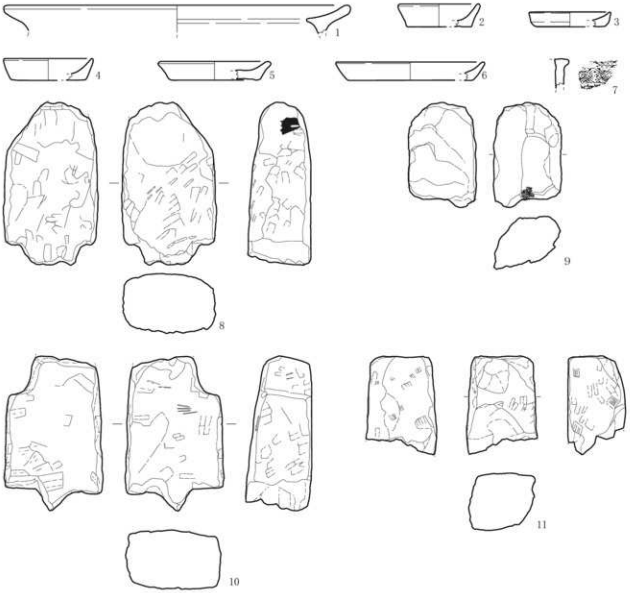


図3－37　Ⅰ区出土遺物(1～7：1／3，8～11：1／10)

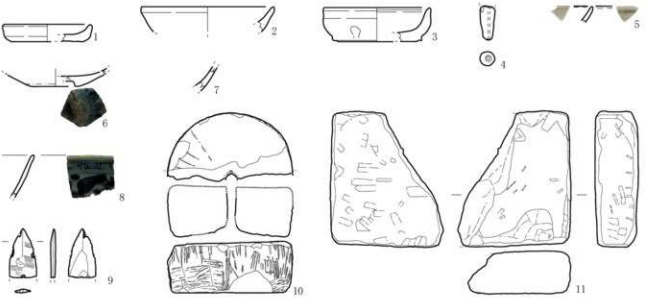


図3－38　Ⅱ区出土遺物(1～9：1／3，10～11：1／10)

4 トレンチ

1は叩き石で、上部が一部欠損、上下端部に敲打痕が残る。

7 トレンチ

1は土師器の皿で、内外面は回転ナデ、底は回転糸切りで離す。2は同安窯系の青磁椀の体部片で、13世紀初めのもの。3は肥前系の白磁椀の口縁部片で口径10.8cmを測る。4は陶器の鉢で1690～1750年代製作である。5は椀型鍛冶滓で、鍛冶炉底についたものである。大きな欠損はなく炉底の形状を推測できる。

8 トレンチ

1～10は底径4.7～6.6cmを測る小皿で、内外面はすべて回転ナデ、底は回転糸切りで離す。13は同安窯系の椀で12世紀中頃～後半のもの、15は龍泉窯系の椀で同じく12世紀中頃～後半のものである。17は高麗代の皿の破片で内面に菊花文、外面に蓮花文を施す。底部が1/5程度残存、象嵌が施される。13世紀終わり～14世紀初頭のもの。

9 トレンチ

1・2は土師器の底径6.7～6.8cmの中型の皿で、内外面は回転ナデ調整、底は回転糸切りで離す。3は土錘で長さ4.35cm、幅1.05cmを測る。4は華南産の白磁で、12世紀のものである。

10 トレンチ

1は土師器の小皿で、内外面は回転ナデ、底は回転糸切りで離す。2は漳州窯系の皿で、口縁部が外反、16世紀後半～17世紀初頭のもの、3は陶器鉢の口縁部で18世紀前半のものである。

11 トレンチ

1は弥生時代後期の甕の口縁～胴部にかけてで、内面はハケ目、外面はナデ・ハケが施される。3は石鍋の一部で、鍋縁を回るつまみ部分が残存する。4・5は磁器の椀で、4は18世紀後半～19世紀前半、5は18世紀後半～幕末のもので、ともに在地のものとみられる。

12 トレンチ

1は土師器の坏で、内外面に回転ナデを施す。2は漳州窯系の磁器椀で口縁の内外面に圏線を施す、3は肥前の磁器椀で内外面に一重網目文を施す。18世紀のもの。4は肥前系の磁器椀で、外面に文様が施すが不明、19世紀のものである。5は磁器の椀で外面に雪輪草花文を施す。18世紀後半～19世紀初頭のもの。6は漳州窯系の磁器皿で内面に圏線、外面に文様を施す。16世紀後半のもの。7は肥前系の皿で、18世紀末～幕末にかけてのもの。8は肥前の磁器鉢の口縁部の破片で17～18世紀のもの。9は肥前の陶器鉢で、18世紀のもの。

図3－39 2トレンチ出土遺物(1／3)

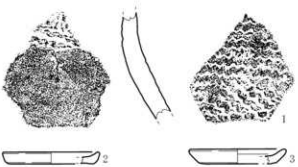


図3－40 3トレンチ出土遺物(1／3)

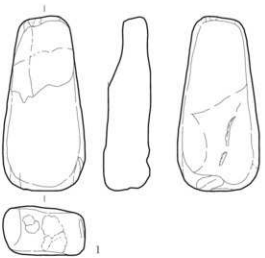


図3－41 4トレンチ出土遺物(1／3)

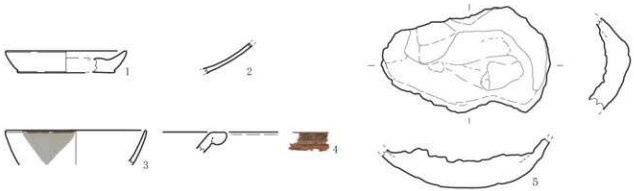


図3－42 7トレンチ出土遺物(1／3)

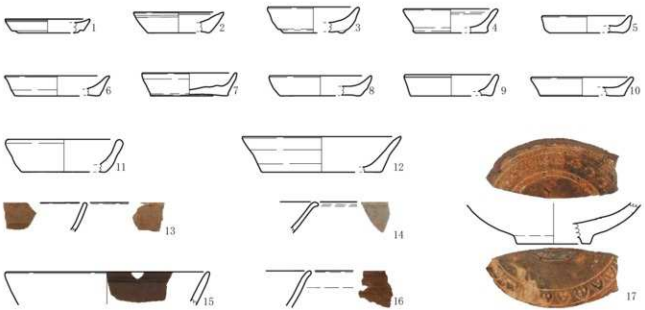


図3－43 8トレンチ出土遺物(1／3)

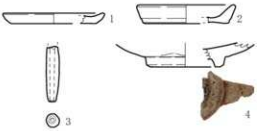
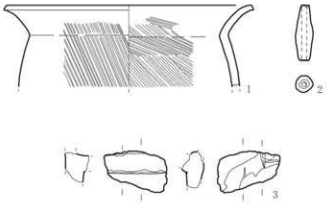


図3－44　9トレンチ出土遺物（1／3）



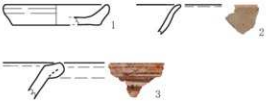


図3－45　10トレンチ出土遺物（1／3）

図3－46　11トレンチ出土遺物（1／3）

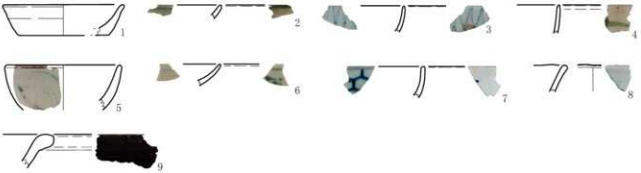


図3－47　12トレンチ出土遺物（1／3）

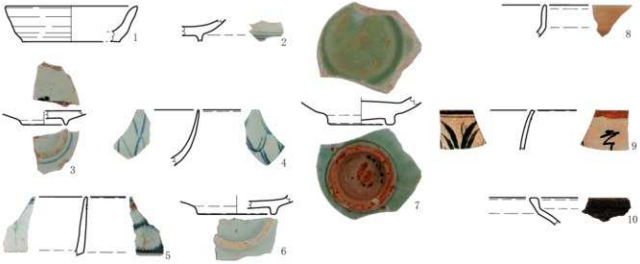


図3－48　13トレンチ出土遺物（1／3）

13 トレンチ

1は土師器の坏で内外面は回転ナデ、底は回転糸切りで離す。2は肥前系の染付椀で、貫入が入る。3は肥前系の染付椀で内面にコンニャク印判・五弁花文、外面に圏線を施したもので、18世紀後半のもの。4は肥前の染付椀で、外面に二重網目文、内面に一重網目文を施す。5は肥前の筒形椀で、内面に二重圏線、外面に雪輪文を施したもので、1780～1810年代の製作。6は肥前の皿で底部が約1/4残存。削りだし高台で釉は掻きとられる。7は龍泉窯系の青磁皿で、内面見込みに草花文、外面に鎬蓮花文を施す。精砂粒が付着する。13世紀後半～14世紀のもの。8は肥前の青磁皿で18世紀前半製作。9は肥前系の鉢で口縁部にあたる。外面に文字が描かれるが読み取れない。19世紀前半の製作。10は在地の土瓶で釉かけの後、口縁部の釉が掻きとられる。

14 トレンチ

1は土師器の坏で底径6.0cmの小型のもの。内外面ともに回転ナデで仕上げる。2は東播系須恵器の甕の破片で、13世紀の製作。3は古瀬戸の陶器袋物の胴部片である。褐釉が施され、13～14世紀のもの。4は肥前系の白磁椀で荒い貫入がみられる。5は肥前系の染付椀で、外面に葡萄文がみられる。18世紀末～19世紀前半の製作。6は肥前系の白磁皿で、18世紀末～幕末のもの。7は肥前系の染付皿で内面に草文を施す。8は肥前の陶器擂鉢の口縁部で、18世紀のもの。

15 トレンチ

1は瓦質土器の火鉢、内面をナデ、外面に菊花文を施す。2は瓦質土器の茶釜で内外面ともに回転ナデを施す。3・4は土錘でともに完存、ナデ調整で仕上げる。5は肥前系の染付椀で、口縁が外反する。内面に雷文、外面に梅文を施す。7は肥前の白磁椀で18世紀前半のもの。8は瀬戸美濃の網目文が施された色絵椀で18世紀終わり～19世紀の製作。10は肥前系の白磁小坏、18世紀末～幕末のもの。11は在地の陶器皿である。貫入が入り、口縁部が外反する。12は漳州窯系の染付皿で底部の1/6が残存。削りだし高台で、釉は掻きとられる。16世紀末～17世紀初頭の製作。14は肥前の甕の胴部片で、外面に縄状の突帯がつく。鉄釉がかかり内面には格子目の当て具痕が残る。外面はカキ目、横ナデが施される。17世紀の製作。

18 トレンチ

1は縄文時代の鉢で、押し型文が施される。2は土鈴で内面はシボリ、外面はシボリ後ナデ整形、穿孔する。3は肥前系波佐見の椀の底部で、削りだし高台で釉を掻きとる。18世紀後半～19世紀初め頃の製作。4は肥前の椀で透明釉がかかる。5は関西系の皿で口縁部が外反する。17世紀後半の製作。7は肥前の皿で透明釉がかかる。8は関西又は信楽の皿で削りだし高台を呈する。18世紀の製作。9は肥前の皿で、17世紀前半のもの。11は肥前の徳利で頸～肩部にかけての破片になる。外面に文様が施されるが不明、17世紀後半のもの。

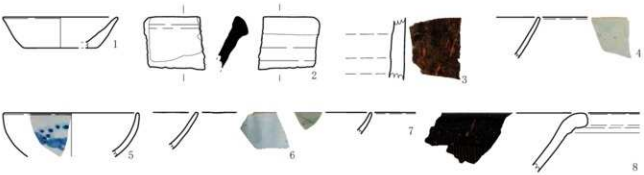


図3－49　14トレンチ出土遺物（1／3）

図3－50　15トレンチ出土遺物（1／3）

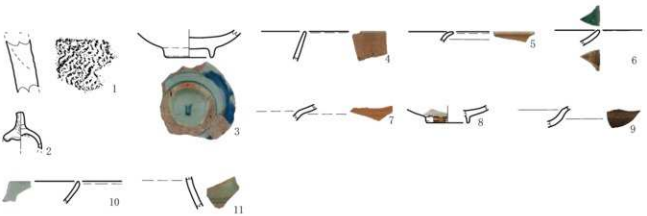


図3－51　18トレンチ出土遺物（1／3）

19 トレンチ

1は胴部の破片で外面に矢羽文を施す。18 世紀後半～ 19 世紀初めの製作。

20 トレンチ

1は見込みに二重圏線、外面に丸文、高台の外面に二重圏線を施す。削りだし高台で、内面は釉を掻きとり後アルミナを塗布されたものか。2は外面に雪輪草花文を施す。1・2ともに 18 世紀後半の製作。

21 トレンチ

1は土師器の小皿で、2・3は土師器の坏である。いずれも内外面ともに回転ナデ、底は回転糸切りで離す。

25 トレンチ

1・2は土師器の小皿、3は土師器の皿である。いずれも内外面ともに回転ナデ、底は回転糸切りで離すが、3のみ一部に静止ナデがみられる。4～8は土師器の坏で4・6・7・8は内外面ともに回転ナデ、8以外の坏の底は回転糸切りで離す。5の調整は磨滅により不明である。9は須恵器の擂鉢片で中世のものとみられる。10は刀子片で長さ7.0cm、幅1.5cmを測る。柄は確認できない。

26 トレンチ

1～2は土師器の小皿、3は皿、4～5は坏である。底部を確認できない2·5を除き、すべて内外面ともに回転ナデ、底は回転糸切りで離す。6は景徳鎮窯系の皿の口縁～体部で、16 世紀の製作。

27 トレンチ

1～3は土師器の小皿で、すべて内外面ともに回転ナデ、3のみ回転糸切りで底を離す。4は土師器の竈片でナデ調整が行われる。5・6は土錘でいずれも完存、ナデ調整が施される。7は、龍泉窯系の椀の底部で、14 世紀後半のもの。内面見込みに草花文を施し、高台は削り出す。8は、景徳鎮窯系の染付椀の底部片で、16 世紀後半のもの。9は、15 世紀後半～ 16 世紀頃の染付皿の口縁部の破片で、中国産か。11は、龍泉窯系の袋物胴部下位の破片で、外面に鎬蓮弁文を施す。

表面採集遺物

1は朝鮮王朝期の陶器皿で、16 世紀のものとみられる。

図3－52　19トレンチ出土遺物（1／3）

図3－53　20トレンチ出土遺物（1／3）

図3－54　21トレンチ出土遺物（1／3）

図3－55　24トレンチ出土遺物（1／3）

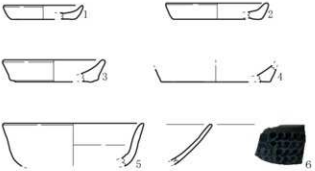


図3－57　26トレンチ出土遺物（1／3）

図3－59　表面採集遺物（1／3）

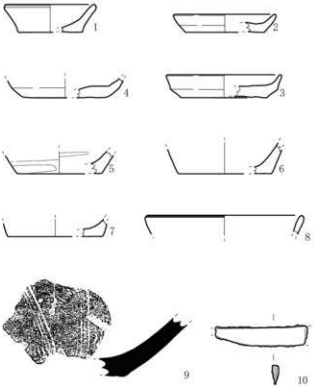


図3－56　25トレンチ出土遺物（1／3）

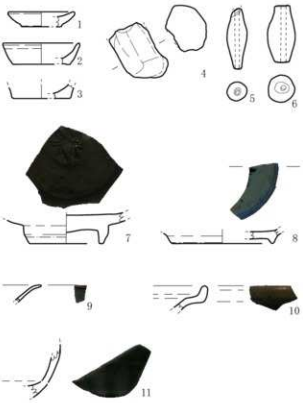


図3－58　27トレンチ出土遺物（1／3）

Ⅰ区出土遺物観察表(土器類)

掲図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 最高又は残存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	5層	弥生土器	壺	1/13	(26.6)			良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
2	1層	土師器	小皿	1/5	(6.1)	(5.1)	1.8	良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙/にぶい橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
3	2層	土師器	小皿	1/6	(6.2)	(5.5)	1.15	良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
4	2層	土師器	小皿	1/5	(6.8)	(5.9)	1.7	良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
5	2層	土師器	皿	1/6	(8.4)	(7.1)	1.45	良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
6	2層	土師器	皿	1/6	(11.4)	(9.6)	1.4	良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
7	2層	瓦質土器	火鉢					良	～0.5mの砂粒	-/灰	内:一外:1次ガキ、西方種文	

Ⅰ区出土遺物観察表(石製品類)

掲図番号	出土位置	種別	法量(cm) 長	法量(cm) 幅	法量(cm) 厚	重量(kg)	色調(内/外)	備考
8	石列遺構	石部材	42.2	24.7	16.8	17.2	-/灰	上部石側斜めにすぼまる、下部突出部をつくる、裏面被熱痕
9	石列遺構	石部材	27.2	17.1	13.7	4.8	-/灰	下部裏側矢頃、六角持名量す
10	石列遺構	石部材	37.05	25.7	17.0	16.6	-/灰	上部欠損、上部石は平型に段をつくる、下部突出部をつくる
11	石列遺構	石部材	25.7	18.3	14.6	4.8	-/灰	下部欠損、下部にかけて低かる取焼?

Ⅱ区出土遺物観察表(土器類)

掲図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 最高又は残存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	2層	土師器	小皿	1/5	(6.7)	(5.6)	1.35	良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内:回転ナデ 静止ナデ 外:回転ナ	
2	2層	土師器	小皿	1/6	(10.3)			良	～0.5mの砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
3	1層	土師器	坏	1/5	(8.2)	(7.0)	2.65	良	～1.0mの砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
4	2層	土師			底2.65	幅1.15	厚1.1	良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙	ナデ	

Ⅱ区出土遺物観察表(陶磁器)

掲図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 最高又は残存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
5	2層	磁器	碗				1.25	灰白			染付・貫入	口縁内外面一重圏線	わずれな草		轆轤		16世紀末～17世紀初 中国漳州窯系
6	2層	磁器	碗	底部破片			1.4	灰白			染付				轆轤		15世紀後半～16世紀前半、景德鎮窯系
7	石列遺構4	磁器	碗	体部下位			1.9	灰白	青磁	白緑	染付				轆轤		13世紀後半、龍泉窯系
8	2層	磁器	碗	口縁部			3.3	灰白			染付				轆轤		16世紀、景德鎮窯系

Ⅱ区出土遺物観察表(石製品類)

掲図番号	出土位置	種別	法量(cm) 長	法量(cm) 幅	法量(cm) 厚	重量(kg)	色調(内/外)	備考
9	2層	蔵製石臼	3.8	2.1	0.4			
10	石列遺構	石部材	17.75	22.5	13.4	6.7	-/灰	半分欠損、表面一部研磨?表面に摩れあり
11	石列遺構	石部材	35.2	20.4	11.3	8.8	-/灰	斜めに半分かける、表裏・側面は平り

2トレンチ出土遺物観察表(陶磁器)

掲図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 最高又は残存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
1	2層	陶器	擂鉢				2.5	オリーブ黒	鉄釉	焦茶					轆轤	回転ナデ	17世紀半ば～後半? 肥前

3トレンチ出土遺物観察表(土器)

掲図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 最高又は残存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	2層中間	縄文土器	鉢	—	—	—	—	良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙/橙	内:押し型文・ナデ 外:押し型文	
2	1層	土師器	小皿	1/8	(7.3)	(6.0)	0.9	良	～0.5mの砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
3	2層中間	土師器	小皿	1/8	(7.3)	(6.0)	1.15	良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	

4トレンチ出土遺物観察表(石器)

掲図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 最高又は残存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	3層	石器	敲石	—	13.55	6.4	3.8	—	—	—	全体的に研磨、上下端に敲打痕	

7トレンチ出土遺物観察表(土器)

掲図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 最高又は残存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	耕1層	土師器	皿	1/6	(9.2)	(7.6)	1.7	良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	

7トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は現存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
2	昭6間	磁器	椀	体部下			2.4	灰白	青磁	釉色調					轆轤		13世紀初め、同安窯系
3	昭4-1間	磁器	椀	口縁部破片	10.8		2.7	灰白	白磁	オイスター					轆轤		18世紀～幕末、肥前系
4	昭2-1間	陶器	鉢	口縁部破片			1.6	にぶい褐	薬医釉	ベージュ					轆轤		1690～1750

7トレンチ出土遺物観察表（その他）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は現存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
5	昭6間	鉄滓	—	—	—	—	—	—	—	—		椀型滓

8トレンチ出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は現存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	北 5間	土師器	小皿	1/6	(6.6)	(4.7)	1.05	良	～0.5mm砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
2	北 9間	土師器	小皿	1/6	(6.5)	(4.8)	1.6	良	～0.5mm砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
3	北 9間	土師器	小皿	1/6	(6.9)	(5.4)	2.0	良	～0.5mm砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
4	北 7間	土師器	小皿	1/5	(7.1)	(5.4)	1.85	良	～0.5mm砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
5	南 5間	土師器	小皿	1/6	(8.8)	(5.8)	1.35	良	～0.5mm砂粒	にぶい橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
6	東 5間	土師器	小皿	1/4	(8.0)	(6.0)	1.55	良	～0.5mm砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
7	南 7間	土師器	小皿	1/4	(7.3)	(6.1)	1.75	良	～0.5mm砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
8	東 5間	土師器	小皿	1/4	(7.8)	(6.2)	1.55	良	～0.5mm砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
9	南7間	土師器	小皿	1/5	(7.2)	(6.4)	1.65	良	～0.5mm砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
10	北 2間	土師器	小皿	1/5	(7.8)	(6.6)	1.45	良	～0.5mm砂粒	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
11	北 3間	土師器	坏	1/7	(8.8)	(6.6)	2.55	良	～0.5mm砂粒	にぶい黄橙/灰黄	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
12	東 5間	土師器	坏	1/7	(12.3)	(9.4)	2.75	良	～0.5mm砂粒	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	

8トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は現存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
13	北 2間中間	磁器	椀	口縁部破片			2.3	灰白	青磁	ミストグリーン	貫入	内外面櫛状工具による縦線文			轆轤		12世紀中頃～後半、同安窯系
14	北 3間	磁器	椀	口縁部破片			2.4	灰白	白磁	オイスター					轆轤		12世紀後半、中国 口縁部外反
15	北 2間中間	磁器	椀	口縁部破片	15.7		2.55	灰白	青磁	油色	片切彫り	内面:飛雲文			轆轤		12世紀中頃～後半、龍泉窯系
16	北 9間	磁器	椀	口縁部破片			2.8	褐灰	青磁	油色					轆轤		中世、中国
17	北 5間	陶器	皿	底部1/5		5.6	3.2	灰	透明釉	透明 ハニースイート	白土象嵌 印花	内面:菊花文 外面:蓮弁文	白ゆり色 (白土)		轆轤 削り出し高台 象嵌 施釉 高台釉掻き上		13世紀終わり～14世紀初頭 高麗

9トレンチ出土遺物観察表（土器類）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は現存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	2間	土師器	小皿	1/6	(7.8)	(6.7)	0.8	良	～0.5mm砂粒	にぶい黄橙/にぶい橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
2	2間	土師器	小皿	1/5	(7.5)	(6.8)	1.45	良	～0.5mm砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
3	2間	土製品	土錘	完存	長(4.35)	幅(1.05)	厚(1.05)	良	～0.5mm砂粒	橙	ナデ	

9トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は現存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
4	2間	磁器	皿?	底部1/6		5.4	1.9	灰白	白磁	透明					轆轤 削り出し高台		12世紀、中国華南産

10トレンチ出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は現存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	1間	土師器	小皿	1/6	(8.0)	(6.9)	1.6	良	～0.5mm砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	

10トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は現存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
2	1間	陶器	皿	口縁部破片			2.35	にぶい黄橙	白釉	サロー	貫入				轆轤		16世紀後半～17世紀初 口縁部外反 中国 漳州窯系
3	1間	陶器	鉢	口縁部破片			2.85	明赤褐		クリーム色	白化粧土	外面刷毛目による横線			轆轤		18世紀前半

11トレンチ出土遺物観察表（土器類）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は残存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	1層	弥生土器	甕	1/5	—	—	—	良	～0.5mmの砂粒	にぶい黄橙/浅黄橙	内/回転ナデ 外/口縁:ナデ・体部	
2	1層	土製品	土錘	完存	長4.4	幅1.4	厚1.4	良	～1.0mmの砂粒	明赤褐	ナデ	
3	1層	石器	石鏃	—	—	—	—	—	—	—	ケズリ	

11トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は残存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
4	1層	磁器	椀	底部破片		6.4	2.4	にぶい黄橙			染付	内面二重圏線	露草色		轆轤 削り出し高台 高台畳付釉掻きとり 糸		焼成不良 18世紀後半～19世紀前半、在地？
5	投入内	磁器	椀	口縁部破片	11.4		2.3	灰白			染付	外面:笹？竹？)文			轆轤		18世紀後半～幕末、在地

12トレンチ出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は残存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	2層	土師器	坏		(9.4)	(7.0)	2.4	良	～0.5mmの砂粒	橙/橙	内/回転ナデ 外/回転ナデ	

12トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は残存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
2	2層	磁器	椀	口縁部破片			1.05	にぶい黄橙			染付 貫入	口縁内外面に圏線	藍色		轆轤		16世紀後半、瀬州窯系
3	2層	磁器	椀	口縁部破片			2.05	灰白			染付	内外面(一重網目)文	藍色		轆轤		18世紀、肥前
4	2層	磁器	椀	口縁部破片			2.25	灰白			染付	外面文様	オリーブグリーン		轆轤		19世紀、肥前系
5	2層	磁器	椀	口縁～体部破	8.9		3.55	灰白			染付	外面(雪輪草花)文	浅はなだ		轆轤		19世紀後半～19世紀初頭、波佐見
6	2層	磁器	皿	口縁部破片			1.7	灰白			染付	内面圏線 外面圏線 文様	ボトルグリーン		轆轤		16世紀後半、瀬州窯系
7	2層	磁器	皿	口縁部破片			2.45	灰白			染付 貫入	内外面文様	紺青色		轆轤		18世紀末～幕末、肥前系
8	2層	磁器	鉢?	口縁部破片			2.1	灰白	白磁	ﾘﾘｰ&ホワイト					轆轤	型打ち？	17～18世紀、肥前
9	2層	陶器	鉢	口縁部破片			2.65	明赤褐	鉄釉	トーブ					轆轤		19世紀、肥前

13トレンチ出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は残存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	縦1-1層	土師器	坏	1/5	(10.2)			良	～0.5mmの砂粒	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内/回転ナデ 外/回転ナデ	

13トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は残存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
2	縦1-1層	磁器	椀	底部破			1.75	灰白			染付 貫入	外面二重圏線	浅はなだ		轆轤 削り出し高台		18世紀後半～19世紀初め、肥前系
3	縦1-1層	磁器	椀	底部1/4	1.1		3.3	灰白			染付	内面(コンニャク印刻 五弁花)文 外面圏	藍鉄わすれな草色		轆轤 削り出し高台 高台畳付釉掻きとり		18世紀後半、肥前系
4	縦1-1層	磁器	椀	口縁部破片			4.4	灰白			染付 貫入	外面(二重網目)文 内面(二重網目)文	うす水色		轆轤		18世紀前半、肥前
5	縦1-1層	磁器	筒形碗	口縁～体部破			4.6	灰白			染付	内面(二重圏線 外面(雪輪)文	わすれな草 うす群青		轆轤		1780～1810、肥前
6	縦2-1層	磁器	皿	底部1/4		6.0	1.5	灰白		ﾐｽﾄｸﾘｰﾝ	貫入				轆轤 削り出し高台 高台		17世紀中頃～末、肥前
7	縦2-1層	磁器	皿	底部残存		5.2	2.15	灰白	青磁	ﾐｽﾄｸﾘｰﾝ	内面見込み印花 外面六弁菊花	内面見込み:草花)文 外面:鎬蓮弁)文			轆轤 削り出し高台 高台畳付釉掻きとり		19世紀後半～14世紀、龍泉窯系 高台内に釉砂粒付着
8	縦1-1層	磁器	皿	口縁部破片			2.5	灰黄	青磁	油色	貫入				轆轤		18世紀前半、肥前
9	縦1-1層	陶器	鉢	口縁部破片			3.1	灰白 にぶい橙		クリーム色	化粧土 鎬釉	内面(草花)文 外面文字	アイビイグレイ 藍色		轆轤	回転ナデ 型打ち	19世紀前半、肥前系
10	縦1-1層	陶器	土瓶	口縁部破片			2.15	にぶい橙	土灰釉?	焦茶 オリーブドラブ オイスター					轆轤 口縁部釉掻きとり		18世紀後半～19世紀、在地

14tレンチ出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は残存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	砲1-1層	土師器	坏	1/6	(8.8)	(6.0)	2.4	良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内)回転ナデ 外)回転ナデ	
2	砲1-1層	須恵器	甕	破片				良	～0.5mの砂粒	灰/灰	内)ナデ 外)ナデ	東播系 13世紀

14tレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は残存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
1	砲3-1層	陶器	袋物	胴部破片			4.8	淡黄	褐釉	黒茶/ブロンズ 金茶					輪積		13世紀～14世紀、古瀬戸
2	砲1-1層	磁器	椀	口縁部破片			3.2	灰白	白磁	ﾘﾘｰ/ホワイト	粗い貫入				輪積		18世紀中葉～末、肥前系
3	砲1-1層	磁器	椀	口縁～体部	10.4		3.4	灰白			染付	外面(葡萄)文	藍色		輪積		18世紀末～19世紀前半、肥前系
4	砲1-1層	磁器	皿	口縁部破片			2.8	灰白	白磁	藍白	口銹 菊花 粗い貫入				輪積	回転ナデ 型打ち	18世紀末～幕末、肥前系
5	砲1-1層	磁器	皿	口縁部破片			1.7	灰白			染付	内面(草)文	浅はなだ		輪積		18世紀後半～19世紀初頭、肥前系
6	砲1-1層	陶器	擂鉢	口縁部破片			4.6	にぶい橙	鉄釉	トーブ					輪積		内外面施釉 口縁部外反 18世紀 肥前

15tレンチ出土遺物観察表（土器類）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は残存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	砲1-1層	瓦質土器	火鉢	破片				良	～0.5mの砂粒	灰/灰	内)ナデ 外)ナデ・菊花文	
2	砲2層	瓦質土器	茶釜	破片				良	～0.5mの砂粒	暗灰黄/黄灰	内)回転ナデ 外)回転ナデ	
3	砲2層	土製品	土錘	完存	長4.0	幅1.25	厚1.2	良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙	ナデ	
4	砲5層	土製品	土錘	完存	長5.1	幅1.25	厚1.25	良	～0.5mの砂粒	橙	ナデ	

15tレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は残存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
5	砲1-1層	磁器	椀	口縁部破片			1.5	灰白			染付	内面(雷)文 外面(梅)文	藍色		輪積		口縁部外反 1820～1860年、肥前系
6	砲1-1層	磁器	椀	底部破片			1.9	にぶい黄橙	わら灰釉	シルバーグレイ	貫入				輪積		1590年代 内面付着物
7	砲1-1層	磁器	椀	底部1/2		3.8	2.2	灰白	白磁	藍白					輪積 削り出し高台		18世紀前半、肥前
8	砲10層	磁器	椀	口縁部破片			2.9	白 緻密			色絵	外面(網目)文	不明/摩耗ﾘ		輪積		18世紀終わり～19世紀 瀬戸美濃
9	砲1-1層	陶器	無形椀	底部1/3			2.7	浅黄			染付 貫入	内外面文様	納戸色		輪積		18世紀末～19世紀初
10	砲1-1層	磁器	小杯	口縁～体部1/3	6.4		2.4	灰白	白磁	藍白					輪積		18世紀末～幕末、肥前系
11	砲1-1層	陶器	皿	口縁部破片			1.0	灰白	青磁?	ｵﾘｰﾌﾞﾄﾞﾗﾌﾞ	貫入				輪積		口縁部外反 17～18世紀 在地
12	砲2層	磁器	皿	底部1/4		5.4	1.15	灰白			染付	内面文様	鉄紺		輪積 削り出し高台 高台		16世紀末～17世紀初頭、唐津窯系
13	砲1-1層	磁器	皿	口縁部破片			1.75	灰白			染付 貫入	内面文様	浅はなだ		輪積		17世紀後半～18世紀前半 肥前か
14	砲1-1層	陶器	壺	胴部破			6.3	橙	鉄釉	ローズストーン	縞状攻帯					外面 ﾀﾀﾒ積ナデ	17世紀、肥前

18tレンチ出土遺物観察表（土器類）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は残存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	砲10層	縄文土器	鉢	破片				良	～4.5mのハ石	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内)ナデ 外)押し型文	
2	砲2層	土製品	土鈴					良	微粒砂	浅黄/浅黄	内)ンポリ 外)ナデ・ンポリ・穿孔	

18トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は推存高	胎土	釉薬	釉色調（内/外）	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
3	砲8層	磁器	碗	底部破片		3.8	2.15	灰白			染付	外面(雪輪草花)文?圏線	藍色	「大明年製」の銘れ	轆轤 削り出し高台 高台貼付 釉掛きとり		18世紀後半～19世紀初め頃、肥前系
4	砲1層	陶器	碗	口縁部破片			2.35	淡黄	透明釉	透明	貫入				轆轤		17世紀中頃～18世紀、肥前
5	砲5層	陶器	皿	口縁部破片			0.8	淡黄	透明釉	やや黄色味帯びた透明	貫入				轆轤		17世紀後半 口縁部外反 関西系
6	砲3層	陶器	皿	口縁部破片			1.2	灰白	内面銅錆釉 外面透明釉	内面さびあさぎ 外面	貫入				轆轤		17世紀末～18世紀前半、肥前内野山窯?
7	砲3層	陶器	皿	破片			1.25	淡黄	透明釉	透明	貫入				轆轤		17世紀後半～18世紀前半、肥前
8	砲2層	陶器	皿?	底部1/3		3.3	1.35	灰白		透明	貫入				轆轤 削り出し高台		18世紀、関西産系
9	砲2層	陶器	皿	破片			1.6	淡黄		オリーブ1/2	貫入				轆轤		17世紀前半、肥前
10	砲4層	磁器	皿	口縁部破片			1.75	灰白			染付	内面文様	スレートグリーン		轆轤		17世紀後半か、肥前系?
11	砲4層	磁器	徳利	頸～胴部破			2.5	灰白			染付	外面文様			轆轤		17世紀後半、肥前

19トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は推存高	胎土	釉薬	釉色調（内/外）	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
1	1層	磁器	碗	胴部破			2.6	灰白	3		染付	外面(矢羽)文	藍色		轆轤		18世紀後半～19世紀初め、肥前

20トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は推存高	胎土	釉薬	釉色調（内/外）	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
1	表土	磁器	碗	1/7		5.0	3.2	灰白			染付	見込み2重圏線 外面(丸)文 高台外面2重圏線	藍色		轆轤 削り出し高台 内面釉掻き取り後7ヵ所ナデ底色が?		18世紀後半、肥前系波佐見
2	表土	磁器	碗	1/5	9.3		4.4	灰白			染付	外面(雪輪草花)文	スレートグリーン土ボニーブ		轆轤		18世紀後半、肥前系波佐見

21トレンチ出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は推存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	2層（旧耕作）	土師器	小皿	1/6	(7.4)	(5.8)	1.3	良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
2	砲1層	土師器	坏	1/6	(10.5)	(7.0)	2.85	良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙/にぶい橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
3	砲1層	土師器	坏	1/6	(8.0)	(6.0)	2.0	良	～0.5mの砂粒	明黄橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	

21トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は推存高	胎土	釉薬	釉色調（内/外）	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
4	10層	磁器	皿	口縁～体部			2.4	灰白	白磁	オイスター					轆轤		13世紀～14世紀

24トレンチ出土遺物観察表（銭貨）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は推存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
	旧耕作層	銭	完存	長2.2	幅2.2	厚0.15						明治二十年 半銭

25トレンチ出土遺物観察表（土器類）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高 又は推存高	焼成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	28層	土師器	小皿	1/6	(6.9)	(5.0)	(2.15)	良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
2	28層	土師器	小皿	1/4	(7.6)	(6.1)	1.4	良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
3	28層	土師器	皿	1/6	(8.7)	(6.8)	1.8	良	～0.5mの砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内:回転ナデ/静止ナデ 外:回転ナ	
4	1層	土師器	坏	1/4		(8.6)		良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
5	1層	土師器	坏	1/5		(6.7)		良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内:ヨ 外:回転ナデヨ	
6	1層	土師器	坏	1/4		(7.3)		良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
7	1層	土師器	坏	1/6		(7.4)		良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
8	28層	土師器	坏	1/4	(12)			良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
9	21層	須恵器	鐘鉢	破片				良	～0.5mの砂粒	淡黄/灰黄	内:オロシ目 外:体部 ナデ/底部	
10	28層	鉄器	刀子		長7.0	幅1.5	厚0.4					

26トレンチ出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高又は残存高	構成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	13層	土師器	小皿	1/6	(6.1)	(5.0)	1.05	良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内)回転ナデ 外)回転ナデ	
2	3層下層	土師器	小皿	1/5	(7.8)	(6.8)	1.25	良	～0.5mの砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内)回転ナデ 外)回転ナデ	
3	13層	土師器	皿	1/6	(7.7)	(7.0)	1.7	良	～0.5mの砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内)回転ナデ 外)回転ナデ	
4	13層	土師器	坏	1/6		(8.6)		良	～0.5mの砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内)回転ナデ 外)回転ナデ	
5	13層	土師器	坏	1/8	(10.8)			良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内)回転ナデ 外)回転ナデ	

26トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高又は残存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
6	5層	磁器	皿	口縁部～体部			3.1	灰白			染付				轆轤		16世紀、景德鎮窯系

27トレンチ出土遺物観察表（土器類）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高又は残存高	構成	胎土	色調(内/外)	文様/調整技法	備考
1	17層	土師器	小皿	1/6	(5.0)	(3.2)	1.15	良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内)回転ナデ 外)回転ナデ	
2	6層	土師器	小皿	1/4	(5.9)	(4.5)	1.65	良	～0.5mの砂粒	橙/橙	内)回転ナデ 外)回転ナデ	
3	6層	土師器	小皿	1/6		(4.6)		良	～0.5mの砂粒	にぶい橙/にぶい橙	内)回転ナデ 外)回転ナデ	
4	19層	土師器	鍋	完存				良	～0.5mの砂粒	橙	ナデ	
5	19層	土製品	土錘	完存	長4.7	幅1.6	厚7.6	良	～0.5mの砂粒	にぶい黄橙	ナデ	
6	6層	土製品	土錘	完存	長4.45	幅2.15	厚2.1	良	～0.5mの砂粒	橙	ナデ	

27トレンチ出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高又は残存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
7	2層	磁器	椀	底部残		5.8	2.4	灰白	青磁	モスグリー		内面見込み:草花:文			轆轤削り出し高台		14世紀後半、龍泉窯系
8	6層	磁器	椀	底部破		(7.8)	1.1	灰白			染付				轆轤		16世紀後半、景德鎮窯系
9	2層	磁器	皿	底部破片			1.3	灰白			染付				轆轤		15世紀後半～16世紀頃、中国か
10	6層	磁器	大皿又は壺	口縁部破片			1.9	灰白	青磁	油色					轆轤		14世紀、龍泉窯系
11	19層	磁器	袋物	胴部下位			4.1	灰白	青磁	オリーブグリーン		外面:鎬蓮弁:文			轆轤		14世紀後半、龍泉窯系

表面採集遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高又は残存高	胎土	釉薬	釉色調(内/外)	装飾	文様	文様色	刻印・銘	成形技法・特徴	調整技法	器形の特徴 備考
1	表採	陶器	皿?	1/5	10.2		1.9	灰黄		ねずみ色					轆轤		16世紀、李朝

※ 色調は、日本色研事業株式会社発行「標準色カード230」によった。

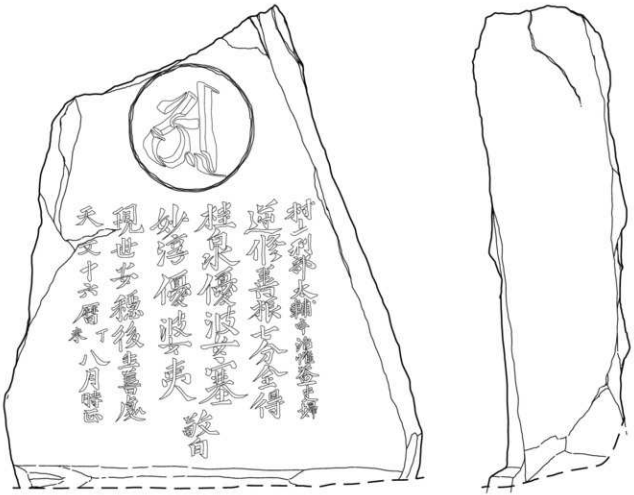
第５節　その他関連調査

町文化財「下豊内の逆修碑」調査の成果

町指定文化財「下豊内の逆修碑」は、陣ノ内館跡の南側斜面麓に建立される。本資料に銘文として残る村山刑部大輔宇治惟益は阿蘇氏の有力一族であり、豊内地域が戦国時代中期、16 世紀において阿蘇氏勢力の拠点が豊内地域に置かれたことを示し、遺跡の存在と大きく関連するものと考えられる。このため、ここにその記録を記す。

隣り合う対の逆修碑は、斜面麓に西方向を正面に立地する。板碑の基礎部分は地中に埋没し正確な形状を測ることはできないが、現況（第４章　写真４－１参照）では逆修の碑１（正面に向かって右）は、高さ 1.27m・最大幅 1.09m、逆修の碑２（正面に向かって左）は、高さ 1.0 m・最大幅 0.97m を測る。共に板状の自然石表面を鑿の工具で上方には○に梵字、下方には逆修碑１は６行、２は文字列を方形に囲み５行にわたり銘文を刻む。

図3－62
逆修の碑1実測図 （S＝1/10）



逆修の碑2実測図 （S＝1/10）

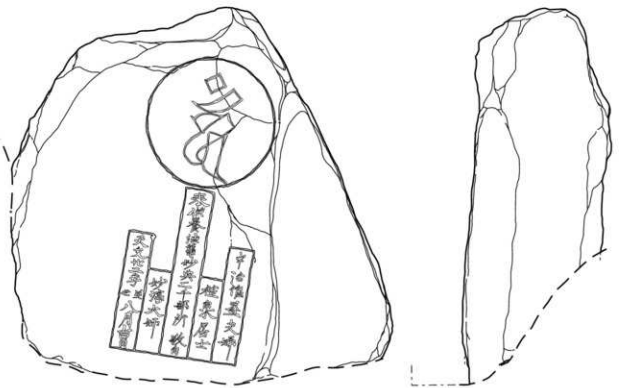
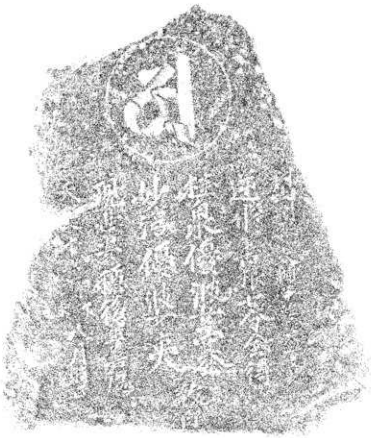
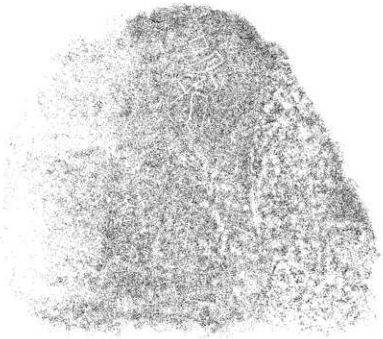


図3－63
逆修の碑1拓本



逆修の碑2拓本



1　銘文用語解説

銘文によると、村山惟益は天文十六年（1547）八月に夫婦で逆修供養を行い（逆修碑１）、さらに同二十二年（1553）にも、やはり夫婦で法華経二千部の誦読を行なっている（逆修碑２）。

「逆修」

生前に、あらかじめ自分の墓や位牌を建立し、自分のために仏事を修して死後の冥福を祈ること。

「七分全得」

生前に自分の死後の為の供養（逆修）を積んでおくと、死後におけるすべての功徳は自分が得られる。死後の追善は、死者が益を受けること極めて少なく、福を七分して、死者が一分を得られ、六分は供養したひとが受ける。そのため、逆修の功徳は全得であるということ。

「優婆塞（うばそく）」

仏教徒のなかで、在家（仏教において出家せずに世俗の生活を営みながら仏道に帰依する者のこと）の男性信者のこと。逆修碑１には「桂泉優婆塞」と刻まれており、「桂泉」が村山惟益の法名であることが分かる。

「優婆夷（うばい）」

仏教徒のなかで、在家（仏教において出家せずに世俗の生活を営みながら仏道に帰依する者のこと）の女性信者のこと。逆修碑１には「妙淳優婆夷」と刻まれており、「妙淳」が村山惟益の夫人の法名であることが分かる。

「現世安穏後生善処」

「法華経」の語。仏の教えによって、この世では安穏に生きることができ、死後も善い世界に生まれることができるということ。

「法華妙典二千部所」

村山惟益夫婦が、「法華妙典」すなわち法華経の経典を二千部読誦したことを記念して建立したとみられる。「二千部」とあることから、夫婦で千部ずつ読誦したものと考えられる。また「奉供養」とあることから、先祖や縁者の菩提を弔うために千部経を読誦したのであろうか。彼らのために法華経を読み供養すれば、功徳の多くは供養する者へ報われるといわれる逆修のために、このような行為を行ったと推測される。

梵字について

向かって右に建つ天文十六年（1547）建立の逆修碑１には「ア」の字を刻み、これは胎蔵界大日如来を指す。向かって左に建つ天文二十二年（1553）建立の逆修碑２には「バン」の字を刻み、これは金剛界大日如来を指す。

仏の悟りの世界を表し、仏や菩薩が幾何学的に集まって描かれた曼荼羅では、本尊から向かって右側に胎蔵界を、左側に金剛界を置いており、この逆修碑もそれに倣ったとみられる。

2　村山（宇治）惟益について

当初は男成嶽を祀る男成大明神の祀官で、15 世紀頃に阿蘇氏の部将として活躍した男成氏に関する「男成文書」（『熊本県史料　中世篇　第3』、1963 年に所載）に、次の史料がある。

阿蘇家奉行連署奉書（折紙）

小野尻村検断之事、去年以来六借敷候之條、當給人竹崎孫次郎方江遂意見候之間、納得候、可然候、後日之事者、可任惣成敗之計由候、

「尤簡要候、以此上郷内催促事、堅固之儀専一候、恐々謹言、

（永禄十一年ヵ）

十月四日

惟玄（花押）
惟益（花押）
惟岑（花押）
惟住（花押）

男成殿

御宿所

（端奥書）

「

小陣治部大輔
高森式部少輔
村山刑部大輔
丹田水左衛門大夫」

これは永禄 11 年（1568）発給と推測される阿蘇家奉行連署奉書であるが、そのなかに「惟益」の名がみられる。本史料の端奥書の二人目には「村山刑部大輔」と記されている。端奥書は加判人の順とは逆になることから、「村山刑部大輔」に対応する人物が「惟益」であることがわかる。また年代は前後するが、「男成文書」には、包紙上書に「阿蘇御家老衆御紙面」とある文明 9 年（1477）九月二十三日付の村山惟茂添状、元亀 2 年（1571）九月十日付村山惟貞書状、同日付村山惟貞書状案がある。これらの人物は、村山惟益の祖先や親族、あるいはその子孫であったと推測される。

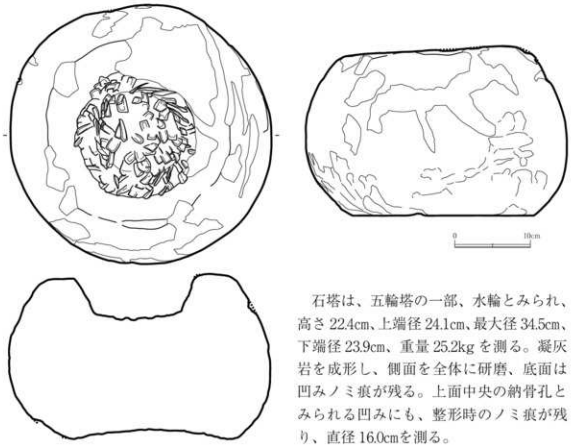
これらのことから、村山氏は少なくとも 15 世紀後半から阿蘇氏の家臣として仕え、惟益は奉行として差配を行っていたと考えられる。

【安養寺関連遺物】

陣ノ内館跡と南谷川をはさみ、南東に位置する上豊内集落は、陣ノ内館跡の麓に位置する下豊内集落と合わせ本来一つの豊内集落として発展していた。ここには「あんにょじ」という地名が残り、これは中世寺院である「安養寺（あんようじ）」の名残である。第４章の稲葉氏の付論で詳しく述べられることになるが、この安養寺は豊内地域の中世段階での発展を示し、「安養寺」の存在は遺跡の形成・存続と深く関わる。

この安養寺は、現在はなく遺構も確認されないが、昭和初期に行われた森林軌道工事の際に撮影された工事写真には壊された大量の五輪塔群が写されている。（第４章参照）この五輪塔群の行方は聞き取り調査では明らかにできなかったが、周辺地形を含め詳細に踏査したところ五輪塔の一部を表採することが出来た。寺院跡の遺構に直接伴うものではないが、表採状況や前川清一氏による中世期の五輪塔である可能性が高いとの指摘から、安養寺関連遺物として判断、記録する。

図３－64　安養寺関連遺物　水輪実測図



石塔は、五輪塔の一部、水輪とみられ、高さ 22.4cm、上端径 24.1cm、最大径 34.5cm、下端径 23.9cm、重量 25.2kg を測る。凝灰岩を成形し、側面を全体に研磨、底面は凹みノミ痕が残る。上面中央の納骨孔とみられる凹みにも、整形時のノミ痕が残り、直径 16.0cmを測る。

【登城道調査の記録】

陣ノ内館跡の聞き取り調査及び地形図・字図の判読から、台地上の登るための2ルートを推定できる。このうち南側斜面のルートは、麓集落の登城道入口（起点）から陣ノ内館跡虎口（終点）までほぼ確定することが出来た。（第4章参照）本項では、その南側斜面を登るルートを陣ノ内館跡の登城道として記録・報告する。

台地上に登る南側斜面の現道は、昭和40年代に斜面を削りコンクリート舗装されたもので、それ以前の徒歩で登った登城道を一部踏襲しているものの、基本的には異なるルートをとる。今回登城道としたのは、この徒歩で登り上がる道で、地域での聞き取りでは、昭和40年代以前から農作業時に使っていたことが分かっており、陣ノ内館跡が存続した時期に使われていた登城道を踏襲した可能性が高い。

1　登城口は、陣ノ内館跡南西斜面下に位置する。現在コンクリートで舗装された道は幅4.5mを測り、左に小さく曲がりながら、北東方向に47.0 m直進する。

2　現道は大きく左に曲がるが、登城道は直進し、幅0.8m程度の舗装されない小道を右に小さく曲がり、現道と合流する。

3　登城道は、現道から左にそれ斜面を登る。幅0.6m程度で、右側には土留めのための簡易な石積みが作られる。斜面を左に見ながら、南東に直進し45.0m付近で、道幅2.5mをとり、大きく左に180°転回し、北西に直進する。

4　道幅1.0m程度で比較的勾配緩やかな道を、45 m程度登った後、東方向に大きく右に曲がる。

5　東方向に進む道を北方向に90°左折する。

6　若干右にふれながら、幅0.6 mの急勾配の斜面を北進し、40 m付近で東へ右折する。

7　15 m付近で左に曲がり、幅0.8 mの急斜面の道を登る。

8　斜面上を右に曲がり、途中「折れ」を左にみながら東へ140 m直進する

9　虎口に到達する。

図3－61 地形図及び字図合成図（登城道）（黒は地形図・赤は字図）

【聞き取り調査の成果】

発掘調査では確認できない地域に残る歴史を復元し発掘調査成果と併せて検討することを目的に、土地のいわれや旧地名等の聞き取り調査を実施した。調査は、地元在住の清村守・甲斐園子・村上敏幸・清村一男・村上邦生の５氏に協力頂いた。聞き取り結果を陣ノ内館跡周辺の地形図におとしたのが図3-60となり、以下を判読できる。

(1) 肥後の最古の地誌「国郡一統志」にある「安養寺」は「あんにょじ」、法念寺は「ふねじ」として上豊内地域の地名に残る。陣ノ内館跡南東側斜面中腹の「寺尾」では五輪塔群が出土したとのことから、ここにも寺院が存在したと推測できる。

(2) 南西斜面下には、「こうや（紺屋）」・「いせや（伊勢屋）」など屋号をもつ家（双方とも現在は農家）があり、町場的な性格をもつ地域であった。

(3) 西側崖下は「しもんきど（下の木戸）」・「しもんやしき（下の屋敷）」とあり、緑川を中心に下流側という意味で「下」を用い、入口・屋敷があったことを示唆。字図上では堀まで登り上がる城道が存在するが、崩落のため現在は使われない。

(4) 現在残る南から登る城道は「みせんさか」と呼び、現在も農作業時に使われる。

(5) 現況に残る土塁は「あげつち（上げ土）」と呼び、土塁の盛り土成形を示唆。発掘調査成果と合致。

(6) 平坦部の南東は「きどまる（木戸丸）」と呼び、入口を示唆。発掘調査成果と合致。

(7) 北東の周囲２個所を「みはりだい（見張り台）」と呼び、北東の守りを固めたことを示唆。

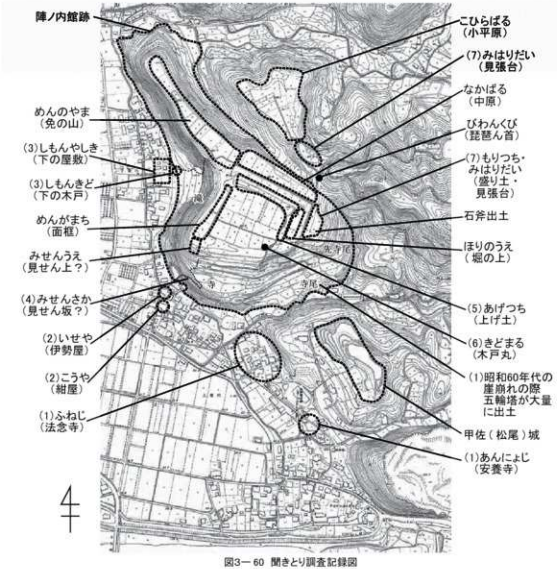


図3－60 聞きとり調査記録図

第４章　付論

第１節　文献史料からみた陣ノ内館

稲葉継陽（熊本大学文学部教授）

１　14 世紀の文献史料

建武３年（1336）、筑前多々良浜の合戦において大宮司惟直と弟惟成を失った阿蘇氏は、大宮司の跡目相続をめぐって一族が分裂し、それが 14 世紀肥後の動乱継続の大きな要因となる。惟直・惟成亡き後に甲佐地域及び益城郡に支配権を行使したのが、前大宮司の娘婿である恵良（阿蘇）惟澄であり、甲佐地域及び益城郡を根拠としながら、終始一貫して宮方として活動し続けた。

惟澄は、14 世紀の内乱に身を投じていった九州の武将のなかでは、その行動を最も詳細に知ることができる人物のうちの一人である。それは、惟澄自身が正平３年（1348）９月に征西府に提出した長文の軍忠状（阿蘇家文書『大日本古文書 阿蘇文書之一』122 号）の存在による。軍忠状とは、武士が上級権力からの軍事動員に応じて合戦に参加した後に、恩賞を申請するために、その合戦であげた軍功を具体的に記して軍事統率者（動員主体）に上申した文書である。惟澄は、元弘３年（1333）の討幕以来 15 年間に 35 回にも及んだ合戦の功を書き連ねて、征西府に提出した。その中に、以下のような記述がみられる。

【史料①】恵良惟澄軍忠状（阿蘇家文書）

次筑後国豊福原（上妻郡）合戦令先懸、被切乗馬畢、其後当国御方菊池・八代之外者、大略以令零落之刻、惟澄纔率五十余人、延元二年二月廿二日馳上甲佐嶽、相催一族以下、攻随碕用（益城郡）・小北・甲佐・堅志田、

内乱初期の惟澄の活躍は目覚ましいものであったが、ほどなく肥後の宮方勢力は菊池氏と八代の名和氏以外は殆どが零落してしまったという。史料①は、こうした絶体絶命の窮地の中で惟澄がとった行動を伝えている。

延元２年（1337）２月、孤立無援となった惟澄は 50 人余りの従者とともに甲佐嶽にあがり、そこを根拠にして砥用・小北・甲佐・堅志田といった甲佐社領を防衛するため、侵入してくる武家方の勢力を攻めたという。甲佐社領こそが、肥後における南朝方の主柱として活躍した恵良惟澄主従が命を賭して守るべき本領であり、甲佐嶽は惟澄の詰の城として機能していたことがはっきりと述べられている。

次の記述には、「甲佐城」という表現がみられる。

【史料②】同前

延元三季十月頼尚率数千騎、攻来甲佐城之時、惟澄僅以卅余騎懸出城外、或討死、或被疵畢、

翌延元３年、武家方の反撃が開始された。史料②によれば、少弐頼尚が率いる武家方数千騎は、惟澄の城を攻めた。注目すべきことに、惟澄はみずからの城を「甲佐城」と表現している。武家方の大軍に対して、惟澄はわずか 30 騎余りで城外に打って出て、

討死・手負いを出しながらも本領を守ったという。「甲佐城」はまさに惟澄の本城であった。

惟澄の甲佐城に比定されるのが、上豊内にある「松尾城跡」と下豊内の「陣ノ内館跡」である。両方とも詰城である甲佐嶽の麓にあたり、また緑川乱流域を天然の防御ラインとして有し、甲佐社にも至近の豊内の地は、甲佐社領を死守しようとする惟澄の本拠地たるにふさわしい。

この軍忠状を通覧すると、惟澄が、阿蘇郡・益城郡一帯の甲佐社領を含む阿蘇本末社領を維持することに専念し、肥後国中部地域の各所において合戦と城攻めを継続したことが分かる。内乱の初期すなわち倒幕期を除いて、正平３年までの間、惟澄はただの一度も九州を出たことはなく、そればかりか、肥後国の外で合戦をすることさえ稀であり、その軍事力は、甲佐社領及びその他の阿蘇本末社領の維持・回復にこそ注がれていた。

そうした惟澄の本拠地となったのが、「甲佐城」であった。

２　16 世紀の史料

14 世紀に「甲佐城」を本拠に甲佐社領・益城郡一帯で活動した惠良（阿蘇）惟澄以来、甲佐は阿蘇大宮司勢力の一大拠点となり、16 世紀には戦国大名化した阿蘇氏の益城郡支配の拠点として、緑川対岸の堅志田城とともに戦略拠点化していった。

次に示す【史料③】は、下豊内に存在する戦国期の板碑二基の銘文で、天文 16 年（1547）及び同 22 年（1553）に相次いで造立されたものである。

写真４－１　下豊内の逆修碑

【史料③】

(a)村山刑部大輔宇治惟益夫婦
逆修善根七分全得
桂泉優婆塞
敬白
妙淳優婆夷
現世安穏後生善処
天文十六暦丁亥八月時正

(b)　宇治惟益夫婦
桂泉居士
奉供養法華妙典二千部所敬白
妙淳大姉
天文廿二年癸丑八月吉日

これらの銘文によれば、戦国中期の甲佐下豊内の地には村山刑部大輔宇治惟益という武士が存在していた。名前からみて阿蘇氏の有力一族と判断される。しかも彼はまず(a)天文16年8月に「夫婦」で逆修供養を行い、その6年後の(b)天文22年には、やはり夫婦で法華経二千部の誦読を成し遂げたのであった。

これは、村山惟益の本拠地が継続して甲佐に置かれていたことを示している。その場所は上豊内の「松尾城跡」や、下豊内の「陣ノ内館跡」と関連するとみられる。

その後、甲佐豊内地域は阿蘇氏勢力の拠点であり続けたが、よく知られるように天正13年（1585）、島津氏の侵攻にあって、甲佐も堅志田城とともにその手中に落ちた。次の史料は島津氏の家老の一人であった上井覚兼が甲佐と堅志田を攻略した場面について書きとめたものである。

【史料④】『上井覚兼日記』天正13年閏8月13日条

新武同(新納忠元)心にて堅志田麓ニ指懸、承候ヘハ、甲佐之囲破却候て、敵数百人被打取由到来候、先宮崎衆分捕被申候て、頸被持来候衆、鎌田源左衛門尉・梶原周防介・金丸主馬允・吉田外記、拙者悴者加治木雅楽助、二人討候而来候、一定甲佐囲被仕払之由也、　御旗本より忠長・忠棟、我々罷居処へ御座候、忠棟事者、甲佐拵へ被通候て御番候する由候、新武・拙者申事にハ、尤左こそ可有候すれ共、只今彼方見候て来者共申候ハ、悉被焼払候間、御挌護一夜も可難成候、

この記述から読み取れるのは、第一に、甲佐には島津氏に落された「甲佐之囲（拵）」という城郭が存在していたことである。「かこい」とは、周囲を堀や土塁で囲われた城館中枢部を指す中世の用語であった。

第二に、甲佐之囲は緑川対岸の堅志田城とともに島津軍によって攻撃・破却され、数百人の軍兵が討ち取られ、城館は徹底的に焼き払われたのであった。

このように「甲佐之囲」は阿蘇氏の拠点として、それなりの規模を有し、堅志田城の緑川対岸あたりに存在したものと推測される。「陣ノ内館跡」や「松尾城跡」がそれに関連する遺跡であることは確実である。

なお『上井覚兼日記』天正14年8月23日条によれば、「甲佐本地頭伊豆野方」と呼ばれる人物の存在が知られる。この人物が「甲佐之囲」落城時の城主であったとみて良いであろう。

3　17世紀の豊内地区に関する文献史料

さて、一次史料上の「甲佐之囲」の所見は上記の一点のみであるが、注目すべきは、1630年代の豊内（どいのうち）地区に関する一次史料が複数存在することである。

寛永10年（1633）、幕府は大名が替った直後の肥後の状況を把握するために巡検使を派遣した。現在、永青文庫「細川家文書」に伝来した肥後慶長国絵図写は、細川家が加藤家から引きついだものであるが、そこには、この時の巡検使＝上使衆が宿泊した場所に付箋が貼られている。それを見ると、宿泊地は北から山鹿、高瀬、内牧、高森、大津、豊内、小川、宇土、八代、日奈久、田浦、佐敷、水俣、大野（日向境）の14カ所であったことが判明する。

いずれも各地域における中世以来の町場である。17世紀前期には豊内もまた、そうした町場の一つに数えられ、加藤家改易・細川家転封直後に幕府から派遣された使節の宿泊地に選定されたのであった。

上使衆はこの年の9月に熊本藩領内に入った。以下に示す細川三斎・忠利の往復書簡5通は、これに先立つ6月に、熊本にいた忠利と八代にいた三斎が、上使衆への対応を打ち合わせるために交わしたものである。

【史料⑤】細川忠利書状写（『三斎様江御書案文』永青文庫4.2.104）

以飛脚申上候、

（中略）

一、上使衆へ国之絵図を持せ使者を遣候ヘハ、存之外下々草臥申候間、五里之上者成かね候条、泊を近書付、国之絵図を持せ可越由被申越候間、数々泊を書遣申候、上使ゟ御申越候ハ、阿蘇ゟ山つきへ被廻、益城之内矢部之古城を見可申由被申越候間、左候ヘハ　三斎様御蔵納之内土井之内と申所ニ一宿、此所ニハ肥後茶屋も御座候由申候、扨小川ニ被泊候故、土井之内と小川との間、是も御蔵納之内下郷と申所ニ昼之休被仕候筈ニ御座候、

一、昼之休ハ家なき所ハ茶屋を申付候、下郷ハ家御座候由候間、茶屋ニハ及申間敷候事、

（中略）

一、何と被存候哉、誘候家へもはいられて、又昼之休無家所ハ茶屋を立候ヘハ、それへ被参候間、其心得候へと被申越候間、国中ニ泊之誘又昼之休悉申付候、大方当国を三十四五日被廻候、只今茶屋又ハ泊又念入申付儀候事、

（中略）

六月七日

魚住伝左衛門尉殿

史料⑤で忠利は、三斎側近の魚住に対して、上使衆との打ち合わせ内容を次のように伝えている。

まだ肥後に入る以前の上使衆のところへ国絵図を持たせた使者を派遣して打ち合わせたところ、一日に5里以内の行程で巡検するという意向で、それに沿って宿泊地を選定して国絵図とともに持参するよう指示された。指示に従って打ち合わせたところ、上使衆は、阿蘇から緑川最上流の矢部に移動して、「矢部之古城」を検視する予定である。矢部から八代海沿岸の小川へと移動する途中で、三斎の蔵入地にある益城郡「土井之内」に一泊する必要がある。

こうした上使衆の意向を受けて、忠利は三斎に次のように提案している。土井之内には「肥後茶屋」があり、宿泊地に適しているのではないか。翌日宿泊の小川までの移動途中にあたる三斎蔵入地益城郡下郷で昼休みを取らせるのはどうか。

また忠利は、これから国中の宿泊地及び昼休み地を調える必要があり、上使衆の行程は35日間に及ぶと伝えている。

史料⑤の忠利書状に対する返書となる史料⑥は、豊内にあった「肥後茶屋」の実態を伝える、重要史料である。

【史料⑥】細川三斎書状（永青文庫13印38番）

已上

態令申候、

（中略）

一、我々知行土居之内ニ一泊可被仕と被申ニ付、所を見せニ遣候へハ、奉行衆之被居候間、九町在之由候、是ハ遠ク候ハんと存候、又下々之居候所一切無之候条、是ニ被居ニ弥成候者、馬乗共之居候所、同馬屋なと新敷可申付と存候へ共、小屋かけ場も二町三町之内ニハ無之と申候事、

一、但、土居之内ゟ一里餘間御入候所ニ、みふねと申町在之由候、左様之所ニ一宿被申付間敷候哉、（中略）

一、土居之内ニハ古肥後茶屋在之候間、幸之儀と存候処、おちあはれ、其上川狩之時迄之茶屋にて候故、いかにもちいさく、ひかつて成由候、庄屋家ゟも繕も手間入可申由申候、但、我々不見事候間、猶々見せニ可被遣事、

一、か様ニハ申候へ共、奉行衆之間遠く候ても、又下々之居候所なく候ても不苦とのわけニ候者、土居之内ニ成共可申付候哉事、

已上

六月廿二日　　三斎（花押）

越中殿

進之候

三斎は豊内（「土居之内」）の茶屋を「古肥後茶屋」と表現している。「古肥後」は前の肥後守、すなわち改易された加藤肥後守忠広の先代・加藤肥後守清正を指す。しかもそれは、「川狩」すなわち川猟専用の茶屋であるという。

この書状中で三斎は、豊内の在所が手狭であるという理由でもって上使衆の宿泊を渋り、同じ益城郡内御船町への宿泊を提案している。三斎が豊内への宿泊を渋った理由は、自身の蔵入地であることから、上使衆の従者が宿泊する「小屋」の建築や、例の茶屋の修繕が自分の負担となる点にあったとみられるが、史料⑨にあるように、「馬

乗共三十二三人」を擁する上使衆がまとまって宿泊するには狭い在所であったことは確かであろう。

次の史料⑦⑧は、上使衆との直接交渉を進める忠利から、三斎への続報である。

【史料⑦】細川忠利書状写（『三斎様江御書案文』永青文庫 4.2.104）

（前略）

次上使衆へ遣候者罷帰候、八代ニハ泊申間敷候、ひなごニ可泊由申来候、御蔵納之内下郷の昼之休ハ入不申候、

泊　どひの内

　　此間ひるのやすみなし

泊　宇土

　　此間ひる□□休小川

泊　宮ノ原

　　此間ひるの休大福寺

泊　ひなこ

如此可被参由申来候、若又麦の嶋、又八代の山付之もとの古城見可申と被申儀御座候ハん間、其御心得ハ被成候て尤奉存候、大形八月之末ハ当国へ可被参かと申事にて御座候、此等之趣可有披露候、恐々謹言

六月廿三日

魚住伝左衛門殿

【史料⑧】細川忠利書状写（同前）

今朝之御書午之刻ニ参着仕候へ共、被仰越候候みふね之儀、慥存候もの無御座候而、相尋申候とて御請延引仕候、

一、上使衆古八代又麦の嶋被見可申候哉、尋ニ可遣由被仰越候、左様之所ハ是へ参候而承合見可申と被申越候故、先刻瓜を進上申候もの明朝其元へ参候様ニと申付候、古城両所共ニ被見候様ニ被仰付候而御尤奉存候事、

（中略）

一、興善寺之古城之事ハ、此度ハ可被参とハ不被申越候、といの内・宮の原ニ泊可申候、其分ミかんの木の御座候大福寺ニ昼之休、それ分日奈古ニ泊、佐敷・水俣へ可参と、国の絵図ニ札御付被申越候、其分御馳走之所被仰越候ハヽ、其外何も可申付候事、

（中略）

一、どいの内の泊之事、　上使衆被居候所間九町御座候由、如　御意餘程遠御座候、どいの内の家せまく御座候共、掃除被仰付、一所ニ被居候様ニハ不成儀にて御座候哉、

一、矢部之庄ニ被泊、矢部之古城を被見、それ分ミふねニ被参候へハ、八里ニ少ちかく御座候間、是ハ中々遠候而成不申候、少下々遠候共、どいの内ならてハ矢部の間ニ泊無御座候事、

（中略）

申刻
六月廿二日
魚住伝左衛門殿
不慮状にて候間、明朝御ひるなり候て可上候、

史料⑦では、上使衆の宿泊地が変更となったことが速報され、忠利と上使衆との交渉が具体的に進展していることが示される。注目すべきは、上使衆が八代の麦島・古麓両城、興善寺古城、矢部古城といった、戦国～織豊期城郭の現状調査を巡検の主要な目的としていたことである。

史料⑧の三条目で忠利は、豊内集落の家々が上使衆の宿泊には手狭であったとしても、掃除等をしっかりしてセッティングすれば、まとまった宿泊が可能ではないか、と三斎に迫っている。豊内への宿泊は、上使衆が強く希望するところであったのだろう。さらにそれは、「陣ノ内館跡」の現状調査と関係したプランであったと推測することも可能であろう。

史料⑨は、上使衆宿泊問題の一応の決着を示す三斎書状である。

【史料⑨】細川三斎書状（永青文庫 13 印 39 番）

已上
一、上使衆泊、昼之やすみの儀、最前被申越候とハ相違候、何も只今被申越候通、得其意候事、
一、土居之内宿こしらへの儀、先日も申候ことく三人一所ニ被居候様ニハ中々成間敷由申候、小在所にて候故、新敷立候にも所有間敷由申候、然共、土居之内ニ被泊候ハて不叶儀ニ候者、九町隔候下土居之内ニ、両人之宿可申付候、馬乗共三十二三人在之由候、左様之者居候家、両所ニ十軒程あるへき由申候間、残ル二十二三人之家之分ハ、新敷立候ハてハ不成儀候事、
（中略）
六月廿三日　　三斎（花押）
越中殿
御返事

三斎は忠利に、「土居之内」は「小在所」だが、「馬乗共三十二三人」からなる上使衆がどうしても土居之内に宿泊せねばならないのなら、9町ほど離れた「下土居之内」の家も使えば、馬乗＝上級武士の宿を10軒は確保できる、と述べている。「下土居」とは、現在の下豊内地区のことであろう。すでに17世紀初期に、加藤家の茶屋が置かれた上豊内からその北方、「陣ノ内館跡」の西側にあたる下豊内にまで集落が展開していたこと、そして、集落の中心が上豊内であったことが分かる。

ここで豊内地区の状況を示した図4－1をご覧いただきたい。

図４－１　豊内地区の戦国期遺跡図

写真４－２　上豊内旧老人ホーム付近での石造物発掘状況

現在の豊内地区は、一般的な農業集落としての景観をみせているが、上豊内地区には、「法念寺」「安養寺」といった通称地名が残っており、かつては寺院が立ち並ぶ景観がみられたことが分かるであろう。

さらに注目すべきは写真４－２である。撮影場所は図４－１に示したとおり、「安養寺」に隣接する地点で、撮影時期は大正末年～昭和初期である。ここでは森林鉄道敷設工事に際して、おびただしい数の五輪塔のパーツ等の石造物が発掘されていたのであった。写真で見る限り、これらの石造物は中世に造立されたものと考えてよい。すなわち、この地には「安養寺」の敷地に連続する中世の墓地が形成されており、甲佐を支配した在地領主をはじめとする人々や地域の有力百姓層を檀越とする寺院が立ち並び、宿場の機能を兼ね備えた町場的性格を有していたものと考えられるのである。

こうした上豊内地区の町場的性格は、「陣ノ内館」や「松尾城」との関係で形成されたものと推察される。そして、城自体が廃絶された十七世紀前半の時点においては、細川三斎が言うように衰退して手狭になってはいたものの、町場的性格を残していたのではないか。加藤清正による川狩茶屋の設置、幕府上使衆の宿泊などの事実は、上豊内の戦国城下町としての起源・機能によるものと推察される。

4　近世中期の文献史料

これまで検討してきた1630年代までの史料中には、「陣ノ内」という呼称を見出すことはできない。その初出は、阿蘇家旧臣の子孫で甲佐早川神社神主・渡辺玄察（1632～1714）の著述『拾集昔語』における、以下の記述である（佐藤征子氏の教示による）。

【史料⑩】『拾集昔語』 1

惟種公之御舎兄を惟前公と申候、彼惟前公に先々御親父従惟将公御神主職を被成御譲候、然れ共御乱心に被為成候故に、御舎弟惟種公へ御神主御ゆづらせ被成候而、惟前公へは砥用・中山・甲佐、在々にて過分の御知行被進、甲佐伊津野居城松の尾之上、当分迄も御陣の内と申所の三四町四方も可有之平地一面之所、当分迄も大堀有之候処に被成御殿作、御安座御住館被成候、甲斐宗運取持被申候而、御兄弟之中めて度様に道之道を諫言被申上居候故、矢部・甲佐目出度御両殿へ阿蘇御家人群集致し、無事にめで度相通り申候由に候、

ここで渡辺は、戦国期の阿蘇氏の歴史を次のように叙述している。

阿蘇惟前は、先代の惟将から阿蘇社神主職を譲られたが、乱心したために神主職は弟の惟種に譲られ、惟前は砥用・中山・甲佐、すなわち益城郡の緑川中・上流域にて多くの知行を宛がわれた。その居館は「甲佐伊津野居城松の尾」の上で、現在も「御陣の内」と呼ばれる、3・4町規模の平地で大堀のある場所にあった。矢部の惟種と甲佐の惟前との間は、家臣の甲斐宗運が取持ち、家臣団が形成されて阿蘇氏の全盛期が現出した。

このように、阿蘇氏旧臣という家の由緒を有する渡辺は、『上井覚兼日記』天正14年8月23日条に表れる「甲佐本地頭伊豆野方」の居城を上豊内の「松尾城跡」に比定し、「御陣の内」には戦国期の阿蘇惟前の「御住館」が存在したと解釈したのであった。

渡辺説には阿蘇氏の人名について錯誤があり、正確とは言えないが、これが西暦1700年頃の「陣ノ内館跡」についての地域における共通認識であり、また、文献上での「陣の内」という呼称の初出となる。

史料⑩は、18世紀後期になって形を成し、最終的には明治になって刊行された地誌『肥後国誌』に引用され、通説となるにいたる。

【史料⑪】『肥後国誌』

陣内ノ舘迹　豊内村ノ上ニ陣ノ内ト云城構ノ迹アリ、阿蘇大宮司惟時ノ舘迹ニテ城郭ノ迹ニハアラスト云、

史料⑪は、『肥後国誌』の編者が史料⑩等を勘案して「陣内ノ舘迹」の性格を考察した核心部分である。ここでは、史料⑩を200年遡らせて、14世紀に活躍した阿蘇大宮司惟時の館跡だとしている。

こうして「陣ノ内館跡」は、「阿蘇大宮司の館跡」として地方史上に位置づけられ、現在の地域住民までそうした認識を引き継ぐことになったのであった。

5　まとめ

(1) 甲佐には、14世紀の内乱で甲佐社領を根拠に一貫して南朝方として行動した惠良惟澄の本拠地となった、「甲佐城」と呼ばれる城郭が存在した。

(2) 16世紀には、豊内が阿蘇氏の拠点となっていたことを示す板碑が造立され、また、上豊内には中世寺院と墓域が存在していたことが、地名や石造物の大量出土といった状況から推測される。また、上豊内は16世紀には城下町的発達を示していたと推察され、西暦1600年に、小西行長に替って当該地域を領有した加藤清正が、上豊内

に川狩用の御茶屋を建てたこと、さらに1633年に幕府上使衆が上豊内に宿泊したことは、16世紀の上豊内の町場的性格との関係で理解されるべきであろう。

(3) 1633の上使衆の熊本藩領内巡検の目的の一つは、戦国～織豊期の古城跡の現状を調査することにあった。町としては衰退しはじめ、手狭であった豊内に、巡検使が宿泊を要求した事実は、「陣ノ内館跡」の何らかの調査と関連する可能性がある。

(4) 現在、当該遺跡は地域住民によって「阿蘇大宮司の館跡」だと理解されている。しかし、こうした認識がひろがったのは近世中期以降であり、そこには、14世紀から戦国期までの一定の事実が反映されているものの、16世紀末の小西行長領期にかかる歴史はまったく注目されていない。それは、小西期の一次史料が現存しないこととも関わっているが、遺構の規模・態様との関係で、この点の検討に課題を残している。

参考文献

宇土市史編纂委員会編　2007 『新宇土市史』通史編第2巻　宇土市

工藤敬一　1992 『荘園公領制の成立と内乱』思文閣出版

熊本大学・熊本県立美術館編　2006 『阿蘇家文書修復完成記念　阿蘇の文化遺産』（図録）熊本大学・熊本県立美術館

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター　2012 『永青文庫叢書 細川家文書 近世初期編』吉川弘文館

甲佐町　2013 『新甲佐町史』

杉本尚雄　1959 『中世の神社と社領』吉川弘文館

第２節　陣ノ内館跡の構造・年代・築城者

鵜嶋俊彦（熊本城調査研究センター）

１　遺跡の位置と「陣ノ内館跡」の伝承

「陣ノ内館跡」と呼ばれている遺跡は、甲佐谷（緑川）が平野に流れ出た直ぐの右岸台地に位置し、台地直下には甲佐町下豊内（しもどいのうち）集落がある。台地の標高は最高所となる土塁上で 105.7 m、台地上は 100 m前後で、集落からの比高は 70 m ほどを測る。

豊内は、地理的な位置によって古くから熊本平野と阿蘇・矢部方面との交通路上にあって経済上の結節点であり、軍略上の要衝でもあった。上流、上揚（かみあげ）には阿蘇神社の三末社の一つ甲佐神社があり、中世、甲佐神社の社領は益城郡一帯に分布し、南北朝時代には阿蘇氏一族の恵良惟澄が「甲佐城」を本拠に南朝方として活動としたこともあった。合戦中、惟澄が拠ったという「甲佐嶽」は、現在の甲佐岳の頂上（753.2 m）付近を連想させるが、上揚から平野部の有安へ抜ける山越えルート上の標高 264.5 mの分水嶺付近には堀切を有するが削平が未熟な小規模城郭のジョウノサコ城跡を確認しており、案外ここが「甲佐嶽」なのかもしれない。「甲佐城」は、上豊内の松尾城跡（近世には豊内城跡とも呼んだ）に比定されている。その後の戦国時代の大永３年、阿蘇惟前と豊州勢（大友方）との合戦では惟前が「甲左ニ陣取」している。この甲佐陣も甲佐城である可能性がある。松尾城跡の城下には『八代日記』に登場する天台宗「法念寺」があり、天文 12 年以降は衮衆（もしゅう）の根拠地の一つであり、在城者は近世編纂物に見える伊津野山城のほか、稲葉継陽氏は遺跡の直下に天文年間の板碑を残した村山刑部を挙げる。堅志田城とともに天正 13 年（1585）に島津氏の侵攻をうけ落城した「甲佐之囲」（『上井覚兼日記』）も松尾城跡のことであろう。

陣ノ内館跡については近世地誌に以下の記述がある。

（１）『拾集昔語』（『肥後古記集覧』巻二十八所収）

「惟前へは砥用・中山・甲佐、在々ニて過分の御知行被進、甲佐伊豆野居城松の尾の上、当分迄も御陣の内と申所の三、四丁四方も可有之平地一面の所、当分迄も大堀有之候処被成御殿作御安座御館被成候」

（２）『肥後国誌』「陣内ノ館迹」

「豊内村ノ上ニ陣内ト云城構ノ迹アリ阿蘇大宮司惟時ノ館迹ニテ城郭ノ迹ニハアラスト云」

（同書の補註）「惟時陣内ノ館ニ居住ノ事諸書ニ不見」

『拾集昔語』は陣ノ内館跡を戦国時代に堅志田城を本拠としていた阿蘇惟前の館跡とし、『肥後国誌』では南北朝時代の阿蘇惟時の館跡であって城郭ではないとする伝承を紹介するが、史料に惟時の居住を証するものがなく、補註では伝承を疑問としている。

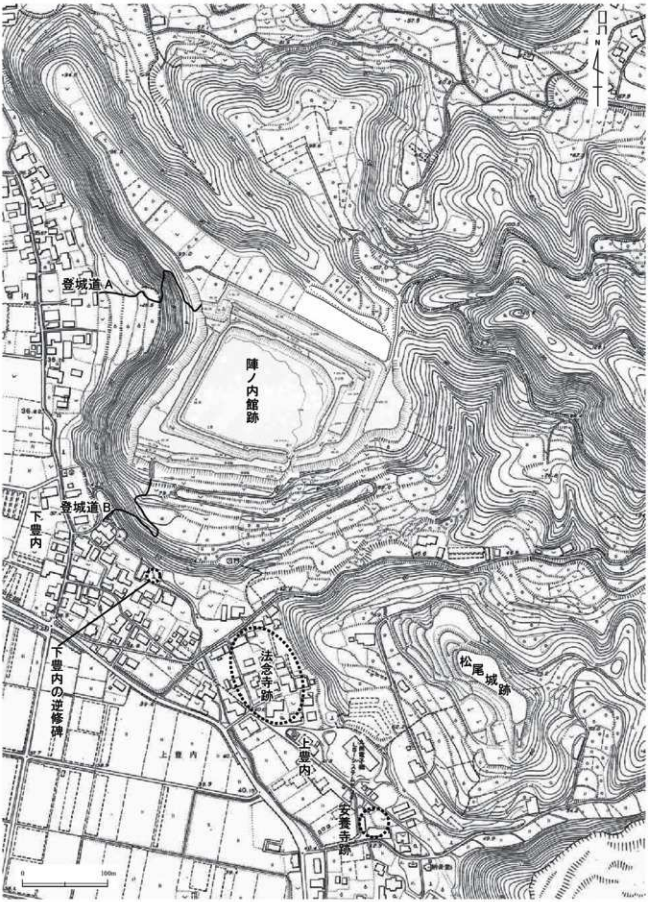


図4－2　陣ノ内館跡位置図（鶴嶋俊彦原図）

両書とも三、四丁四方もある平地に大堀がある様子や「城構」に注目しており、陣ノ内館跡の規模が両書の編纂された江戸時代にも目立ったものであったことが推測できる。

なお、『岩下町根元記』（恵照寺文書）には、「陣ノ内館跡」の西側麓にある岩下町の由来が見える（平凡社刊『熊本県の地名』「岩下町」）。最初は上豊内村のうちであったが、天正11年（1583）に下益城郡岩下村の伝右衛門が移り住み、その後、岩下村・西寒野村・上豊内村・下豊内村・上揚村から移住し、十竈になり、小西行長に村名を願い出た。同18年、初めの三竈が岩下村出身ということから岩下村と称することが許され、その後の寛文8年（1668）に九ノ日市場が立ち、翌年に岩下町と呼ばれる在町になったという。甲佐と小西行長の関係を記録したもので注目される。

2　陣ノ内館跡の構造

当遺跡の大きな特徴は、江戸時代にも衆人が注目していた直線的でかぎ型に残る大規模空堀である。その総延長は400mで、堀の幅が北辺・東辺ともに18m前後、深さも6mと近世城郭のそれに匹敵するほどの大きさがある。断面形状は底部が平坦な箱堀で、正確な直線で施工され、北西部に大きな「折れ」をもっている。この空堀の内側には大土塁がある。その規模は高さ3m～4m、幅が23～30mほどである。遺跡中央は平坦な台地であり、土塁が空堀に接してあることから空堀掘削の際の土砂を積み上げたものでることは明らかである。土塁の高さを勘案した空堀内側の見かけの深さ（高さ）は9m以上となる。

一方、発掘調査によって遺跡の南辺・西辺でも空堀と土塁が存在したことが確認されている。したがって、当遺跡は空堀と土塁で四方を囲んだ方形の城館タイプの城であったことがわかる。発掘で確認された空堀の規模は、幅5.6m～8.0m、深さが2.7m前後、堀底には平坦面があり箱堀のようである。城内側の切岸高を加算した深さは最大6mとなる。発掘調査では、この空堀の内側には幅10m程度の土塁があったことが土塁地業土の堆積によって確認されている。削平によって消滅した土塁の高さは知ることができないが、北辺の大土塁の構造を参考にすると、断面台形で1.5m～2m前後の高さであったと推定され、土塁を加算した切岸の高さは8mとなる。南西隅での横堀・土塁の内角は、北東角のそれに対応するように直角で、当遺跡が方形プランを強く意識したものであったことを示唆している。ただし、台地の南東側は地形上の制約から角欠きとなっていて空堀を設けることができず、高い切岸で塁線を確保している。

土塁と空堀、一部切岸によって外周を囲繞した方形プランの内郭の規模は、東西140m、南北が最大120mである。発掘調査によって、「キドマル」と呼称される南東隅に土塁が切れた通路が確認されている。土塁はわずかな高まりとなって残り、その痕跡が確認できない幅2.4mの窪地があり硬化面も確認されている。この前面はスロープとなり、西から伸びてきた横堀、東からの切岸が途切れていて、幅3mの土橋が造り出されている。

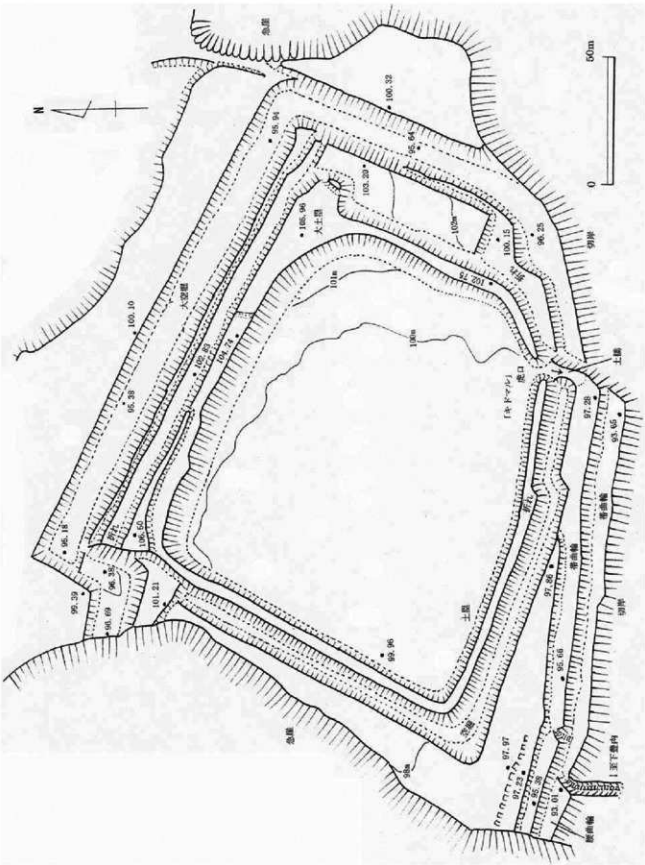


図４－３　陣ノ内館跡縄張り復元図（鶴嶋俊彦原図）

土橋の南側は、東方が急崖を利用した高い切岸となっている一方、西方は高さ3.6 mの切岸をもつ幅6 m程度の帯曲輪が西端の急崖まで伸びていて、その切岸下にも同様の帯曲輪が付属する。これより下位は、後世の開墾による削平地が連続した緩斜面となっている。現在、南斜面の東・西に台地上への通行に利用される二本の小道が里道として残る。東側のルートは上豊内方面からの登城に利用できるが、切岸や土橋を破壊したもので、当初からの城道ではない。西側のルートは下豊内の集落背後から下位の帯曲輪の西端に取り付いて登坂するものである。土橋との位置関係を勘案すると、下位帯曲輪に到達した城道は一旦東に曲がり、15 m東方の窪みから上位帯曲輪に登り、土橋に向うルートが復元できる。すなわち、帯曲輪西方で三度、鍵型に屈曲させる虎口を通過して外郭に上った敵兵は、左手に内郭からの側射を受けながら140 m東進したところでやっと土橋に到達し、一折れして内郭に至るという縄張りが想定できる。

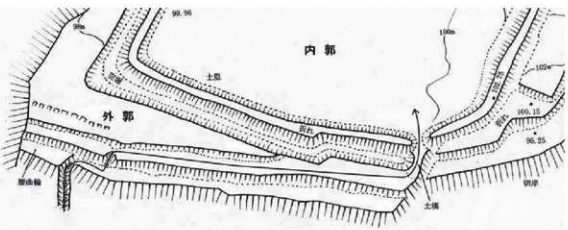


図4－4　陣ノ内館跡の城道（鶴嶋俊彦原図）

なお、内郭の切岸ラインのほぼ中央には長さ5 m弱の「折れ」が確認できる。前面の空堀も切岸に合わせて屈曲しており、土橋を渡る敵兵に対して西側から横矢を掛けるようになっている。虎口の東側40 m地点の塁線にも「折れ」が確認できる。

以上のように、当遺跡は東西南北とも横堀と土塁がセットとなった防塁で囲繞された方1町強規模の方形プランの城郭であった。特に背面となる北側や西側に関しては、素掘りとしては県内では例を見ない大規模な土塁と横堀を構築している。その普請量からすると、大規模な動員が可能であった権力を想定しないといけない。また、その権力は、直線状土塁や空堀のほか、土橋、塁線の「折れ」、鍵型に屈曲する城道を組み合わせた縄張りとする織豊系城郭と同様の知識を持っていた。

3　陣ノ内館跡をめぐる築城者に関する疑問

江戸時代の編纂物では、陣ノ内館跡の築城者を南北朝時代の阿蘇惟時や戦国時代前半期の阿蘇惟前とするが、同時代史料でこれを証するものはない。したがって、当遺跡の年代や築城者を考えるにあたっては考古学的な手法を用いて判断することになる。しかし、これまでの発掘調査では遺物の出土量が極めて少なく（このことが当遺跡の特徴の一つでもあるが）、遺跡年代の特定に困難を伴っている。したがって、遺跡年代や築城者を推定する方法は、発掘調査で得られた埋没遺構の特性や地表面観察の知見

による縄張り技術の把握が有効な手段となる。陣ノ内館跡の縄張りについては前述したので、ここでは江戸時代の編纂物に城主として見える人物に関わる遺跡を確認して、その伝承の正否について検討しておく。

（１）阿蘇惟時の場合

阿蘇惟時が甲佐にいた期間は、南北朝初期の建武４年（1337）から４年間ほどである。南郷谷の市下八郎入道道恵が担いだ阿蘇谷の（坂梨）孫熊丸が大宮司職について、その本拠を南郷谷とすると、惟時は惟澄とともに甲佐を拠点に益城を支配していた。興国二年（1341）の南郷城合戦で道恵・孫熊丸が討ち死にすると惟時は大宮司職に復帰したが、正平６年（1351）頃に死去したらしく、その後は娘婿で実力者であった惟澄が大宮司職を引き継いでいる。阿蘇大宮司の館跡（「南郷大宮司館」）とされる遺跡が南郷谷の二本木前遺跡とこれに隣接する祇園遺跡で調査されている。

①鎌倉時代の阿蘇大宮司館跡（南阿蘇村二本木前遺跡）

阿蘇南郷谷中央に位置する遺跡で、12 世紀後半からの館跡で、14 世紀半ばには光照寺という寺院に変化する。鎌倉時代には水濠を方形に区画された館として成立している。濠は逆台形の規格性のある大型のもので、東西 110 m、南北 150 m を区画していたと推定されていて、区画内部から掘立柱建物 10 軒、墓坑２基、井戸１基が検出されている。区画の濠は、幅４m、深さ２m程度で、鎌倉時代の地頭館などの「堀之内」に使用された区画を主目的に排水機能も併せ持った施設であった。

＊水野哲郎編著『二本木前遺跡』熊本県教育委員会　1998

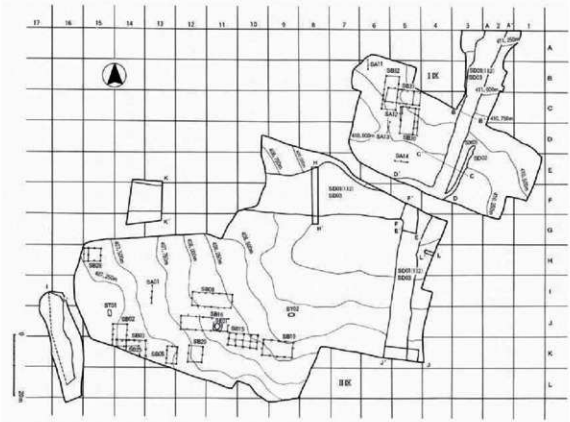


図４－５　鎌倉時代の阿蘇大宮司館跡（南阿蘇村二本木前遺跡）

②南北朝時代の阿蘇大宮司館跡（南阿蘇村祇園遺跡）

12世紀段階から14世紀まで、連綿と大型の館的な建物が造営されている遺跡である。B２期・C１期と編年された時代が13世紀後期から14世紀前期に相当し、惟時の大宮司職時代を含むことになる。前代の建物の建て替えである２軒の大型掘立柱建物と１軒の礎石建物が中心建物である。前代の13世紀中ごろに二本木前の大宮司の居館機能が移転したと考えられていているが、この期に相当する区画の溝などは未検出で館の規模は明確でない。

＊水野哲郎編著『祇園遺跡』熊本県教育委員会　2000

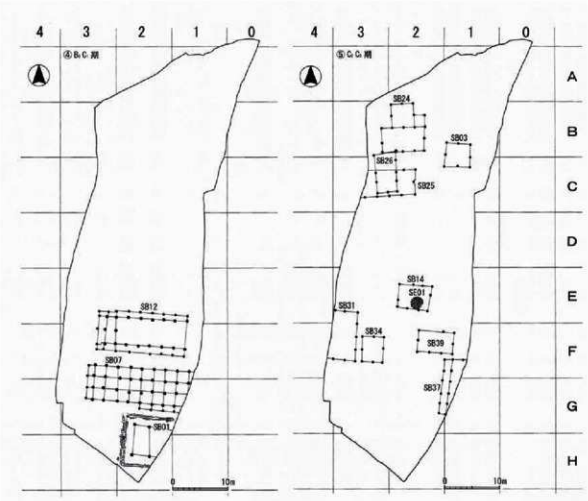


図４－６　南北朝時代の阿蘇大宮司館跡（南阿蘇村祇園遺跡）

③戦国時代の阿蘇大宮司館跡（山都町「浜の館」跡）

阿蘇大宮司の惟忠以降、大宮司居館は矢部に移転する。渡邊玄察の『古記集覧』には「神主公は彼御城辺ニ御陣の内とも浜の御所・浜の御屋形共申候所に被遊御在館候て被成御座候、」とあり、岩尾の城の近くに「御陣の内」「浜の御所」「浜の御屋形」などと呼ばれる場所に大宮司館があったことを記す。天正13年（1585）の島津氏の肥後侵攻を契機に幼年の大宮司惟光は矢部を脱出し目丸山中に逃亡し、「浜の館」の歴史が終わる。

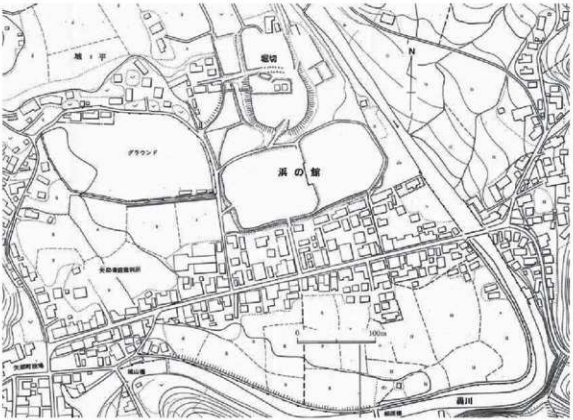


図４－７　戦国時代の阿蘇大宮司館跡（山都町「浜の館」跡）（鶴嶋俊彦原図）

当遺跡は菊川の右岸の河岸段丘上に位置し、その規模は東西 220 m南北 180 mとされている。全域が高校敷地となっている当遺跡は、1973 ～ 1976 年の校舎改築に伴う発掘調査によって礎石建物や庭園遺構が検出されている。現在の地表面の観察から考えられる浜の館の縄張りは、地形上から矢部神社がある丘陵部とこれより 12 m低い段丘部分に分かれる。丘陵部の神社の背後には幅７m、深さ３mの堀切の痕跡が確認できるが大半は校舎建設などで旧地形を失っている。段丘部は東西 210 m、南北 100 mの広さがあるが、全面を校舎が占めていて旧地形はうかがい知れない。ただし、中央で２mの段差があり、下位の東側段丘面に礎石建物や庭園遺構が確認されている。この段丘面（高校敷地内）に明瞭な城郭遺構は確認できないが、南・西側は高さ３m～４mの段丘崖となっていて切岸の役目を果たしている。この段丘崖の中位には菊川から引水された灌漑用水が流れていて、並行して近世の「日向往還」が通過している。

地形から考えられる浜の館は、菊川の蛇行を外濠に応用し、その北側の段丘面に段急崖を利用した館の本体を、またその背後の丘陵突端に１条の堀切を設けて詰めの城とした構造で、極めて単純な縄張りであった。

＊渡邊玄察「拾集物語」『古記集覧』所収　熊本市　2000 年

＊桑原憲彰他『浜の館　－阿蘇大宮司居館跡―』熊本県教育委員会　1977 年

（2）阿蘇惟前の場合

①甲佐町松尾城跡

陣ノ内館跡の南東 200 mに位置する城跡で、南北朝時代には阿蘇一族恵良惟澄の拠点となり、永禄頃や天正期頃には阿蘇家家臣の伊津野山城守の在城を伝える。

遺跡は標高 93.3 mの独立丘にあり、南北 200 mにわたって削平された曲輪群が展開する。最高所の曲輪は長軸 120 m短軸 30 mの地形に沿った不整形の曲輪で最も面積を有し主郭となる。この主郭の北西側稜線に小規模な腰曲輪群が付属する。墨線を示すものは郭群の切岸であり、堀切や空堀といった特段の城郭遺構は確認できない。こうした切岸を主体とする縄張りは、一般的に南北朝期の城郭の特徴であるが、阿蘇氏領域では戦国期に至るまで普遍的に見られる特徴で、阿蘇氏及びその家臣団にあっては城郭の縄張り技術は未熟なまま中世を終えたと考えられる。

図４－８　甲佐町松尾城跡（鶴嶋俊彦原図）

②美里町堅志田城跡

戦国時代中ごろの大永３年（1523）に甲佐や堅志田に勢力を置いた阿蘇惟前が築いた居城で、天文 12 年（1543）に惟前が滅亡すると、阿蘇惟豊の支配地となり天正 13 年（1585）に島津氏侵攻による落城まで存続した。

標高 256 mに主郭があり、大規模な堀切や切岸、畝状竪堀群がみられる。また、この主郭とは別峯に畝状竪堀群と堀切で囲繞されたコンパクトな城郭が付属しているのが特徴である。こうした重厚な縄張りは阿蘇氏領域には例外的事例で、阿蘇氏側の技術で築城されたものではないことが明白である。その技術を提供することが可能だったのは、肥後国で唯一畝状竪堀群採用した城郭を築城していた相良氏権力であり、その時期は相良氏が惟前に軍事的支援を行った天文９年（1540）頃に想定できる。

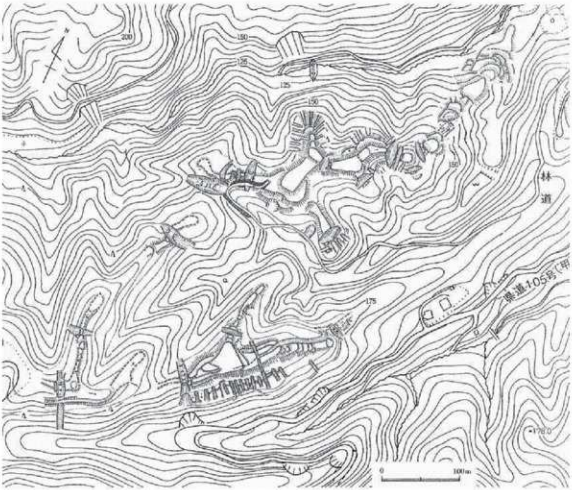


図４－９　美里町堅志田城跡（鶴嶋俊彦原図）

（３）まとめ

阿蘇氏は平安時代後期から南郷谷に居館を築いて大宮司職と惣領を継承してきた。その居館は鎌倉時代には方一町規模の区画溝をもった館であったが、埋没すると放置されたように恒常的なものではなかった。したがって、防御施設ではなく、居館の範囲を明示する区画の性格が強いものであった。南北朝時代に居館の場所は移動するが、区画の濠や溝は明確ではない。戦国時代の惟忠代に大宮司居館は矢部の「浜の館」に移転する。館部分は１町×２町規模を持つが、館の防御は高さ４ｍの段丘崖を切岸としたもので、詰めの城も堀切１条からなるだけの防御性が弱いものであった。

島津氏の侵攻に際して大宮司は事前に山中に逃亡しているように、大宮司居館に大規模な普請を行って籠城の拠点にするという発想がもともとなかったように思える。一方、阿蘇家の惣領・大宮司が使用した城郭や国人・家臣たちの城郭の縄張りも、相良氏の支援によって築城された堅志田城を除けば、居館同様に切岸に頼った未熟な城郭に留まるものであった。

こうした阿蘇氏関係の城館と陣ノ内館跡を比較すると、その規模・構造には大きな格差があり、陣ノ内館跡の築城者を阿蘇惟時や阿蘇惟前とする近世編纂物の記述が信用しがたいことがわかる。

4　織豊系城郭との比較

前述したように、陣ノ内館跡の背面に見られる土塁・横堀は、素掘りとしては県内では例を見ない大規模なものであった。そして、直線状土塁や空堀以外に、土橋、塁線の「折れ」、鍵型に屈曲する城道を有機的に配置して防御とする縄張りは織豊系城郭と共通するものである。肥後国における織豊系城郭の登場は、天正15年の豊臣秀吉の九州動座を契機に始まる。隈本城主となった佐々成政は早々に国衆一揆が勃発したため翌年失脚する。織豊大名として当然、隈本城の改修に着手していた可能性はあるが明確ではない。成政の後、加藤清正と小西行長が半国領主として入国した。加藤は隈本城、小西は宇土城を本城として城普請に着手するとともに、領国には端城を築いて領国支配に乗り出している。

ここでは豊臣直系大名の加藤・小西権力によって普請（新城・改修）された城郭と陣ノ内館跡に見られる横堀の規模を比較してその共通性と差異について考える。

陣ノ内館跡の横堀は、幅18ｍ、深さ6ｍ。土塁の高さを加算すると9ｍで、底面幅は11ｍあり、断面は急角度の切岸となる見事な箱堀である。先ず、戦国期の在地系城郭の代表事例として、名和氏の宇土城をあげ比較する。名和氏宇土城は主郭の西岡台の横堀で幅10ｍ、深さ5.5ｍ、三城西側横堀で幅13ｍ、深さ7.3ｍを測る。陣ノ内館跡の横堀が中世期の城郭の規模を大きく凌駕したものであることが分かる。

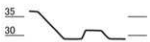
次に小西行長の城郭と比較する。隈庄城本丸南横堀（幅19.5ｍ、深さ8ｍ＋α）、木山城二ノ丸北横堀（幅18ｍ、深さは埋没により不明）、矢部城（愛藤寺城跡、加藤による改修の可能性もある）本丸西横堀（幅21ｍ、4.5ｍ＋α）、赤井城南横堀（幅27ｍ、深さ8ｍ）、小西築城と推定できる豊福城の本丸北横堀（幅26.5ｍ、深さ6ｍ＋α）である。以上は、石垣が確認されていない小西行長の城郭の横堀の事例で、隈庄城や木山城、矢部城の場合は陣ノ内館跡のそれとほぼ同規模となっている。これらの城郭の発掘調査はないか部分的に実態は必ずしも明確ではないが、どれも小西行長が在地系城郭を改修したものであり、織豊系城郭の縄張り技術が導入されながらも、石垣をもたないことは注目される。小西行長が石垣を使い新規に普請したとされる麦島城の本丸東濠では、幅24ｍ、深さ4ｍ＋αとなり、陣ノ内館跡を幅で凌駕している。

一方、石垣普請を伴う加藤清正の城郭では、宇土城（城山）本丸西横堀［幅39.5ｍ、深さ１３ｍ］、熊本城古城南濠［幅24ｍ、深さ8ｍ＋α］、熊本城本丸西堀［幅33ｍ、深さ20ｍ］、熊本城西出丸西堀［幅64ｍ、深さ14.5ｍ］、南関城本丸西堀［幅33ｍ、深さ10.5ｍ］、松江八代城本丸東濠［幅25ｍ、深さ7ｍ＋α］である。すべて陣ノ内館跡の数値を大きく超えている。

小西行長が本城とした宇土城は、のちに領主となった清正が本丸を惣石垣とする大改修をおこなっている。行長は主郭曲輪の上面に石塁を築いたが、切岸には石垣を採用しなかった（註１）。そのため「切立之城」と呼ばれたという（註２）。海浜に立地する麦島城を除けば、本城・支城ともに石垣を採用せず、支城は在地城郭を改修したものだった。行長の支城の横堀の場合は、陣ノ内館跡の横堀の規模と同規模であった。

宇土城（西岡台）主郭内堀東部

宇土城（西岡台）西縁横堀



甲佐陣ノ内館北横堀

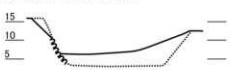
豊福城本丸北横堀

隈庄城本丸南横堀

赤井城南横堀

木山城北横堀

宇土城（城山）本丸西横堀



麦島八代城本丸東堀

麦島八代城本丸西堀

矢部城（愛藤寺城）本丸西横堀

熊本城本丸西堀（頬当御門北）

熊本城西出丸西堀

熊本城（古城）南堀

南関城本丸西堀

松江八代城本丸東堀

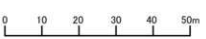


図４－１０　肥後国主要城郭の横堀断面図（鶴嶋俊彦原図）

5　結論

当遺跡については、平成14年に測量調査及び遺跡中央での遺構確認のための試掘調査が実施され、報告書では「県内最大級の館跡」と位置づけられている。

『肥後国誌』では、上豊内に阿蘇惟時の菩提寺で位牌があったという天台宗大雄寺跡のことを記す。阿蘇品保夫氏は、惟時は最晩年になり緑川右岸の甲佐社側に居を定めており、惟時の陣ノ内館跡という伝承は惟時の館が死後に大雄寺として菩提寺になった可能性を説く。このことを否定するものではないが、陣ノ内館跡の規模や縄張りは阿蘇氏の動員力や技術を遥かに超えたもので、当該城郭遺構の造営年代も織豊期に下るので築城者は別に考えなくてはならない。

候補者としては天正15年6月2日に領主となった佐々成政や天正16年（1588）から益城郡を含む肥後南半を領国として知行した小西行長か、慶長5年（1600）から肥後一国を知行した加藤清正の名が挙げられる。

近世初頭期における陣ノ内館跡の普請や城破りに関する史料は、何も残されていない。佐々成政は入国直ぐの7月に勃発した国衆一揆の対応に12月中旬まで追われていて、翌年正月には上洛を命じられ尼崎に幽閉、5月には切腹となった。一年に満たない統治期間にすぎず、その多くは一揆軍討伐に費やされていたはずで、本城の隈本城の普請も明らかでないうえに、隈本から離れて奥まった甲佐に築城する理由も考えられない。また清正が築城し運用していたものであれば、城破却に関して他の支城のように史料が残されて当然だし、加藤神社があって清正信仰が強い甲佐に築城の伝承がないのも疑問となる。

2003年以降、数度にわたり小西行長領国の全城郭を比較検討したうえで提唱したところだが、陣ノ内館跡にみられる石垣を使用しない素掘りの織豊系城郭という特徴は、小西行長の領国の本城である宇土城やその他の支城に共通する特徴であり、史料が残っていないことも、関ヶ原合戦に敗れ刑死した行長の築城を強く想起させものである（註3）。築城当時、陣ノ内館跡は「甲佐城」と呼ばれたと推定される。行長は矢部城を日向との国堺に配置しており、甲佐は本城宇土城との中間に位置することになる。当知行の目的のほか、繋ぎの城としての役目を負って築城されたのではないだろうか。また、益城郡は戦国時代には阿蘇社を戴く衆一揆と呼ばれた在地勢力の地盤で、甲佐はその信仰拠点の一つの甲佐社があった。矢部城と同様に阿蘇神社宗徒の勢力を抑える目的も想定される。

ところで、山内淳司氏は「城郭の起源そのものは中世の山城」とし、「織豊城郭の技術を導入して改修した可能性」をあげ、佐々成政入国時から小西行長領国時までを想定」し、成政の旧領の富山市にある安田城跡や白鳥城跡を類例に挙げている（註4）。たしかに2城跡のうち平城の安田城本丸は、水堀に囲まれた一辺80ｍの方形で上端幅10ｍの大土塁で囲繞されるという特徴があり陣ノ内館跡と類似している。しかし、この城は天正13年の秀吉の佐々成政攻めに際して秀吉本陣の白鳥城の支城として前田利家が造営し、その後は家臣の岡島一吉が在城したと推定されているように、成政と直接関わるものではないと考えられている。（註5）。

加藤家の改易後の寛永10年（1633）、新しく領主となった細川家の治世下に幕府巡検（「国廻り上使」）が行われている。本報告書別稿で稲葉継陽氏が指摘するように、

巡検の大きな目的には古八代（古麓）城や麦島城、興前寺之古城（関城）、矢部之古城など、肥後国の城破りの状況確認があった。幕府上使は早くから陣ノ内館跡の麓にあたる土井之内（土居之内）、すなわち豊内にも宿泊することを指定し、細川家に日程の調整をさせている。巡検関係史料には陣ノ内館のことは見えないが、当初から陣ノ内館跡の巡視を予定していた可能性も大きい。

当遺跡の発掘調査では出土遺物が僅少であり、建築遺構も明確なものは確認されていないため、このことが遺跡年代と築城者をよけいに不透明にしている。このことは、築城途中での普請の中止を示唆している可能性が強いと考えている。

註

（註１）『宇土城跡（城山）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第４集　1981

（註２）『肥後宇土軍記』（『宇土城跡（西岡台）』史料編　宇土市教育委員会　1977）

（註３）鶴嶋俊彦「小西行長領国の城郭」肥後考古学会第 226 回例会（麦島城特集）発表資料 2003 年。

鶴嶋俊彦「小西行長築城の城郭群」南九州城郭談話会　第 34 回見学会･例会（宇土城）

鶴嶋俊彦「陣ノ内館跡から考える肥後の城郭史」肥後考古学会　第 256 回例会（甲佐町）

（註４）山内淳司「肥後南部における小西系城郭の構造―麦島城跡を素材として―」肥後考古学会　第 246 回例会発表資料　2010 年７月

（註５）安田城跡資料館公式ホームページ『安田城跡　歴史の広場』富山市埋蔵文化財センター

第5章　総　　括

第1節　はじめに

陣ノ内館跡は、甲佐町を代表する城郭跡として、熊本県教育委員会による中世城郭の悉皆調査が行われた1970年代から注目され始めた。空堀や土塁など現地に残る大規模な遺構の保存状況や「拾集昔語」・「古城考」・『肥後国誌』に残る記録から、遺跡は昭和55年で町文化財「陣ノ内館跡」として指定される。文献資料に残る阿蘇大宮司惟前の館跡（「拾集昔語」「古城考」）・「阿蘇大宮司惟時の館跡（『肥後国誌』）とする記録から、中世城郭「阿蘇大宮司の館跡」として当時認識されていたが、その後の肥後国内の城郭研究の進展により「阿蘇大宮司の館跡」とする認識が疑問視され始める。本来遺跡の時期や構造・範囲を把握することで学術的な資料を得て適切な保存が行われることが可能となるが、掘削を伴う大規模な調査はほとんど行われず、中心部のみの小規模なトレンチ調査が行われたのみで、遺跡の時期や構造等は明確ではなかった。

今回平成20年度から、新たに埋蔵文化財発掘及び関連調査を6年間継続して実施できたことで、遺跡の範囲や構造の一部を把握し、今後遺跡を適切に保存・管理・活用するための有効な資料を得ることができた。また、学術的にも、陣ノ内館跡を中世城郭「阿蘇大宮司の館跡」という見方ではなく、別の見方を提起する資料を得ることができたと考えられる。

ここでは、その調査成果及び今後の課題についてまとめたい。

第2節　調査の成果

埋蔵文化財発掘調査では、「陣ノ内」の字を残す平坦地及び空堀・土塁の30箇所で掘削調査を行った。その結果、中心平坦部で石列遺構、土塁上で石敷き遺構、台地南側・西側で堀・土塁、台地南東側で入口を確認した。

(1) 館平坦部の堆積状況

南北に設定した、7を除く1から12トレンチで陣ノ内館跡平坦部の堆積状況を確認した。それを模式的に示したのが、図5-1になる。各トレンチでの詳細な色の名称は異なるが、基本層序をもとに上層から大きく分けると1層表土・2層旧耕作土・3層黒褐色土・4層明褐色土となる。

今回の発掘調査によって、堀・土塁は黒褐色土を掘りこむか又は黒褐色土に築かれていることが明らかになった。この黒褐色土からは、14世紀の遺物が出土、2トレンチ以北のトレンチでのみ堆積し、3トレンチ以南は堆積しないことから、3トレンチ以南は明褐色土上層までを後世に削られていることが分かる。

(2) 石列遺構

平坦部で確認した石列遺構は、溝状の遺構に伴うもので幅約1.0m、延長約16.0mを測る。溝は一連の掘削ではなく、部分的に途切れることが確認され、溝内には一部に加工痕が残る石部材がみられるものの、ほぼ自然石が入る。溝内の石は、平らな面を上に向けるなどの造作もみられ、上部構造を意識した造

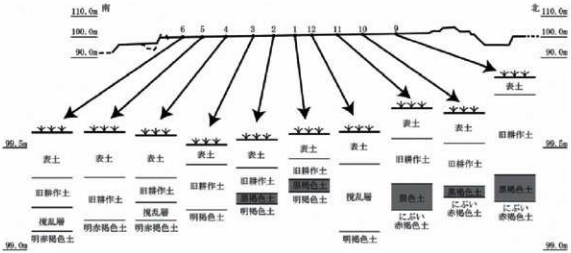


図 5-1　各トレンチの土層断面模式図

りとなる。平成 14 ～ 16 年度に実施された掘削調査で確認されている石列遺構の延長にあたり、現在の土地の境界を挟み南北 2 列にわたって造成されると考えられていたが、平成 21 年度の地下遺構の確認作業の結果、今回調査で出土した石列遺構の対となる北側の石列は存在しない可能性が高いことがわかった。

出土遺物は、時期が明確な 13 世紀後半の陶磁器以外は磨滅した土器類のみで時期判断は難しいが、近代のものは全く含まれないことから、近代以降の新しいものではない。その出土状況から建物等の区画を示す遺構、塀や柵の基礎となると考える。

溝に伴う石列遺構は、平坦部の北西部分を囲うように出土している。また、平成元年に行われた町文化財保護委員による調査では、この北西部で建物の礎石とみられる遺物を確認している（甲佐町文化財保護委員会編 1993）ことから、築城時にはこの部分を陣ノ内館の中心として想定していたとみることが出来る。但し、今回の調査では建物遺構は出土せず、更にそれを囲う石列も全面には回らないことが石列の分布範囲調査で明らかになっている。

(3) 石敷き遺構

石敷き遺構は、土塁上 3 箇所 (16・20・23 トレンチ) で確認した。トレンチ箇所により、石敷き遺構の幅や溝の掘り込み深度に差がみられるものの、熊本大学工学部の協力によってレーダー探査を行った結果、16 ～ 23 トレンチにみられる石敷きは土塁上を東西にわたり、連続的に続くことが判明している。土塁上に設置した構造物の基礎とみられるが、現況にある土塁線と合わせ土塁東端まで続かないため、造成途中の可能性もある。遺構の性格も含め、今後の調査で検討を要する。

(4) 堀・土塁・虎口・縄張り

7・13・14・15・18・21・24・29・30 トレンチで中心部を南及び西で回る堀、25・27・28・29・30 トレンチで堀に沿う土塁を確認した。確認した堀のうち土層確認のために一部を完掘したものは 7・13・15・18・21 トレンチの 3 箇所で、その他のトレンチでは堀の上端ラインの確認のみ行った。

南側の堀の上端の両端を同一トレンチ内で確認できているものは、13・14 トレンチのみで、残りの 24・18・7 トレンチの北側上端を斜面下と考え、堀の幅を想定した場合、堀の幅は以下の通りとなる。

7 トレンチ－ 5.6m、13 トレンチ－ 7.6m、14 トレンチ－ 9.0m、18 トレンチ－ 6.0m、24 トレンチ－ 8.0m

南側の堀は、中央部分が 5.6 ～ 6.0m と狭く、東西になるに従い 8.0 ～ 9.0m と開く構造をとる。また一部完掘した堀の深さは、以下の通りとなる。

18 トレンチ－ 2.85m、7 トレンチ－ 2.7m、13 トレンチ－ 2.7m

深さはほぼ統一して掘削されたものと考えられ、底は箱堀状を呈す。土層断面の観察から、一部を除き全て水平に堆積しており、人為的に埋め戻されたものとみられ、特に 13・14 トレンチは北側斜面を削って埋め戻したと考えられる。

西側崖面横のトレンチで完掘できた 15・21 トレンチ中央の 2 箇所で、土層断面から堀幅を復元した場合、幅 7.0 ～ 8.0m の堀が想定でき、これは南側の堀とほぼ同規模である。南側トレンチ南側西側で南北に走る堀は、29 トレンチで堀の掘りこみ角度が浅くなることから、この部分で堀は閉じると思われる。29 トレンチ北側は、面的に広がりをみせ、比高差が 1 メートル程度あるため、なんらかの施設があったことが想定される。西側で完掘した堀の深さは、15 トレンチ－ 2.6 メートル、21 トレンチ－ 2.6 メートルである。こちらも、南側と同様深さを統一している様子がみられ、埋土は水平に堆積しており、人為的な埋め戻しが考えられる。地形図と土地の境界を示した字図を合成したものが図 5-2 になるが、南側のトレンチで確認した堀の上端はほぼ全て（A・B）、西側のトレンチで確認した堀の上端は一部（C）で、土地の境界と合致している。

西側トレンチでは、25・28・29・30 トレンチで土塁の堆積を確認しており、現地には字図の境界と合致して微小な起伏が確認できることから（D）、西側堀に沿い南北に土塁があったことを想定できる。土塁の幅は 25・29 トレンチから判断して 9.5 ～ 10.0 メートル、土塁上層は壊されており高さは不明である。27・28 トレンチでは、それぞれ東西に延びる土塁を確認している。トレンチ間には、地形図上でコブ状の起伏を 2 箇所（E・F）確認でき、字図の境界と合致してさらに微小な起伏が南側斜面に沿って東西に延びる（G）。その起伏の規模から南側の土塁の規模は幅 5.0m 程度であったことが推定される。

土塁の造成には、北側土塁に「あげつち（上げ土）」という地名が残るよう、自然堆積の削りだし成形ではなく、搬入された土砂の盛り土であったことが、17・19・25・26・28・29 トレンチの堆積状況から明らかとなった。用いられた土砂は北側堀内の壁でみられる砂礫層と酷似していることから、堀掘削時に運び出した土砂を用い土塁を造成したとみられる。砂礫を中心にした盛り土は、

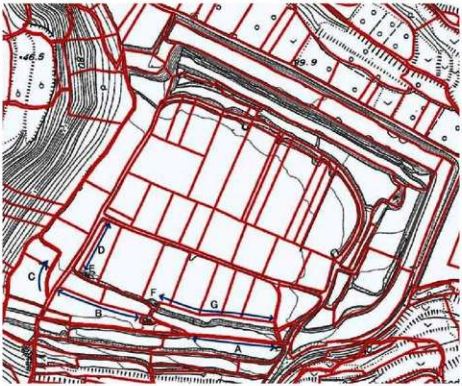


図 5-2　字図及び地形図の合成図（赤は字図・黒は地形図）

土塁中心に斜めに堆積しており、外側に板を立てる等の造作は確認されていない。一部に自然堆積層を削りそのまま盛り土したみられるトレンチも確認できる。(8・26・29 トレンチ）現況から判断できる北・東側堀の掘削量は 19,800㎥、それに沿う土塁の盛り土量は 24,800㎥と盛り土量が圧倒的に多いことからも、相当量が自然堆積層を削ることで確保されたとみられる。

27 トレンチでは、西側から延びる高まりと、東側から延びる高まりが中央で切れ（2.4m)、付近には『きどまる』の地名、南北に延びる土橋状の高まりが続き、中央には硬化面が確認できることから、陣ノ内館の虎口（入口）と推定される。

以上の発掘調査の成果を元に、現在の土地字図と地形図を合成し、南・西側の堀土塁線を推定した結果、図 5-3 の形状を復元することができる。平坦部を中心として、現況に残る北・東側の堀・土塁の他、南・西側も堀・土塁で囲んだ陣ノ内館は、南東端に虎口を構え四方を堀・土塁で囲った方形の城跡であったことが分かる。

土塁埋土に含まれる遺物は僅少で破片資料が多く、堀については遺物が比較的多く出土するが、19 世紀の遺物が堀の最下層から出土するなど、近現代まで造成当初の堀・土塁に近い形状を保っていたと考えられ、出土遺物だけでの造成時期の特定は難しい。しかし、陣ノ内館跡が方形区画の城跡であったとする調査成果は、中世期の築造とは考えるには難しく、鶴嶋氏が指摘する天正 15 年以降の造成とみるのが妥当と思われる。出土遺物の一部には 16 世紀末から 17 世紀初頭の遺物も出土していることからも、この時期に台地上で何らかの造成を行ったことが想定できる。

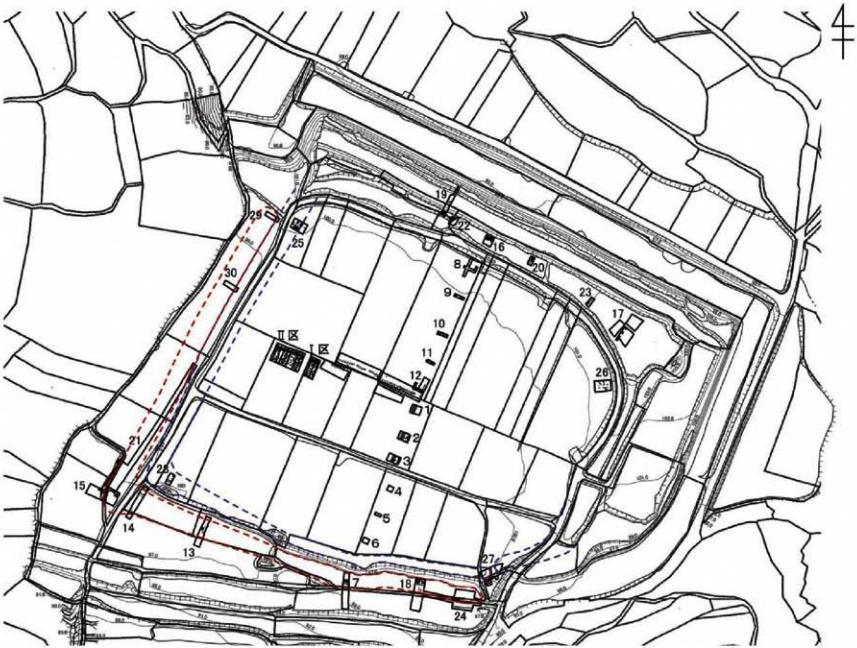


図 5-3　堀・土塁推定ライン（堀は赤の破線、土塁は青の破線）

また、今回の発掘調査と併せ実施した聞き取り調査で明らかになった二箇所の登城口や、そのうち南側斜面麓の登城口から虎口（入口）までの登城道を復元できたことは大きな成果といえる。さらに、『新甲佐町史』では甲佐町における標高差を赤色で示した赤色立体地図の詳細な分析から、陣ノ内館跡の西側崖下に流路が存在した可能性が指摘されている。(図 5-4) 城郭造成候補として選地された際には、緑川の中流域という交通網の要所というだけでなく、この中原地域を含む丘陵地全体を自然の河川で守らせる自然的な要素を組み込んだ選地が行われたとみられる。

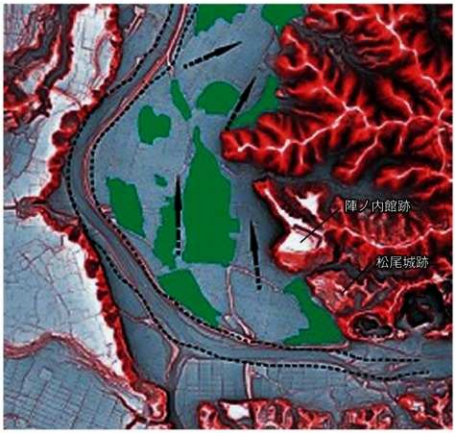


図 5-4　地形からみた緑川の流路と他の推定流路
（点線は旧緑川流路・矢印はその他の流路）

以上から、推測できる陣ノ内館跡の城としての縄張り範囲は図 5-5 と考えることができる。南側を正面に見据えた陣ノ内館跡は、堀・土塁で四方を囲み、縄張りは中原地域を含む。城には、南側・西側に２つの登り口があり、そのうち南側の１箇所からは東西に蛇行しながら台地上に登り、堀に沿って東進し土橋付近で北上、虎口・中心へと至る。

但し、今回の調査では堀や土塁、入口の造成が明らかとなったが、内部の建物等の遺構は出土せず、遺物の出土も少なかった。現在残る土塁の歪な形状や生活の痕跡がないことは、築城途中での普請の中止の可能性も考えられる。

(2) 陣ノ内館跡の時期変遷

今回の発掘調査での出土遺物は、縄文時代～近現代まで数時代にわたり出土

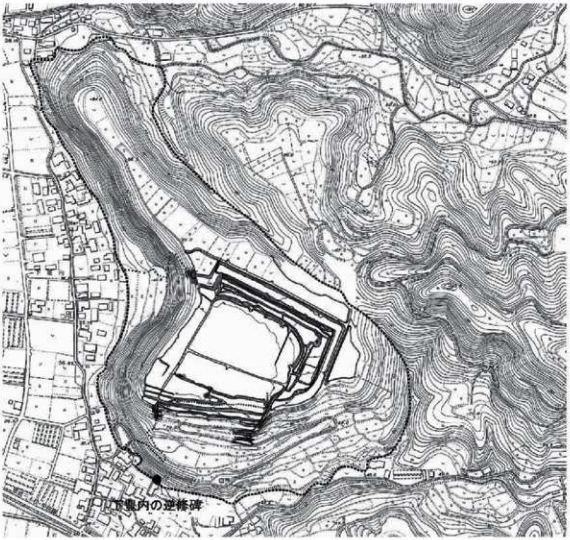


図 5-5　陣ノ内館跡の縄張り想定図

する。出土箇所は平坦部の南側（1～6トレンチ）が極端に少なく、土塁上を除く外周部のトレンチにまとまって出土する傾向にあるといえるが、出土量は全体に僅少で当時の生活の復元までは難しい状況にある。また、明確に遺構に伴い出土するものは少なく、必ずしも遺構の造成時期を示すものではない状況にある。したがって、第4章において稲葉・鶴嶋両氏により論じられた文献資料と他遺跡の出土状況を併せながら、陣ノ内館跡の台地利用開始時期を含め変遷をまとめる。

陣ノ内館跡で出土した遺物でもっとも遡ることができるのは、縄文時代後期のもので押型文土器が出土している。遺構は出土していないが、このころからこの台地の利用が始まったと考えられる。続いて弥生時代中～後期の土器が出土する。また、古墳時代終わりになると、西側崖下に横穴墓が造られ始める。弥生から古墳時代を通して遺構は確認できなかったが、なんらかの生活が行われていた可能性は考えられる。

この後、明確に時期が特定できるような遺物が出土するのは、12～14世紀の

もので、海外のものでは同安窯・龍泉窯系の青磁、華南産の白磁がみられるようになる。また1点ではあるが、高麗象嵌青磁も出土している。国産のものとしては、東播系の須恵器の他、古瀬戸の陶器も出土している。器種は、いずれも椀・鉢が主で、今回調査した土塁上を除くトレンチ全体から出土するが、当該時期の遺構は確認できていない。14世紀には、甲佐社領の維持・回復のため恵良惟澄が「甲佐城」を本拠地として戦った記録が「阿蘇家文書」に残る。中世城郭として隣接する松尾城跡の正式な調査は行われていないことから甲佐城の特定は難しいが、この時期に陣ノ内館が恵良惟澄の本拠とした可能性を示唆するものである。

次に現れるのは、16世紀前半から中葉のもので景德鎮窯の染付が主に出土する。いずれも小片であるが、器種は椀が主である。陣ノ内館跡南側斜面麓にある町文化財「下豊内の逆修碑」は、16世紀中葉に陣ノ内館周辺が阿蘇氏勢力の一拠点であったことを示す資料であるが、これと併せ陣ノ内館跡は隣接する「松尾城跡」とともに阿蘇氏関連の遺跡として認識する必要があると考えられる。地名にのこされた安養寺・法然寺等の寺院の存在は、陣ノ内館跡麓集落の城下町的発達を裏付け、陣ノ内館の形成・存続とも関係する。

16世紀末から17世紀初頭のものとして、漳州窯系の陶磁器が出土する。器種は皿が主体である。今のところ文献資料では明確な資料は伺われないが、発掘調査の遺構の出土状況と併せ第4章において鶴嶋氏が他城跡との比較から指摘するように、この時期に堀・土塁が造成されたとみられる。この時期、城主の候補として挙げられる小西行長の城には、緑川上流に矢部城、下流に宇土城がある。特に甲佐は中世以後の交通網の矢部―宇土間の中継点に位置し、小西は矢部においては中世まで地域の中心であった浜の館からあえてより緑川に近い愛藤寺一帯を選地、矢部城を築城した。このことは、小西が益城郡支配の主軸として緑川流域を中心とした城郭配置プランを考えた表れであり、上流と下流を繋ぐ中流域の拠点城郭として陣ノ内館を築くことへにながる可能性を示唆する。(山都町教委　2012) しかし、現況や遺構の出土状況から、本来の城として完成し機能していたかは疑問を残すとともに、築城途上であったため城郭としてはっきりと文献資料に登場しないともみることができる。

また、稲葉氏が指摘するように1633年には、幕府の上使衆が上豊内に宿泊する記録が残るがこれは、戦国～織豊期の古城跡の調査を目的としていたとみられる。手狭な上豊内にあえて宿泊する理由として、陣ノ内館が破壊を免れ、造成当初に近い城として機能できる形状を保っていたためとも考えられる。

その後、19世紀以降に陣ノ内館跡は大きく改変される。当該時期の肥前系の陶磁器が、旧耕作層や堀の埋土から多く出土する。南・西側の堀はこの時期に堀に沿う土塁を崩しながら埋められたものとみられ、現在の地形に近い形状になったものとみられる。

以上陣ノ内館跡の時期変遷についてまとめたが、限りある資料からの推定であり不明な点も多い。今後の調査の進展に期待したい。

第３節　今後の課題

陣ノ内館跡の発掘調査では、文献等関連調査を併せて実施することで、多くの資料を収集することが出来た。特にトレンチ調査では部分的な把握で終始してしまうことが多いなか、地下構造物の確認作業や地域での聞き取り、地形の現況、字図との比較検討で、麓を含めた縄張りをもつ方形区画の城であったことが復元できた。また、発掘調査での数少ない出土遺物・遺構を補完する形で稲葉氏の文献資料による 14 ～ 16 世紀における豊内地域の歴史的環境、16 世紀の豊内地域の城下町的発達、城郭形成後の豊内地域の検討や鶴嶋氏の中世から近世までを含めた他遺跡の遺構や縄張り図の詳細な比較から、基本的な遺跡の時期変遷を追うことが出来たのは重要な成果といえる。内容については異論等多くの指摘があると思われるが、今後の遺跡の保存・活用する上での材料としてご意見頂ければと思う。

今回の調査成果における今後の課題として以下のことがあげられる。

(1) 中心平坦部の遺構の把握

今回陣ノ内館跡の発掘調査は平坦部及び外周を行ったが、調査方法もトレンチ調査主体で実施していることから、面的な遺構の把握まで至っていない。調査成果により、南側の遺構分布は期待できないが、館の中心部は北西側に分布した可能性があり、発掘調査によって陣ノ内館跡の城郭内部構成を図る必要がある。

(2) 南側登城道の詳細な調査による確定

今回の調査では、発掘で明らかになった南側堀の形状や地形の現況、地形図と字図の合成によって、南側登城道の経路を推定することが出来た。但し、これは道に伴う遺構を確認したわけではない。今後調査によって、遺構の確認等を通じこの経路を確定させる必要がある。

(3) 西側崖下からの登城道

聞き取り調査や字図、現況地形の判読から西側崖下からの登城道は、麓から北側堀まで推定できたが、今回の調査では虎口まで至るルートを特定できなかった。城となる前の旧地形の復元を含め、陣ノ内館跡の構造を把握する上で検討を要する。

(4) 北・東に延びる堀の構造・年代

発掘調査を実施していない現地に残る北・東側に延びる堀は、構造・年代ともに未確認であり、地下構造物の確認調査では堀の斜面下に反応があることから、堀に石垣を用いた可能性もある。陣ノ内館跡の築城プランを図るためにも、調査によって北・東に延びる堀の構造・年代を明らかにする必要がある。

(5) 中原地域の遺構の確認

現況地形及び登城道、赤色立体地図の分析から中原地域を含む縄張り範囲を推定したが、中原地域では発掘調査を実施していない。鶴嶋氏の指摘する築城中止の可能性があることから遺構が出土しないことも考えられるが、今後の適切な保存のためにも、縄張りの推定範囲外として小平原地域を含めて遺構の有無・堆積状況等を把握する必要がある。

(6) 甲佐城の存在

「阿蘇家文書」に残る甲佐城は、町民の一般的な認識として、隣接する「松尾城」とする見方が強い。しかし、今回の調査で 14 世紀の遺物が陣ノ内館跡で出土したことで、陣ノ内館跡で何らかの活動や生活が行われていることが明らかとなった。具体的な遺構は確認できていないが、今回発掘調査で確認できた黒褐色土は、14 世紀の堆積層として土塁下に広範囲に堆積しており、下層に良好な状態で遺

構が保存されている可能性がある。今後松尾城跡や中世寺院跡の調査を含めて実施することで、鎌倉～南北朝期において肥後の代表的勢力である阿蘇氏の城郭構造・配置を復元することができる。

(7) 関連遺跡・類似遺構の調査

今回の発掘調査の成果で陣ノ内館跡が近世初期の城跡であった可能性が高いことが明らかとなった。当該時期のうち小西行長の築城の可能性が鶴嶋氏により示唆されているが、文献資料で明示したものではなく、現地形或いは遺構の比較から判断したもので、確定するには至らない。そのためには、小西氏支城の調査が進み、縄張りを含めた遺構全体の比較や文献資料の調査研究の累積が城主の特定につながるものと考えられ、今後戦国末～近世初期の肥後国内において陣ノ内館跡が果たした歴史的意義が明らかになるとみられる。

今回の6年間にわたる発掘調査及び関連調査によって陣ノ内館跡の一部ではあるが規模・構造を把握し、新たな成果を得ることが出来た。

多忙な中に、調査専門委員長を引き受けて頂いた甲元眞之先生をはじめ、小野正敏先生・稲葉継陽先生には、調査開始前から多くの点でご教授頂き、最後までお付き合い頂いた。更に、池辺伸一郎・稲葉継陽・鶴嶋俊彦先生におかれては、本発掘調査報告書の為に玉稿を賜ったことで陣ノ内館跡の地理・歴史的意義を学術的に後押しして頂くことができた。特に、稲葉・鶴嶋両先生におかれては、事業途上で町民向けの研修会での講師を引き受け、発掘調査という専門性の高い事業を分かりやすく講演頂いたことで町民の事業全体への理解につなげることが出来た。諸先生方のご指導・ご鞭撻なしに、本発掘調査報告書の作成は出来なかった。改めて感謝申し上げたい。

最後に、今回の事業の実施にあたっては、地元下豊内地域在住の清村一男氏の多大な支援があってなされた。地域の歴史を掘り下げ、遺跡を保護し地域を盛り上げる材料として活用したいという強い思いから事業全体に深く関わり、聞き取り調査や調査対象地の地権者との調整等、地域在住でこそなしえる協力を頂き、事業開始・推進を後押しして頂いた。記して感謝申し上げたい。

【主な参考文献】

阿蘇品保夫　1999　『阿蘇社と大宮司』一の宮町史編纂委員会
北嶋雪山　1971　『国郡一統志』　青潮社
甲佐町史編纂委員会　2013『新甲佐町史』甲佐町
甲佐町文化財保護委員会編　1993　『甲佐町の文化財』第二集　甲佐町・甲佐町教育員会
甲佐町土地改良区編　1976　『岩鼻神社略記』甲佐町土地改良区
新宇土市史編纂委員会　2007　『新宇土市史』通史編第2巻中世・近世
東京大学史料編纂所編　1976　『大日本近世史料　細川家史料5』東京大学出版会
東京大学史料編纂所編　1988　『大日本近世史料　細川家史料11』東京大学出版会
鶴嶋俊彦　2002　『「衆衆」考』『ひとよし歴史研究』第5号　人吉市教育委員会・人吉市文化財保護委員会
日本加除出版株式会社出版部編　1901　『日本行政区画便覧』日本加除出版株式会社
古城貞吉編　1909　『肥後文献叢書』第一巻　隆文館
古城定吉編　1910　『肥後文献叢書』第四巻　隆文館
森本一瑞編　1972　『肥後国誌』下巻　青潮社

【報告書】

熊本県教育委員会　1978　『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集
宇土市教育委員会　1977　『宇土城跡（西岡台）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集
宇土市教育委員会　1981　『宇土城跡（城山）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集
宇土市教育委員会　1982　『宇土城跡（城山）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第7集
宇土市教育委員会　1984　『宇土城跡（城山）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集
甲佐町教育委員会　2005　『陣ノ内館跡』甲佐町文化財調査報告
八代市教育委員会　2006　『麦島城跡―都市計画道路建設に伴う発掘調査―』
八代市文化財調査報告第30集
八代市教育委員会　2013　『八代城郭群―古麓城跡・麦島城跡・八代城跡・松浜軒・平山瓦窯跡―』
八代市文化財調査報告書第45集
山都町教育委員会　2012　『矢部城（愛藤寺城）測量調査報告書』山都町文化財調査報告書第3集

写真図版1

昭和22年11月19日　米極東空軍撮影

陣ノ内館跡周辺の旧字図　明治時代作成

虎口出土状況　東から

虎口出土状況　南から

14 トレンチ　堀検出状況　西から

21 トレンチ　堀埋土堆積状況　南から

24 トレンチ堀検出状況　東から

25 トレンチ　土塁検出状況　北東から

25 トレンチ　土塁堆積状況　南から

27 トレンチ　土塁堆積状況　北から

写真図版 11・12

19 トレンチ　土塁北面堆積状況　北から

17 トレンチ　土塁堆積状況　東から

写真図版 13・14

Ⅱ区　石列検出状況　南東から

Ⅰ区東側出土状況　北から

写真図版 15・16

Ⅱ区東側　石列下層出土状況　南西から

Ⅱ区東側　石列完掘状況　西から

写真図版 17・18

22 トレンチ　出土状況　南東から

23 トレンチ　石敷き遺構完掘状況　東から

出土陶磁器　12 世紀～ 14 世紀

出土陶磁器　16 世紀～ 17 世紀

報告書抄録

ふりがな	じんのうちやかたあと
書名	陣ノ内館跡
シリーズ名	甲佐町文化財調査報告第３集
編著者名	西口貴志
編集機関	熊本県甲佐町教育委員会
所在地	〒861-4696　熊本県上益城郡甲佐町大字豊内719番地４
発行年月日	平成27年３月

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
陣ノ内館跡	上益城郡 甲佐町大字豊内 字陣ノ内	444	016	323859	1304859	平成20年４月 ～平成27年３月	1,152㎡	範囲確認 調査
	種別	主な年代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	館	中世 ・近世	堀・土塁・虎口		土器・陶磁器			

甲佐町文化財調査報告第３集

陣ノ内館跡

平成27年３月

発　行：甲佐町教育委員会
〒861-4696
熊本県上益城郡甲佐町大字豊内719番地4
TEL：096-234-2447

印　刷：株式会社　協和印刷
〒868-0408
熊本県球磨郡あさぎり町免田東1496番地20
TEL：0966-45-1119